

ゆか



目次

「ゆかり」巻頭言	小仲信孝	3
2025年度 跡見学園女子大学の地域交流活動の概況	土居洋平	4
跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について —2025年度の活動状況と課題の分析— ...	土居洋平	8
特集 2025年度地域交流活動	跡見学園女子大学地域交流センター	18
都内日本語学校における留学生との交流企画の実践報告	齋藤敬太	19
令和7年度「東京国際映画祭25 インターンシップ・ゼミ生参加」についての報告 松浦雅子・大関妃菜・添田望乃・松枝汐梨・神藤愛子・齋藤茉由・河井香乃・中村優衣		22
地域連携を活用した大学と地域双方の次世代育成 一心を育てる人材育成を目指して—	福島里美	25
成女高等学校 高大連携研究	松崎くみ子	28
インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 一障害児と健常児が一緒に遊べる空間を目指して—	赤松瑞枝	31
防災フェスタブース出展による研究成果報告 一フェーズフリーの定義理解と実践を促す試み—	赤松瑞枝	34
食品専門スーパーマーケットとの産学連携による商品開発プロジェクト (第3弾)	石渡尚子	37
食育出張授業「バナナうちで元気な子! ~生活リズムを整えよう~」2025年度活動報告	石渡尚子	40
文京ハッピーベジタブルフェスタ2025の出展	石渡尚子	43
塩月ゼミでの袴を用いた横浜市活性化活動 —「第73回 ザ よこはまパレード(国際仮装行列)」および「馬車道まつり2025」への参加を通して—	塩月亮子	45
「トラベルライティングアワード新座賞」における2025年度の活動	三原昌巳	49
文京区エアスタディ(社会調査実習)	佐野美智子	52
白保地区みんなで助かる津波避難 ~石垣市白保地区地区防災計画~	鍵屋 一	55
秋田県鹿市での「ひなさんぼ」の実践	鍵屋 一	58
令和7年度 盛岡市「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」実施報告 赤間珠希・辻本弥音・戸ヶ崎愛香・樋口由菜・篠崎健司		61
2025年度 山形県西村山郡西川町・大井沢との連携事業について	土居洋平	65
みんなのわこらぼまつり2025への協力について	土居洋平	67
第40回文京朝顔・ほおずき市への協力について	土居洋平	69
RUN伴文京区への協力について	土居洋平	71
2025年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について	土居洋平	74
委員就任をきっかけにした東久留米市との連携の展開について	土居洋平	76

第6回「 ^{ふみ みやこ} 文の京書道展」開催報告	香取潤哉	79
銭湯からつなげる地域の輪	石田結菜	85
跡見「学芸員」in菊坂 活動報告 菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(6)		
栗生はるか・新井美鈴・池亀袖衣・今井舞・大迫陽毬・黒木真悠・佐藤葵・ 鈴木未來・鈴木みづき・杉山恭子・玉野空・土田芽依・豊永陽彩・内藤日香理		87
旧伊勢屋質店地域交流イベント「一葉忌に合わせた旧伊勢屋質店ガイド」		
栗生はるか・新井美鈴・池亀袖衣・今井舞・大迫陽毬・佐藤葵・ 鈴木未來・鈴木みづき・杉山恭子・土田芽依・豊永陽彩・内藤日香理		91
旧伊勢屋質店特別企画展「調べ、扱い、遺す ー現代の私たちと旧伊勢屋質店ー」開催の記録		
土居洋平・長谷川裕子・鈴木みづき・新井美鈴・大迫陽毬・佐藤葵・鈴木未來・ 土田芽依・池亀袖衣・杉山恭子・豊永陽彩・小玉采奈・津島誇乃佳・黒木真悠		94
メディアで紹介された旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)〈紹介日順〉	地域交流センター	101
2025年度の地域交流関連活動記録	地域交流センター	102
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程		118

【表紙】

- ・RUN伴文京区で、学生によるランナーへの施設案内(菊坂跡見塾)(右上)
- ・石渡ゼミ学生による、小学校での食育出張授業の様子(右下)
- ・文京・朝顔ほおずき市で、学生による記念撮影コーナー運営(傳通院本堂前)(左)

「ゆかり」巻頭言

学長 小仲信孝

令和7年12月13日に開催した「パラアスリート交流会 ―“視えない”から生まれる可能性―」には衝撃を受けた。「衝撃」というと大袈裟に聞こえるかもしれないが、正直なところ、自分の不明を恥じなければならぬほどの新鮮な驚きと発見があった。

この交流会は、視覚障害を持つ方と社会をつなげる活動にも精力的に取り組んでいる気鋭の歌人・佐佐木頼綱さんの発案により、学生団体「ボランティア委員会さくら」の主催で実施したものである。視覚障害への理解を深め、共生社会について主体的に考えるきっかけとなることを期待する企画であったが、学生たちにとっては期待以上に学びや気づきの多い交流会となったようである。

なかでも特筆しておきたいのは、学生たちが視覚障害者との交流を異文化体験とは捉えていなかったことである。私たちは、というより私自身は視覚障害者と向き合おうとすると、どうしても身構えてしまう。視覚障害者を「他者」と捉えているからだろう。かつて私のゼミに視覚障害のある学生が在籍していたことがある。彼女は向学心が強く、何ごとにも他の学生以上に意欲的だったので特別な指導は必要がないほどであったが、私はつねに配慮が不足していないか気になっていた。視覚障害があることを過剰に意識し、ほかの学生とは違う「他者」として、どこかでお客様扱いしていたからであろう。その意味で彼女との2年間は私にとって異文化体験に他ならなかった。

しかし、今回、交流会に参加した学生たちは異文化体験をしたとは思ってもいないであろう。会の終了後、学生たちに感想を聞いてみた。「多文化共生社会を生きる者として、共感と理解が大切であることを学んだ」など、通り一遍の優等生的な回答は誰からも返ってこなかった。学生たちは視覚障害者が自分たちと地づきの世界を生きる近しい隣人であることを自然体で受け止めていた。学生たちはすでに、ことさら意識することもなく、多文化共生時代を生き始めていることを知った。

不明を恥じなければならぬことは、もう一つあった。大学の地域交流活動の在り方についてである。大学と地域の結びつきというと、すぐに行政との連携を思い浮かべてしまう。本学も文京区や新座市との連携に力を入れてきたが、行政との連携事業の課題は定型化しやすいということであろう。定型化できれば安心感はある。ただ、その分、携わる教員も参加する学生も限定的となり、企画そのものも知らず知らず陳腐化して魅力を失う。

今回の交流会を体験して改めて教えられたのは、地域との結びつきの根幹は「人」であるということである。参加した学生たちの充実感にあふれた笑顔は、人との結びつきの可能性には限界がないということを示唆していた。従来型の地域連携の在り方に疑問を感じるのは、自分自身の硬直化した行政的思考回路に起因することに気づかされた。

「パラアスリート交流会」は、私にとっても期待以上の学びや気づきをもたらしてくれる貴重な体験となった。

2025年度 跡見学園女子大学の地域交流活動の概況

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

本学の地域交流センターが現在の形となり、本学において地域交流活動の全体像を把握しながら展開をしていけるようになったのが2019年度であった。ただし、2020年度以降は周知のとおり、新型コロナウイルス感染症による行動制限等の影響により地域交流活動も大きく影響を受け、その後しばらくは思うような展開ができてこなかった。ようやく一昨年度ぐらいから全体の活動の規模では、コロナ禍前と同水準程度にまで回復してきたものの、この間の学生の入れ替わり等により、地域交流活動のノウハウを新たに学生が習得する必要があった。また、この間に停滞した地域との関係も再構築していく必要もあり、その内容については変化を余儀なくされたところである。そして、ようやく昨年度からは、コロナ禍以後の新しい形での地域交流活動が展開・定着してきたところであった(土屋, 2025)。

そして2025年度の地域交流活動は、久々にコロナ禍のことは全く考慮にいれることなく実施できた一年であったといえよう。そこで本稿では、改めて本学の地域交流活動を分類しながら今年度の実施状況について報告したい。

2. 2025年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の概況

本学の地域交流活動は、大きくは4つに分類できる。1点目が、教員やゼミ、学科等を軸に教育研究活動の一環として実施されてきたものである。2点目は、自治体等からの依頼に基づき、地域交流センターが学内で教員や学部学科とのマッチングを担当して実施されてきたものである。3点目は、自治体からの委託に基づいて実施している事業、いわゆる受託事業である。4点目は、上記とは別に地域交流センターが企画し独自に実施している事業である。以下、それぞれについて概況を示したい。

(1) 教員やゼミ、学科等を軸に教育研究・社会貢献活動の一環として実施される地域交流活動

これは、教員個人や教員の持つゼミナールの活動で地域と連携しながら実施する教育研究・社会貢献活動や、学科単位や学部単位で実施する活動で実施する教育研究・社会貢献活動で、地域交流センターが設立される前から多々実施されてきたものである。

地域交流センター設立後は、学内地域交流活動調査を年一度実施しており、それによりこの種の地域交流活動の実施状況を把握し結果を本誌にて公開している。また、地域交流センターでは、(2)で示すような外部からの依頼があった際は、依頼内容を踏まえ専門性の合致する教員・ゼミナールに取り次ぐ等、外部からの要請と学内のマッチング業務を担っている。

今年度のこうした活動の概況については、本誌別稿「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状につ

いて「2025年度の活動状況と課題の分析」を参照頂ければと思うが、ここでは、今後に向けての課題の概況について記しておきたい。別稿でも記したとおり、現在、本学の地域交流課活動の過半数が2026年度入試から募集停止をした3学科（文学部コミュニケーション文化学科・マネジメント学部生活環境マネジメント学科・観光コミュニティ学部まちづくり学科）のものである。大学では、今後も学部学科再編が検討されており、長期的には募集停止学科の学びも今後にも再編後の学部学科において継続する可能性があるものの、少なくとも一時的には3学科のゼミを軸にした活動は、同様の形での継続が難しくなるであろう。地域交流センターとしては、これを大きな課題として捉えており、募集停止学科のゼミが縮小をしはじめる2027年度以降、学部学科再編の過程においても可能な限り活動が継続すべく、新たな活動の担い手の学内での募集等、調整を進めていきたいと考えている。

(2) 自治体等からの依頼に基づき、地域交流センターが調整し実施される地域交流活動

地域交流センターが設立以来、自治体や地域団体、企業等からの依頼は学内でも地域交流センターが取り扱うようになってきた。地域交流センターは、そうした外部団体からの依頼相談に対するワンストップ窓口として、各種団体からの依頼や相談を日常的に受け、また、要望内容に応じて学部学科、教員個人、ゼミナール、各部署、学内学生団体との調整を行い地域交流活動等の展開を図ってきた。

今年度からのものではないが、センターが設立された2019年度には文京区と友好都市提携を結び盛岡市が文京区内での大学との連携を模索し、文京区担当部署から本学が紹介され、事業実施に向けた相談を受けている。ここでの相談内容を踏まえ、コロナ禍の後に区内4大学（後に2校増え現在は6大学）が参加する「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」が具体化し、今年度も事業が展開している。

2025年度に実施されている地域交流事業のうち、新座キャンパス近隣のなかでは「新座市内3大学学生と市長との懇談会（新座市）」、「子どもひろばボランティア活動（NPO法人 新座子育てネットワーク）」、「第4回むさしの美術展覧会（武蔵野文化連盟）」等は、自治体や地域団体からの依頼に基づいて地域交流センターで調整して実施に至った活動である。

このなかでは、「第4回むさしの美術展覧会」は2025年度からのものである。発端は、新座市近隣で芸術振興を行っている武蔵野文化連盟関係者が近隣の大学との連携を模索しているということで、4月に相談に来たことであった。地域交流センターで対応し、学生課を経由して本学写真部に呼びかけ、10月には武蔵野文化連盟・立教大学写真サークルシャッターズ・本学写真部による合同の展覧会である「第4回むさしの美術展覧会」の実施に至っている。また、ここに至る連携の過程で、立教大学の写真サークルと本学写真部が合同で活動する機会もあった。

また、文京キャンパス近隣のなかでも「放課後学習支援・校庭開放（文京区立小日向台町小学校）」、「行こうよ！文京浴場♨～学生プロジェクト～（文京浴場組合）」、「礪川マラソン（礪川地区青少年健全育成会）」、「RUN伴文京区（RUN伴文京区実行委員会）」や、町会での各種イベント等への協力は、地域交流センターを窓口にして調整が行われ、学生をポータルで募集して実施したり、教員やゼミと調整したりして実施しているものである。

2025年度は、本学非常勤講師佐佐木頼綱先生（「創作ライティングC（短歌）担当」）より視覚障害を持つ方と学生の交流会実施の相談を受け、学生課を通じて本学の学生団体「ボランティア委員会さくら」主催という形で「パラアスリート交流会 ～“視えない”から生まれる可能性～」(12月13日)の実

施に至っている。この活動は、必ずしも地域交流活動という括りに当てはまるわけではないかもしれないが、外部からの相談のワンストップ窓口として、地域交流センターにて調整と企画実施の支援を行ったものであった。

また、それ以外にも今年度も和光市、富士見市、清瀬市など新座キャンパス周辺自治体との連携活動や、群馬県長野野町や岩手県盛岡市等の包括連携協定締結自治体との連携活動を、地域交流センターが窓口となって実施している。

(3) 自治体等から受託事業

地域交流センターでは、自治体等から委託を受けて大学として実施している受託事業も担当している。これには、新座市からの受託事業である「にいざプラスカレッジ」、文京区からの受託事業である「文京アカデミア講座」「文の京地域文化インタープリター養成講座」「文の京ゆかりの文化人顕彰事業朗読コンテスト」「菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)の一般公開」等がある。

どの事業も、企画内容の検討や実施に向けた学内外の調整や事業の実施を地域交流センターで担っている。「にいざプラスカレッジ」や「文京アカデミア講座」「文の京地域文化インタープリター養成講座」については、講座の基本的な内容の企画を地域交流センターで検討し、学内の関係学科や教員と調整をしたうえで、講座の実施運営またはその支援を担っている。「文の京ゆかりの文化人顕彰事業朗読コンテスト」については、朗読の募集、審査の調整、11月に行われる本選の実施運営等を地域交流センターで担っている。「菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)の一般公開」は、週末を中心に年間60日間の一般開館業務を地域交流センターで担当している。また、一般開館期間に合わせる形で後述の「跡見「学芸員」in菊坂」の今年度の活動成果をもとにした企画展を開催したり、「文の京地域文化インタープリター養成講座」の受講生の成果パネル展を実施している。

(4) 地域交流センターが企画し独自に実施している地域交流事業

上記以外に、地域交流センターで、本学の地域交流活動の振興を目指し独自に事業も企画し実施をしてきている。例えば、2019年度の地域交流センター設立以来、コロナ禍で活動がほぼできなかった2020年度を除き、毎年、センター主催のシンポジウムを実施し、その記録を地域交流センターブックレットとして刊行してきた。2025年度も、9月28日(日)に「文化遺産がつなぐ過去と未来―跡見女学校 明治・大正・昭和の暮らし」を開催し、約180名の参加者を得ている。

また、菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)を教育研究活動にも活用すべく、地域交流センターが公募した学生で設立した学生団体「跡見「学芸員」in菊坂」を支援し、菊坂の調査や近隣町会との交流、菊坂跡見塾における調査成果展の実施に向けた支援を行っている。

さらに、2025年度の新しい取組みとして、学内の学生による「地域活動報告会」も企画し、この原稿を執筆している2026年1月現在、3月11日(水)の実施に向けた調整をしている。すでに、学内8団体から報告会への登壇参加の申込があったところである。

3. 2025年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の特徴

2025年度地域交流活動は、上述のようにコロナ禍の影響がほぼ払しょくされたなかで、かつてのような規模で、新しい形にて活動も展開してきている。特に、地域交流センターが学外団体からの連携相談のワンストップ窓口となり、機動的に学内の学部学科・各部署・学生団体・教員等との調整を実施できている点は、本学の地域交流活動の展開に大きく貢献しているものであると考えられる。

外部団体からは、他大学の話として、相談にいても窓口がどこかが曖昧であったり、その件は窓口が違ふとされつつも、ではどこが担当かがはっきりせず話が進まないといった指摘もあった。本学は、中規模大学の特性として多様な専門分野を持つ学部学科・教員や学生を抱える一方で、大学組織としてはコンパクトなものであり、地域交流活動についてはフットワークを軽くして外部団体の相談に対応することができている。

今後の本学の文京キャンパスへの集約等も考えると、大学の数が他自治体に比べて突出して多い文京区において地域の中で本学が存在感を維持していくためには、引き続き細かく即座に対応できるという強みを失わないことが重要である。学科の募集停止と定員減に伴い今後は学生数が減少していくことは避けられない。こうした状況のなかで、これまでと同様の地域において本学の存在感を維持していくことは簡単なことではない。地域交流センターとしては、学内の各部署・各団体との連携を更に深め、地域交流活動への学生と学内全体での関心や関与を高めることにより、この強みを失わないよう、引き続きワンストップ窓口・学内マッチングのハブとしての役割を果たしたいと考えている。

引用文献

- ・土居洋平、2025、「地域交流活動の再興とその新しい形態 —2024年度跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 6号』跡見学園女子大学、pp.4-7

跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について —2025年度の活動状況と課題の分析—

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

跡見学園女子大学地域交流センターは、センターが現在の体制になった2019年度以降、毎年専任教員を対象として「地域交流関連活動に関わる調査」を実施し、学内の地域交流活動の実態について調査してきた。

2020年度以降は、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響をうけ、しばらくは地域交流活動も減少し、その内容も対面での活動を十分に展開できないなど大きな制約を受けるものとなっていた（金子2020、新垣2021、2022）。しかし、2022年度ごろからは回復の方向で推移し（新垣2023）、2024年度にはコロナ禍による制約はほとんど見られなくなっている（川副2024、2025）。

本稿では、今年度実施した「2025年度地域交流活動の調査」の結果を示し、今年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の全体的な動向と課題について考察したい。

2. 調査の概要

2019年度から継続して、2025年度も「地域交流活動に関わる調査」を実施した。調査は、学内情報システムである「Atomi Information Portal」の掲示登録機能を使用し、跡見学園女子大学の専任教員全員（105名）に回答を呼び掛ける形にて、2025年7月11日（金）～7月31日（木）にかけて実施した。

調査は、Microsoft Formsを利用したインターネット上の質問紙調査の形式にて実施した。調査では、まず「2025年度実施中・実施予定の地域交流活動の有無」を尋ねた。これに対して、活動が「ある」と回答した場合には、「活動名称」「活動の概要と目的」「活動の実施時期・期間」「主な活動場所」「交流先担当組織・部署」「補助・助成の有無」「実施体制」「学生の参加の有無」「課題」「工夫」「大学・地域交流センターへの要望」について尋ねている。

調査の結果、解答者数は35名（回答率33.3%）で、このうち「2025年度実施中・実施予定の地域交流活動がある」と回答した教員は22名であった。一人で複数の活動を実施している教員もいるため、総計で44件の活動報告があった。

今回、回収率は1/3にとどまっており、活動の有無にかかわらず2/3の専任教員からは回答を得られていない。これは、調査の周知と実施が遅れ、昨年に比べると回答期間が2週間ぐらい短いことも関係している可能性はある。さらに、毎年実施している調査のため、次第に活動のない教員を中心にそもそも回答をしなくなっていることも懸念されている。本調査は本学の地域交流活動の実施活動の全体像を明らかにすることを目的としていることから考えると、この回収率には課題がある。次年度の改善を

検討課題としつつ、その点を留意して以下、分析にはいりたい。

3. 2025年度の地域交流活動とその特徴

(1) 2025年度の地域交流活動の概況

今回の調査で今年度実施されている地域交流活動として報告されたのは44件であった。以下、表1にその概要について記す。

表1. 2025年度の地域交流活動一覧

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
文京区内	文京区防災フェスタへの出展 フェーズフリーの啓発活動	フェーズフリーな住まい方を表現した住宅模型を作成して展示。クイズを実施して、フェーズフリーに関する正しい知識を来場者に提供する。	2025年 4月～12月	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京区エリアスタディ (社会調査実習)	観光コミュニティ学部社会調査士課程科目の「社会調査実習」(通年授業)佐野クラスでは、毎年、調査対象地域を文京区に設定、各年度の調査テーマに応じて、町会ほか、諸団体、事業所等の協力を得て、社会調査を実施している。年度末には調査協力者・団体等には社会調査実習成果報告書を配布するとともに、報告会を開催している。本年度の調査テーマは「地域の交流の場」。	2025年4月～ 2026年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京区立大塚小学校での授業補助ボランティア	放課後学習や水泳授業など、大塚小学校から依頼のあるボランティアに参加する	2025年4月～ 2026年3月1日	課外活動 (学生一般募集あり)
文京区内	文京ハッピーベジタブルフェスタ2025への出展	文京区主催の表題イベントにゼミとして出展する(13年目)	2025年9月10日	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	RUN伴文京区2025	認知症の人と伴走して文京区内を巡る認知症啓発のイベント。学生が実行委員会から参加することで、社会的包摂を実践する活動への理解を深める。	2025年11月16日 (実行委員会は通年開催)	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京まちたいわ	文京区内のまちづくりに関わる人々が集い、情報交換をしながら交流・連携を深め、まちづくりの振興を行う。年1回、文京まちたいわフェスを実施し、全体での交流をはかる。	通年(文京まちたいわフェスは例年2月に実施)	ゼミ・授業等 正規教育活動
文京区内	文京・朝顔ほおずき市	文京区の傳通院で例年実施されているイベントに、ゼミで出店して区内の関係者との交流を深める。また、センター公募の学生がイベントに関わり、文京区内での本学学生の活動の場を広げる。	2025年7月(※実行委員会は、1月～8月に開催)	ゼミ・授業等 正規教育活動 および課外活動 (学生一般募集あり)
東京都内 (文京区内含む)	小学校での食育出張授業(大学生食育講師育成プログラムへの参加)	NPO法人 成人病予防協会の実施する大学生食育講師育成プログラムに参加し、都内小学校で食育出張授業を行う	2025年9月～ 2026年2月	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区内含む)	食品専門スーパーとの産学連携による商品開発 第3弾	一昨年から継続として、食品専門スーパー“クイーンズ伊勢丹”と産学連携による新商品を開発し、販売促進のためのプロモーションまで実施する。	2025年7月～ 2026年2月	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区内含む)	NPO法人チャイボラと連携し、本学の児童養護施設と就職を志望する学生への施設見学や情報提供	チャイボラを介した施設見学や大学での講義(施設の心理支援職員の招聘)	通年	課外活動 (学生一般募集あり)

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
東京都内 (文京区外)	ゆたかカレッジ早稲田キャンパス 交流活動	知的障害のある若者の就労サービスを行うゆたかカレッジと本学との学生交流	2025年7月～ 2026年2月	課外活動 (学生一般募集あり)
東京都内 (文京区外)	長野県信州首都圏総合活動拠点「銀座NAGANO」の役割を考える(※基礎ゼミ学外実習)	基礎ゼミナール学外実習で、2年生8名が長野県のアンテナショップ「銀座NAGANO」で観光案内業務、物販業務の補助を行う。さらに、8名のうち5名はイベント運営の補助業務、3名は百貨店デパ地下との比較分析業務を行う。8/22には全員参加でワークショップを実施。	2025年7月17日～ 8月22日	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区外)	一般社団法人 天王洲・チャンネルサイド活性化協会産学連携プロジェクト	一般社団法人 天王洲・チャンネルサイド活性化協会産学連携プロジェクト *コロナ後4年目を迎える産官学連携企画(品川区・天王洲活性化協会・パナソニック)との観光まちづくりと学生ガイドによるクルーズ船の運行		ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区外)	東京国際映画祭ゼミ生インターンシップ引率等	東京国際映画祭の運営部にて、インターンシップとしてゼミ生を派遣し、地域交流体験活動をしてもらいます	2025年10月27日～ 2025年11月5日	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区外)	ふるさと東京を考える実行委員会による里海まつりの手伝い、関口美術館に拠る「アート散歩」実施での手伝い	関口雄三氏に拠る子供たちの都内での海水浴実施、関口美術館に拠る親水公園設置のオブジェ巡りで市民のアートへの理解を図ること	通年	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区外)	東久留米市みんなの市民まつり	東久留米市みんなの市民まつりのステージイベントでの誘導案などを検討する	2025年 9月～11月	ゼミ・授業等 正規教育活動
東京都内 (文京区外)	都内日本語学校における留学生交流会	本学学生の異文化理解および多文化共生社会への理解促進を目的として、東京都内の日本語学校に在籍する外国人留学生との交流会を実施する。	2025年8月20日	課外活動 (学科・サークルなど)
東京都内 (文京区外)	公益財団法人江東区文化コミュニティ財団森下文化センター主催公開講座パレエ・クロストーク～美しきパレエの世界へようこそ～「海外パレエの魅力と楽しみ方～ヨーロッパ・アメリカ・韓国～」	回答者がナビゲーターを務め、海外のパレエ団で活躍している方々を迎え、国や文化を超え、世界中で楽しまれているパレエ芸術の魅力に迫る。	2025年 8月5日(火)	教員のみ活動
東京都内 (文京区外)	エセナおた講座講師	ポピュラー文化(マンガ)とジェンダーや社会学の講座の講師	2025年8月	教員のみ活動
東京都内 (文京区外)	杉並区フォスタリング機関ともさぼ 里親養育体験発表会 講師	杉並区の里親リクルート活動イベントでの講話	2025年11月	教員のみ活動
新座市内	トラベルライティングアワード新座賞	新座市産業観光協会で開催している地域の魅力再発見や郷土愛を育む取組として、「トラベルライティングアワード新座賞」の参加。 https://www.niiza.net/twa/	通年	ゼミ・授業等 正規教育活動
新座市内	新座市社会教育委員会委員	新座市で今年度行われた社会教育関係の行事や予算等に対して、指導助言を行う。	通年	教員のみ活動
埼玉県内 (新座市外)	三郷市役所との共同調査研究 インクルーシブ公園なかよしひろばの認知度向上	共同開発したなかよしひろばを、より多くの方に知っていただき、利用していただくために、関係各所にアンケート調査を実施。結果を分析して、三郷市に提案を行う。	2025年 8月～10月	ゼミ・授業等 正規教育活動

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
埼玉県内 (新座市外)	富士見市教育相談室 知能検査実施 スーパーバイズ担当	心理教育相談所が富士見市教育相談室からの依頼を受けて年間20件の知能検査を大学院生が実施しフィードバックをお返ししている	通年	ゼミ・授業等 正規教育活動
埼玉県内 (新座市外)	みんなのわこらぼまつり2025・盛り上げ隊参加	5月末に実施されているみんなのわこらぼ祭り2025の会場装飾、ステージイベントの企画を行う。 2月から開催される定期的な会合に参加しながら、地域の方々とも関係しながら、イベントの企画運営、そこに関わる人の考えなどを学ぶ。	2025年 2月～5月	ゼミ・授業等 正規教育活動
埼玉県内 (新座市外)	和光市自立支援協議会	和光市自立支援協議会の会長として障害者福祉にかかわる諸問題を審議	年3回実施	教員のみ活動
埼玉県内 (新座市外)	埼玉全国舞踊コンクール	埼玉全国舞踊コンクール クラシックバレエ部門 二部審査員	2025年 7月28日(月)	教員のみ活動
埼玉県内 (新座市外)	三郷市男女共同参画審議会委員	三郷市男女共同参画審議会への出席	通年(2～4回開催)	教員のみ活動
埼玉県内 (新座市外)	鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会の委員	男女共同参画推進委員会への出席	通年(2～4回開催)	教員のみ活動
埼玉県内 (新座市外)	和光市男女共同参画アドバイザー	わこうプラン推進会議(男女共同参画情報紙「おるご～」)に出席し、「おるご～」の企画・編集へのアドバイス、「広報わこう」に掲載するプラン推進委員(市民から公募で選ばれた委員)が執筆する男女共同参画に関するコラム(年2回)の添削など。	通年(委員会は年7回開催)	教員のみ活動
埼玉県内 (新座市外)	埼玉県性の多様性に関する施策推進会議委員	埼玉県性の多様性に関する施策推進会議への出席	通年(2回開催)	教員のみ活動
岩手県 盛岡市	文京区学生と創るアグリイノベーション事業	盛岡市の農業振興を目的とし、文京区内に立地する7大学が盛岡市と連携して事業を実施している。各大学がそれぞれテーマを設定しており、本学は畜産業、なかでも肉用牛を対象としている。令和3年度からの継続事業であり、最初の3年間は「もりおか短角牛」をテーマにしぼり、その後は若手(女性)農業者(肉用牛農家)らのグループ化の支援やグループ活動の支援を行っている。 盛岡市から学生の現地調査にかかる費用(旅費・交通費)の提供を受けている。	令和3年度～	ゼミ・授業等 正規教育活動
岩手県 盛岡市	もりおか女性センター講座 講師	ポピュラー文化(マンガ)とジェンダーや社会学の講座の講師	2025年6月	教員のみ活動
秋田県 男鹿市	秋田県男鹿市ひなさんぼの会	秋田県男鹿市の2地区を対象にひなさんぼの会を実施し、防災とまちづくりの支援	2025年5月～ 2025年10月	教員のみ活動
山形県 西川町	山形県西村山郡西川町大井沢地区との連携プロジェクト	ゼミ開設時より関わり続けている山形の山間部の大井沢地区の地域振興等に関わりながら、継続的なアクションリサーチによる地域づくりの実践と課題把握を通じて過疎地域の地域づくりを体感的に学ぶとともに、地域貢献を行う。	通年(2か月1回程度の現地訪問・参与観察・ワークショップ・調査・行事運営協力)	ゼミ・授業等 正規教育活動
千葉県 習志野市	障害福祉施設のボランティア	4月に開催される施設のイベントにボランティアとして参加して、地域社会と福祉施設の関係について学ぶ。	2025年4月	ゼミ・授業等 正規教育活動
千葉県 成田市	国土交通省・観光庁連携「成田空港第三滑走路拡張に伴う三里塚地区魅力倍増プロジェクト」 *成田空港第三滑走路拡張に伴い慢性化している空港で働く若年労働力確保のための新たな三里塚地区でのプライベートライフの魅力倍増されるプロジェクト *観光庁支援事業	(NO1) 国土交通省・観光庁連携「成田空港第三滑走路拡張に伴う三里塚地区魅力倍増プロジェクト」 *成田空港第三滑走路拡張に伴い慢性化している空港で働く若年労働力確保のための新たな三里塚地区でのプライベートライフの魅力倍増されるプロジェクト *観光庁支援事業		ゼミ・授業等 正規教育活動
神奈川県 川崎市	NPO法人キアセット川崎 里親養育研修講師	川崎市や神奈川県内の里親更新研修講師	2025年9月	教員のみ活動

主な活動場所	活動名称	活動概要	活動時期	実施体制
神奈川県 横浜市	横浜市活性化のための「げ よこはまパレード」や「横浜馬車道祭り」の袴姿での参加	今年度は横浜市の活性化の手伝いのため、横浜市の祭に袴姿で参加した(2025年5月)。また、秋の祭にも参加する予定。	2025年 5月・11月	ゼミ・授業等 正規教育活動
神奈川県 横浜市	一般社団法人こどもみらい横浜 里親支援活動	横浜市の里親家庭、養子縁組家庭の心理支援と心理教育活動	通年	教員のみ活動
静岡県 東伊豆町	東伊豆町地域活性化事業	東伊豆町から補助金をいただき、ゼミ生たちが現地調査を年2回行い、サッポロビールと一緒に地産地消のミカン(いずのはる)のカクテルを開発・宣伝している。また、ポーラの余った化粧品から作った絵の具を用いて、伊豆の特産品であるミカンやカーネーションを描いたり作ったりする子どものワークショップを実施したりしながら、産官学を通じた東伊豆町の活性化を行っている。	2025年4月～ 2026年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
新潟県 胎内市	胎内市フィールドワーク	基礎ゼミ(観光)での学外実習として、3泊4日で現地訪問しフィールドワークを実施。その結果踏まえた学生からの課題解決提案を後日実施。	2025年9月	ゼミ・授業等 正規教育活動
沖縄県 石垣市	沖縄県石垣市地区防災計画作成支援	沖縄県石垣島の津波危険地区において車避難を想定した計画づくりの支援	2025年9月～ 2026年2月	教員のみ活動
沖縄県 宮古島市	跡見学園女子大学観光教育特別探求学習プログラムIN宮古島「観光を学ぶ女子大生が提案する未来に向けた日本のリゾート開発と持続可能な宮古島の観光についての研究」	跡見学園女子大学 観光教育特別探求学習プログラムIN宮古島「跡見の観光」の学びの深さを世の中に告知する事を前提に他大学では企画出来ない本学独自の「観光教育特別探求学習プログラム」を実施。世界から最も注目を集める日本のリゾート「宮古島」をケーススタディ。インバウンド観光客が急増している日本の観光と経済の関係およびオーバーツーリズムによる乱開発や環境破壊が叫ばれる宮古島の現状と地域に住まう人々の複雑な感情等をテーマに「宮古島観光の光と影を探求型で学ぶ事前研修」を実施。		ゼミ・授業等 正規教育活動

活動地域としては、「文京区」および「文京区内を含む東京都内」が10件、「東京都内(文京区以外)」が10件、「新座市」が2件、「埼玉県内(新座市以外)」が9件、「その他」が13件であった。今年度も文京キャンパス近隣エリアでの活動が全体の1/4程度と多く、また、全体の8割強が南関東での活動となっている。一方で、それ以外の地域の活動も8件ある。そのうち半数の4件が本学と包括地域連携協定を締結している自治体での活動であり、遠方での活動の場合は、こうした協定に関係した活動が一定の数あるということを読み取ることができる。

(2) 2025年度地域交流活動の特徴

ここでは、今回の調査項目のうち「地域交流活動の交流先担当部署・組織」「補助・助成の有無」「活動に関係する人数の規模」に関する回答結果を確認したい。

「地域交流活動の交流先担当部署・組織」(有効回答44件、複数回答可)については、「地方公共団体」が23件と最も多く、その割合も昨年より高くなっている。以下、「公益法人(一般社団法人・公益財団法人等)」が7件、「企業」が5件、「イベント実行委員会」が3件、「小学校」が2件、「NPO法人」「社会福祉法人」「有志まちづくり団体」がそれぞれ1件であった。例年と同様に地方公共団体が多いことは変わらないが、様々な団体や関係者の参加する実行委員会形式でのイベントに協力をするものが散見されるのが特徴といったところである。

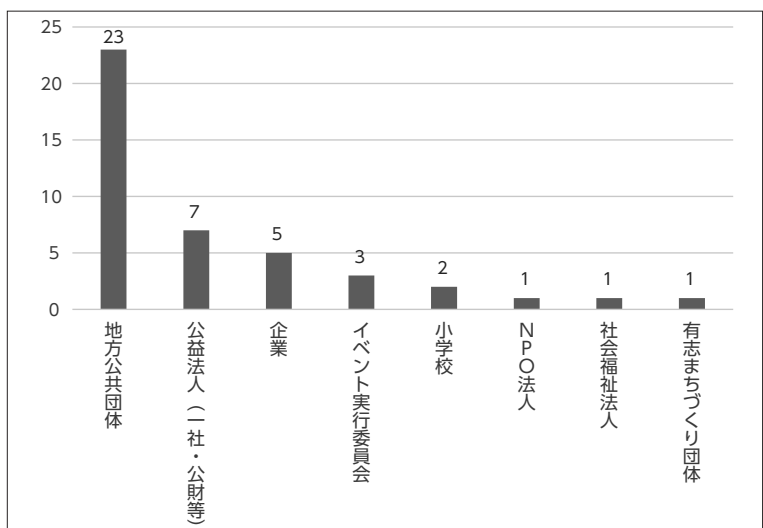


図1. 地域交流活動の交流先担当部署・組織(複数回答可)

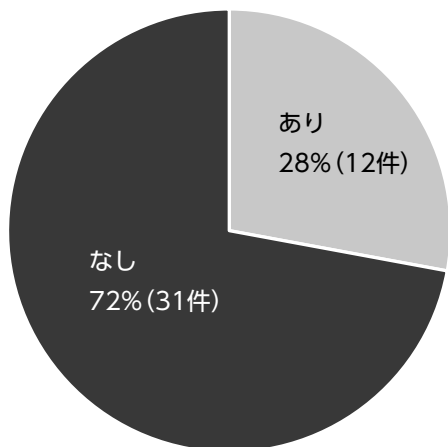


図2. 補助・助成の有無

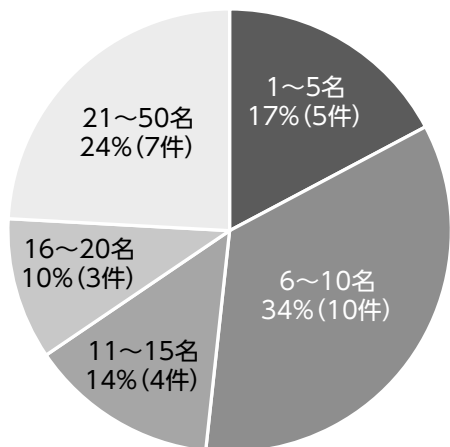


図3. 活動に関係する人数の規模

地域交流活動の「補助・助成の有無」(有効回答43件)については、図2の通りの結果であった。3割弱の活動には外部からの補助があり、7割強の活動にはないことは、ほぼ例年と同じ割合であった。昨年度の回答数に比べると今年度は10件以上回答が増えているが、補助・助成受給の割合は変わっていない。

一方、活動に関係する人数(有効回答29件)については、図3に示した通りの結果である。「6~10名」が10件(34%)と最も多く、これに「21~50名」(7件・24%)、「1~5名」(5件・17%)、「11~15件」(4件・14%)、「16~20名」(3件・10%)と続いている。昨年度は「101名以上」という活動も7件あった一方で「1~5名」という回答がなかったことを考えると、全体的に活動に関係する人数は減少傾向にあると捉えられる。このことは、昨年度から今年度にかけて、本学の定員充足率が減少し学生数が減少していることと無関係ではないだろう。本報告書で活動報告を寄稿しているゼミ等の活動の半数以上は今年度の学生募集を停止したコミュニケーション文化学科、生活環境マネジメント学科、ま

ちづくり学科の活動であり、今後の本学の地域交流活動については、より一層の工夫が必要な段階にきていると捉えるべきである。

活動地域については、例年同様「文京・東京」「新座・埼玉」「その他」に分類して推移を確認した。コロナ禍を受けていったん大きく数を減らした活動が長期的には増加の傾向に転じつつあることが見受けられるが、2025年度については「文京・東京」が2024年度の12件から2025年度の20件へと大幅に増加していることが確認できる。

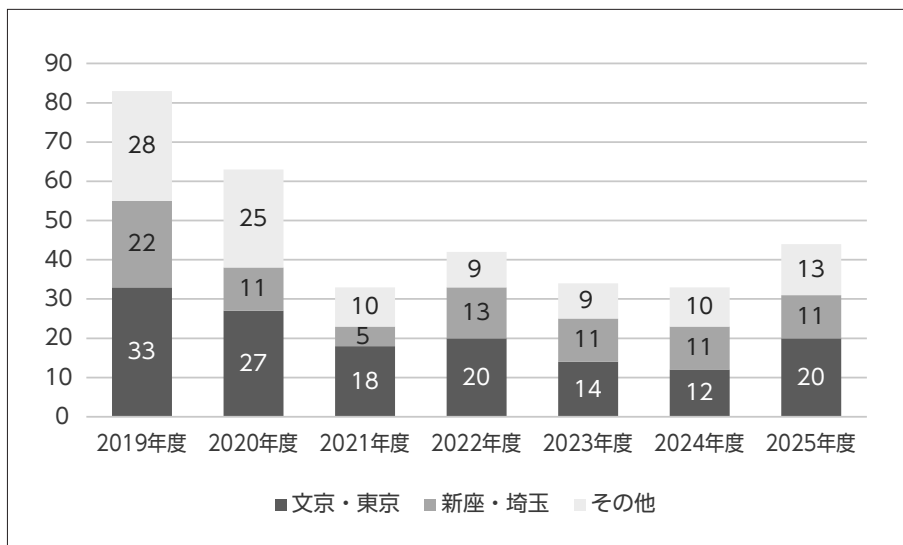


図4. 2019年度から2025年度の地域交流活動の件数の推移

(出典) 金子2020：12、新垣2021：46-49、2022：19、2023：33、川副2024：28、2025：27より作成

(3) 本学の地域交流活動の類型とその傾向

さらに、今年度報告された地域交流活動について、新垣(2020)の分類をもとに、教員のみで活動する「教員限定型」と学生も活動する「学生参加型」、そして交流・連携先が行政である「行政共同型」とその他「企業・NPO・各種団体共同型」に区別して今年度も活動を類型化した(表2)。

表2に示したとおり、「教員限定型」は14件であるのに対して、「学生参加型」は30件とより多くの活動が報告されている。ただし、教員限定型の活動については、活動者本人が地域交流活動として認識していないケースもあり、アンケートに答えていない可能性も指摘されている。次年度以降も、この点はアンケート実施時に周知が必要なところである。また、学生参加型の活動のうち「ゼミ・実習活動」の一環として行われているものが24件であった。今年度も正課授業の一環としての活動が主流であることがわかる。

また、具体的な連携先としては「行政共同型」とそれ以外の「企業・NPO・各種団体共同型」で分類したが、今年度は行政共同型が26件、「企業・NPO・各種団体共同型」が18件と行政との共同の方が多く確認された。昨年度は行政共同型が13件、企業・NPO・各種団体共同型が19件であったことを踏まえると、今年度は企業・NPO・各種団体共同型行政共同型について大きな変化が見られない一方で、行政共同型の報告が大幅に増えていることがわかる。また、多くの活動が2024年度にも実施したものであり、地域交流活動の多くは年度を超えて継続的に実施されていることもうかがい取ることができる。

表2. 2025年度の地域交流活動の分類

	行政共同型 / 26件	企業・NPO・各種団体共同型 / 18件
教員限定型 / 14件	<ul style="list-style-type: none"> ●新座市社会教育委員会委員 ●和光市男女共同参画アドバイザー ●和光市自立支援協議会会長 ●三郷市男女共同参画審議会委員 ●もりおか女性センター講座講師 ●埼玉県性の多様性に関する施策推進会議委員 ●埼玉全国舞踊コンクール審査員 ●鶴ヶ島市男女共同参画推進委員会の委員 ●杉並区フォスタリング機関ともさぼ 里親養育体験発表会講師 ●エセナおおた講座講師 ●沖縄県石垣市地区防災計画作成支援 	<ul style="list-style-type: none"> ●公益財団法人江東区文化コミュニティ財団森下文化センター主催公開講座バレエ・クロストーク ●NPO法人キアーアセット川崎 里親養育研修講師 ●一般社団法人こどもみらい横浜 里親支援活動
学生参加型 / 30件	<p>ゼミ・実習活動 / 24件</p> <ul style="list-style-type: none"> ●文京区防災フェスタへの出席 ●文京区エリアスタディ (社会調査実習) ●文京区ハッピーベジタブルフェスタ2025への出席 ●トラベルライティングアワード新座賞 ●みんなのわこらぼまつり2025・盛り上げ隊参加 ●富士見市教育相談室・知能検査実施 スーパーバイズ担当 ●三郷市役所との共同調査研究：インクルーシブ公園なかよしひろばの認知度向上 ●東伊豆町地域活性化事業 ●東久留米市みんなの市民まつり ●文京区学生と創る盛岡アグリイノベーション事業 ●長野県信州首都圏総合活動拠点「銀座NAGANO」の役割を考える(※基礎ゼミ学外実習) ●国土交通省・観光庁連携「成田空港第三滑走路拡張に伴う三里塚地区魅力増進プロジェクト」 ●横浜市活性化のための「ザ よこはまパレード」や「横浜馬車道祭り」の袴姿での参加 ●新潟県胎内市フィールドワーク ●跡見学園女子大学 観光教育特別探求学習プログラム IN宮古島「観光を学ぶ女子大生が提案する未来に向けた日本のリゾート開発と持続可能な宮古島の観光についての研究」 	<ul style="list-style-type: none"> ●RUN伴文京区2025への協力 ●文京まちたいわとの連携プロジェクト ●文京朝顔・ほおずき市(ゼミ出展) ●小学校での食育出張授業(大学生食育講師育成プログラムへの参加) ●食品専門スーパーとの産学連携による商品開発 第3弾 ●一般社団法人 天王洲・キャナルサイド活性化協会産学連携プロジェクト ●ふるさと東京を考える実行委員会による里海まつりの手伝い、関口美術館に拠る「アート散歩」実施での手伝い ●障害福祉施設のボランティア(千葉県習志野市) ●山形県西村山郡西川町大井沢地区との連携プロジェクト
有志・課外活動 / 6件		<ul style="list-style-type: none"> ●文京区立大塚小学校での授業補助ボランティア ●文京朝顔・ほおずき市(センター公募) ●跡見「学芸員」in菊坂 ●行こうよ!文京浴場～学生プロジェクト～ ●NPO法人チャイボラと連携し、本学の児童養護施設と就職を志望する学生への施設見学や情報提供 ●ゆたかカレッジ早稲田キャンパス 交流活動

(4) 地域交流活動における課題と求める支援

地域交流活動調査では、実施にあたっての課題点や工夫、大学や地域交流センターに求める支援事項についても確認している。その点について、以下に整理したい。

①地域交流活動で直面している課題

今年度の調査でも「本地域交流活動を実施するにあたって直面している・想定される問題」という項

目を設定して、自由回答形式で記述してもらっている。費用負担の問題等、例年と同じく挙げられているものも散見されたが、今年度については、一部学科の募集停止や学生数の減少に関わる課題を挙げているケースが指摘されつつある。具体的には、これまで地域交流活動の成果をオープンキャンパスで展示するといった流れで行っていたことが、当該学科の募集停止により実施されなくなり、代替の発表の場を準備したがスケジュールの変更で苦勞するケースや、学生数の減少に伴う個別のゼミの人数減の影響で、参加人数の確保が難しいといったことが指摘されている。

また、活動が経過するなかで、特に行政組織との連携の場合には担当者の異動による影響も複数の指摘があった。当初の事業設計の段階での担当者が異動すると、ともすると前例の踏襲に留まり新しい活動展開という流れになりにくく、学生が新たな学びを得るという点で課題が出てくるのが指摘されている。また、同じ事業でも予算縮小により前年度と同規模の訪問や活動が難しくなっているといった指摘もあった。

さらに、新座キャンパスから文京キャンパスへの集約後に、新座キャンパス近隣の活動をどうすべきかという指摘もあった。これについては、大学の大きな方針の提示が必要になってくるだろう。

そのほか、夏季の屋外イベントについて、気温上昇による熱中症リスクが高まっており、実施が難しくなってきているといった指摘もあった。

②地域交流活動における工夫

調査では、そうした課題に対する各教員の工夫についても確認している。これについては、今年度も連携先との関係を良好に保つ工夫について多くの報告があった。事前の教員による丁寧な説明の実施、連携先の組織に関わってもらう工夫、年度を超えて長期的な関係を形成して信頼を深めるなど、多様な形で連携先との関係形成の工夫がされている様子が確認できた。

また、参加したいという学生の確保、参加後の学生のモチベーションの維持について工夫を行っている事例も複数報告されている。事業の趣旨や予算等と学生の意欲の調整、目に見える形での成果の提示、卒業生や上級学年の学生による活動から得られる力についての説明等、多様な工夫がなされていることが確認できる。

③大学や地域交流センターに求める支援

それ以外にも、調査においては大学や地域交流センターへの要望についても確認している。これについては、地域交流に関わる配布物、例えば大判の印刷物などは外部で印刷すると費用が高額になる関係で大学で印刷をお願いしたいといった要望があった。

また、遠方の活動に限らず、学生への交通費補助についての要望も複数あった。特に、学生自身の経済的な状況により、参加できる活動に同一団体のなかでも差がでてしまうことについての懸念が指摘されていた。

また、ゼミ学生の数の減少に伴い、地域交流センターを通じた全学的な学生募集を要望する声もあった。

すべての要望に十分に答えられるとは限らないが、地域交流センターとして、こうした要望には可能な範囲で対応していきたいと考えている。

4. おわりに

以上、本稿では、2025年度に実施した「地域交流関連活動に関わる調査」の結果をもとに、本学の地域交流活動の概況について整理をした。

まず、全体の活動数についてはコロナ禍による影響を脱して増加に転じ、特に文京区や東京都内での活動の増加が顕著であった。一方で、学生数の減少による各活動の参加者の規模縮小も進んでいる。今後は、大学規模の縮小に伴い学生数が減少するなかで、より効果的な活動を軸にした活動の再編成も必要になるであろう。また、学内での学部・学科・部署を超えた連携により、より高い精度でマッチングを実現していくことも重要である。

今年度の報告書には間に合わなかったが、地域交流センターでは、まずは学内の地域交流活動の情報共有に向けて、3月に学生の地域交流活動成果報告会を実施する予定である。地域交流センターでは、来年度以降も上記に関わる新たな取組みを行い、本学の地域交流活動の益々の発展に向けた支援を実施していきたい。

参考文献

- ・新垣夢乃、2021、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について—特に新型コロナウイルス感染症流行による影響に注目して—」『ゆかり』2、P.45-58.
- ・新垣夢乃、2022、「跡見学園女子大学の地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析」『ゆかり』3、P.18-21.
- ・新垣夢乃、2023、「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について—コロナ禍3年目の現状分析」『ゆかり』3、P.29-36.
- ・金子祥之、2020、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状と課題—学内調査を通じた実態把握—」『ゆかり』1、P.10-17.
- ・川副早央里、2024、「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について—アフターコロナにおける現状分析—」『ゆかり』5、P.23-30.
- ・川副早央里、2025、「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について—2025年度の活動状況と課題の分析—」『ゆかり』6、P.21-30.

特集

2025年度地域交流活動

跡見学園女子大学地域交流センター

地域交流センターでは、例年、跡見学園女子大学内における地域交流活動の実施状況に関する質問紙調査を実施してきている。地域交流センターが現在の形となって初めて実施した2019年度には83件の活動の報告があった。その後はコロナ禍の影響を受けて減少傾向にある。具体的には、2020年度が63件、2021年度が33件である。その後はいったん2022年度に38件に増加したものの、その後も2023年度・2024年度が33件と長期的には回答活動数は増加には転じていなかった。

それが、今年度(2025年度)は48件の活動が報告され、大幅な増加に至っている。この分析の詳細については、本稿の別稿(「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について」)を参照頂ければと思うが、ようやくコロナ禍を払拭して地域交流活動が展開しつつある。本特集では、そのうち19本の活動報告を担当した教員や学生に執筆して頂いた。是非、この特集を通じて本学の地域交流活動の具体的姿をご覧頂きたい。

都内日本語学校における留学生との交流企画の実践報告

文学部コミュニケーション文化学科講師 斎藤敬太

1. はじめに

本学には外国人留学生が非常に少なく、学内で外国籍の者と交流を持つ機会が限られている。筆者はこれまで、日本語教育や多文化共生に関わる担当科目（他大学担当科目も含む）の履修者に、様々な観点で実感と気づきを目的とした活動⁽¹⁾を行っており、その一つとして、2023年から本学学生を対象に日本語学校での外国人留学生との交流企画を実施している。本稿は、2025年度に実施した交流企画に関する実践報告である。

2. 実施概要

2025年度は「コミュニケーション文化学研究入門B」および「コミュニケーション文化学演習IIA」の履修者から希望者を募り、2025年8月20日に東京都渋谷区にある「長沼スクール 東京日本語学校」（以下「長沼スクール」）にて実施した。参加者は本学学生3名、長沼スクールの外国人留学生6名、また、筆者が非常勤講師として科目を担当する埼玉大学からも日本人学生が1名参加した。長沼スクールの教員より説明を受けた後、事前に長沼スクールの留学生から募ったテーマなどについて自由に話す形式の交流企画とした（図）。なお、途中で小グループに分けて話す活動も行っている。



図. 留学生との交流企画の様子

3. 参加者の感想

以下に、参加者の感想を記す。明らかな誤字脱字や個人情報等の最低限の修正を除き原文をそのま

ま掲載する。まずは日本人学生の感想を記す。

- ・私は今回の交流会に参加して、率直にとても楽しかったし、貴重な機会で本当に参加してよかったなと思った。長沼スクールの皆さんは、日本語を勉強しているのは半年や一年、二年だと聞いて本当に驚いたし、すごく日本語が上手だなと感じた。私自身も、現在韓国語を勉強していて、もっと流暢に話せるようになりたい、理解できるようになりたいと思っていたので、とても刺激をもらえた。日本と海外では、季節が大きく違うことに、当たり前だと思うが、実際に言葉で聞いて驚いた。台湾出身の子に、直接中国語を教わったのも、すごく貴重で楽しい時間だった。長沼スクールの皆さんから、日本のこれがいい、あれがいいという話を聞いて、私まで嬉しくなったし、私自身がとても勉強になった。普段、いつも通りに生活していたら、出会うことはなかったと思うので、本当に一期一会の出会いだなと思った。最初は緊張していたけれど、最後の方にはみんなで盛り上がる事ができてよかった。長沼スクールを出て、帰り道に宮下パークに寄って、飲み物片手に、みんなで時間を過ごせたのも本当に嬉しく、楽しかった。これからも、関係をもてたらいいなと思う。最後に、このような機会を設けていただき、本当にありがとうございました。
- ・今回の長沼スクールの留学生との交流会に参加したことは、私にとってとても貴重な経験になりました。異文化交流の機会は身近にほとんどなく、日本語学校という場所に訪れるのも初めてだったので、参加前は不安でした。しかし、実際には学生の皆さんがとても積極的に話してくださり、緊張もすぐにほぐれました。日本語が本当に上手で、用意された話題だけでなく、おすすめの料理や趣味などについても自然に雑談できたのが嬉しかったです。また、日本語学習歴が1年未満の方もいると聞き、その努力に驚きました。JLPTの高いレベルや大学院への進学を目指している方もいて、自分ももっと語学の勉強や将来について考えたいと刺激を受けました。さらに、他大学の学生や跡見の先輩から大学生活の話も聞いたのも良い経験でした。普段の大学生活ではなかなか出会えない環境を体験できて本当に良かったです。今後もこうした交流の機会があれば、また参加してみたいと思いました。
- ・留学生との交流に加え、自分だけ他大学の学生だったのでかなり緊張した。大学ではESSという、留学生と英語で交流するサークルに参加しているので、今までも日本語学習者と交流する機会はあった。ただ、日本語がほとんどわからなかったり平仮名を読むのがやっとだったりする学生がまわりに多かったため、今回長沼スクールの学生さんたちと話してとても驚いた。かなりスムーズに会話ができることに加えて、相槌や抑揚がすごく自然で、1年間日本語学校に通っていた中国出身の友人のことを思い出した。交流会後は数人で渋谷を散策して、留学生や跡見の学生さんと連絡先も交換できて、とても良い機会になった。

次に、外国人留学生の感想を記す。

- ・今日の交流会に参加することで、日本の文化や価値観を直接学べ、自分の視野が広がります。日本人大学生と楽しく過ごし、言語能力の向上や国際的な友情も築け、多様性への理解が深まります。
- ・日本人学生と接する機会が少ないので、すごく楽しかったです。大学生の生活スタイルや留学生との違いを聞いて面白かったです！ この会のおかげで、日本人の友達だけでなく、学校（筆者注：長沼スクール）の学生にも友達ができて良かったです。

- ・初めての交流会で、いろんな話が出来て良かったです。大学生の皆さんも親切でした。日本語の会話はもっとうまく喋りたいと思います。
- ・最初は少し緊張しましたが、みんな優しく、すぐに安心しました。日本語で話すことはまだ難しいですが、相手はゆっくり話してくれました。大学生活や趣味について話すことができ、とても楽しかったです。自分の日本語をもっと上手にしたいと思いました。これからも日本人と会話する機会を大切にしたいです。
- ・留学生にとって日本人の大学生と話せる時間は珍しいと思う。だからいい機会だった。でも自分の日本語の実力が足りないのが難しかった
- ・今回は、日本の大学生の皆さんと話す機会をくれて、本当にありがとうございました。初めてだったので少し緊張しましたが、皆さんがとても優しく、私たちに分かるように簡単な日本語で話してくれたので、安心して話すことができました。お互いの趣味や好きなものについて話したり、連絡先を交換したりするうちに、楽しい時間はあっという間に過ぎました。とても良い経験になり、心から感謝しています。

以上から、日本人学生、外国人留学生双方に異文化理解や日本語教育に関して様々な点で気付きを与えることができたと考えられる。この気付きを各学生の中でいかに持続させることができるか、そしてこのような企画をいかに継続させていけるかが今後の課題である。

謝辞

交流企画実施にあたり、長沼スクールの皆様にお礼申し上げます。特に、宮本洋子先生には日程の調整、長沼スクールの留学生への周知など大変お世話になりました。

注

- (1) 朝鮮大学校での在日コリアンとの交流 (斎藤 2020a,b, 2021, 2024a)、街中の看板・ポスター類 (言語景観) を撮影させて在日外国人の目線で問題点を考える課題 (斎藤 2022)、様々な国や地域の食を体験させたり、食と多文化共生に関する講演会を聞かせたりすることで異文化理解を考えさせる実践 (斎藤 2023)、在日クルド人向け日本語教室でのボランティア実践 (斎藤 2024b, 2025) 等を行っている。

参考文献

- ・ 斎藤敬太 (2020a) 「多文化共生社会へ向けた在日コリアンとの学生交流企画の試み」『国際関係学研究』46、津田塾大学全学研修・紀要委員会、pp.19-25
- ・ 斎藤敬太 (2020b) 「朝鮮大学校との学生交流企画の報告」『津田塾大学国際関係研究所報』55、津田塾大学国際関係研究所所報編集委員会、pp.1-6
- ・ 斎藤敬太 (2021) 「オンラインによる朝鮮大学校との学生交流企画の試み」『津田塾大学国際関係研究所報』56、津田塾大学国際関係研究所所報編集委員会、pp.31-36
- ・ 斎藤敬太 (2022) 「言語景観を通じた多文化共生教育の実践」『異文化間教育学会第43回大会発表抄録』異文化間教育学会
- ・ 斎藤敬太 (2023) 「事例と実践から見る食を通じた異文化理解」『異文化間教育学会第44回大会発表抄録』異文化間教育学会
- ・ 斎藤敬太 (2024a) 「朝鮮大学校での在日コリアンとの交流企画の報告」『国際関係学研究』50、津田塾大学全学研修・紀要委員会、pp.5-12
- ・ 斎藤敬太 (2024b) 「在日クルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書』5、跡見学園女子大学地域交流センター、pp.50-52
- ・ 斎藤敬太 (2025) 「在日クルド人を対象とした日本語ボランティアの実践報告」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書』6、跡見学園女子大学地域交流センター、pp.52-54

令和7年度 「東京国際映画祭25インターンシップ・ゼミ生参加」についての報告

文学部コミュニケーション文化学科教授 松浦雅子
〈コミュニケーション文化学科3年〉大関妃菜・添田望乃・松枝汐梨・神藤愛子
齋藤茉由・河井香乃・中村優衣

1. はじめに

2025年10月27日から11月5日までの10日間に渡り開催された「第38回東京国際映画祭2025」のインターンシップにゼミ生7名が参加した。本稿では、その活動内容に関して報告する。

東京国際映画祭は、日比谷・有楽町・丸の内・銀座地区の映画館で開催され、今年で38回目を迎えるアジアを代表する映画祭典として世界にその名を知られている。欧米からアジアまで世界で知られる著名な監督や新進気鋭の若手監督の作品が、都内映画館を舞台に上映され、様々な才能との出会いが実現している貴重な場である。筆者も、過去に二度当映画祭に作品出品をしてきたが、本年度初めて、ゼミ生のインターンシップとしての参加が実現に至った。今回は、西武文理大学の学生と一緒にチームを組み、地域社会に連携することを目的に、全期間を通し執行運営部に所属し、プロのスタッフの方々や地域スタッフの指導の元、ボランティア活動及びインターンシップを行った。

東京国際映画祭では「東京から映画の可能性を発信し、多様な世界との交流に貢献する」というミッション（理念）を掲げ以下の活動を行っている。

a. 世界との交流

世界各国から監督、俳優、プロデューサー、映画祭プログラマーや映画を学ぶ学生など多種多様なゲストをお迎えして、日本映画界との交流を図る。

b. 未来の人材育成

世界の映画人と「交流ラウンジ」、中学生向けの映画制作ワークショップ、アジアの学生向けのマスタークラス、学生応援団の起用など様々な形での人材育成を展開する。

c. 女性への視座

東京都との連携で「ウィメンズ・エンパワーメント部門」という部門で、新しい女性のプログラマーも誕生。現在活躍している女性監督たちがこれまでとこれからを語り合うシンポジウムも開催し、様々な分野で活躍する女性へ熱い視座を設ける。

(東京国際映画祭公式サイト 2025より抜粋)

2. ゼミ生の活動内容

今回のインターンシップの活動内容は、執行運営部での映画界のプロの方々様々な手伝い、監督や俳優の方々とのコミュニケーションサポート、Web発信等多岐に渉る中、まさに社会の現場での多様な経験となった。中でも、劇場にて直接、観客の方々へのチケット認証等を行いコミュニケーションする中で、まさに学内で学んでいる「実践コミュニケーション」を、実際の現場で体験しながら考察していく貴重な体験になったと思う。スケジュール的には、早朝から夜の9時過ぎまでスケジュールが組まれ、授業と両立しながらのインターンシップでもあったため、学生にとっては大変だったようである。ほぼ毎日、筆者はゼミ生の健康確認や指導に会場に足を運んでいたが、懸命に頑張りながら地域スタッフに溶け込み、生き生きと活動するゼミ生の姿に感動するほどであった。当初は、仕事の手順を覚えることや慣れない現場で、疲労困憊する表情も見られたが、後半は全員が、「凄く楽しい!」と目を輝かせていたのが印象に残っている。今回は、ゼミ生というチームでの参加であったため、メンバー同士で助け合ったりと、強い絆も生まれたようである。現場では、常に緊張感があったようだが、プロの臨機応変な対応やコミュニケーション、映画人の素晴らしさから、多くの学びがあったようである。また、ゼミ研究として、メディアコミュニケーションや映像発信の研究に繋げていくことも目的であったため、インターンシップ終了後にも、振り返りと共に総まとめのプレゼンを西武文理大学さんにお邪魔し、合同授業の中で行った。現場で学ぶだけで終わらず、その後のグループワーキングによる振り返りや他大学との交流は、お互い刺激し合いながら学ぶという、大きな財産になったと思われる。

文学部における、学外インターンシップとして、何とか次年度にも繋げて、本学の一つのストロングポイント及び地域連携活動として育てていけるようにしたいと考えている。

3. 学生達からの感想

【活動目標と達成度】

「自ら考えて動けるスタッフになる」という目標を掲げて取り組んできたが、事前準備や連携の大切さを改めて実感し、チームの中で主体的に動けるようになったと感じる。10日間を通して、現場での判断力と対応力を確実に成長させることができた。

【新たな気づき・自身の感性から見えたこと】

一人ひとりのお客様に向き合うコミュニケーションの大切さを改めて感じた。認証の際にアイコンタクトを取りながら対応することを意識しただけで多くの変化を感じ、お客様が笑顔で「ありがとう」と声をかけてくださり、「心の通う接客の力」を実感した。

【ベストプラクティス】

声かけの一工夫で連携がよりスムーズになり、全体の動きが効率的になることを学んだ。社会の現場での実践体験により、状況に応じて伝え方を工夫する姿勢やより良いグループビルディングを学んだ。

【クリエイティブの大切さ】

運営部署に携わり、色々な面でクリエイティブな考えを常に持つ必要があった。当たり前を当たり前で見逃さないことが、新しいアイデアに繋がると感じた。1人よりも、複数人でアイデアを出し合いながら1つの物を作り上げた方が、より良いものとなった。みんなが思う正解同士のぶつかり合いが、チームで作るものもののクオリティにも繋がると思う。



地域連携を活用した大学と地域双方の次世代育成 一心を育てる人材育成を目指して一

心理学部臨床心理学科准教授 福島里美

1. はじめに

福祉領域における支援活動は、福祉・心理・医療・看護・介護等の専門資格保持者のみならず、当事者やその家族、アルバイトやボランティアなど、地域の多様な人々によって支えられている。こうした支援の担い手は、専門性や経験の幅が広く多様であるため、支援の質を担保するための研修や育成プログラムは欠かせない。

大学もまた、人材育成を担う教育機関として、次世代を育てる責務を負っている。大学における人材育成は、専門職養成にとどまらず、学生一人ひとりの多様な進路選択を見据えた学びの機会を提供することが求められる点に特徴がある。

本稿では、大学と地域との連携により、地域における支援の担い手育成と、大学における学生の成長という双方の目的を同時に実現しようとした取り組みについて、里親制度の広報および育成活動を事例として報告する。

2. 里親制度の広報活動と次世代育成

(1) 里親養育をめぐる現状と課題

筆者はこれまで、社会的養護の領域において、養育里親および養子縁組里親を対象とした心理相談や研修活動に長年携わってきた。2000年の児童虐待防止法制定以降、里親家庭には、被虐待経験をもつ子どもや障害のある子どもなど、さまざまな背景をもつ子どもたちが家庭的環境で育つ役割が期待されている。

里親の中には、福祉・心理・保育等の専門資格を有する者もいるが、多くは資格をもたない地域住民であり、子育て経験のない里親希望者も少なくない。そのため、里親養育の担い手を育成するためには、制度理解にとどまらず、子どもの心理的理解や関係形成の在り方、困難への対処方法などを継続的に学ぶ機会が不可欠である。

加えて、里親制度そのものの認知度は十分とは言えず、地域住民に向けた広報活動と、里親を支える人材の裾野を広げる取り組みが重要な課題となっている。

(2) 地域における養育家庭(里親)体験発表会への参画

こうした背景のもと、2025年11月22日に杉並区役所において開催された養育家庭(里親)体験発表会において、筆者は講演を担当した。本企画は、杉並児童相談所フォスタリング機関である社会福祉法人聖友ホーム聖友学園里親子サポーターともさぼが中心となって企画や準備を進めた。担当者が筆者の著書を読み、丁寧な講師依頼と事前打ち合わせを経て内容を検討し、事前に児童相談所への確

認作業も行われた。また、2026年11月開設予定の杉並区子ども家庭部児童相談所設置準備課職員も準備段階から関わり、行政・実践機関・大学が連携する形で準備が進められた。本企画は事前申込制で定員50名であったが、地域住民に加えて本学学生の参加もあり、最終的には73名から申し込みがあった。

講演では、里親養育の実際や、子どもとの関係づくりにおいて大切にされる視点、里親が感じやすい困難とその乗り越え方などについて、里親の語りや心理学的観点を交えながら具体的に紹介した。専門用語を極力避け、地域住民にも理解しやすい語りを心がけた。

なお、本講演の様子は筆者の講演部分のみ録画され、杉並区公式YouTubeチャンネルにて公開された。2026年1月現在で115回再生されており、当日参加できなかった地域住民に対しても、継続的な啓発・広報の機会となっている。

(3) 大学教育との連動

本取り組みでは、地域への広報活動にとどまらず、大学教育との連動を重視した。具体的には、筆者が担当するゼミである「臨床心理学演習」の3・4年生と、公認心理師養成の必須科目である「福祉心理学」の受講者に対し、本発表会への参加を呼びかけ、学生が地域の現場に直接触れる機会を設けた。

学生にとって、里親養育に関する実践的な語りを聴く機会は、教室内の講義だけでは得がたい学習体験である。里親や支援者の言葉を通して、子どもを取り巻く社会的課題を自分事として捉える姿勢が育まれたと考えられる。また、将来的な進路として、児童福祉分野に関わる可能性を具体的にイメージする契機にもなった。

一方、地域側にとっても、大学生という若い世代が里親制度に関心を寄せることは、将来的な支援者層の拡大や、制度の継続的な理解促進につながる点で意義が大きい。

3. 地域と大学双方にもたらされた効果

地域においては、里親制度に関する理解の深化と、里親養育を社会全体で支える「チーム養育」の必要性についての認識が共有された。特に、制度説明と講演、里親による体験発表を組み合わせた構成は、里親子の現状を具体的に受け止めながら、制度的枠組みを理解する上で有効だったといえる。

大学においては、学生が地域課題に触れ、研究成果や心理学的知見がどのように社会で活かされるのかを学ぶ機会となった。学生からは、「参加者の反応をみて、体験を伴う心理学の知識が求められることを実感した」「将来の仕事や役割を具体的に考えることができた」といった感想が出ており、教育的効果が確認された。

4. 課題と今後の展望

本取り組みについては、単発的な参加にとどまりやすい点や、学生の学びをどのように継続させていくかといった課題も明らかとなった。今後は、事前・事後学習の充実や、地域との継続的な協働体制の

構築を通じて、より実効性の高い地域連携を目指したい。本取り組みは、里親制度の広報と育成という地域課題に応答すると同時に、大学における次世代育成の一端を担うものであった。今後も、地域と大学が互いの強みを生かしながら、心を育てる人材育成に取り組んでいきたい。

成女高等学校 高大連携研究

松崎くみ子

1. 成女高等学校の自主研究ゼミ

成女高等学校では、興味関心や得意なことで未来を切り拓き、社会で活躍し貢献する、自律・自立した生徒を育成するための教育体系を掲げている。跡見花蹊の建学の精神と同じくするところである。その体系における「探究」学習は、自分で問いを立て（課題発見）、自分なりの創造的な答えを探す（課題解決）営みであり、予測不可能で答えがひとつではない時代に、最も必要とされている力としている。この探求学習を「自主研究ゼミ」と呼び、生徒は自分の進路に応じて、人文・芸術・社会・生活・自然科学の5つのゼミのうちのひとつに所属し、研究活動に取り組む。1年生は、まず探求基礎で問いを立てることを学び、高大連携によるグループ研究に取り組む。2年生は進路に連動した個人研究についての構想発表を経て、さらに研究を深めて中間発表、まとめのプレゼンに進む。3年生は、やはり進路に連動して個人研究を構想し、仕上げとして卒業論文に取り組む。跡見学園女子大学からは、高大連携活動として2022年度、2024年度高1プレゼミグループ研究、2025年度高2、高3個人研究ゼミの活動に参加した。

2. 2022年度

人文ゼミ 高1プレゼミ 参加者 高1 12名

テーマ：コミュニケーションに必要な内容を考える～ブラインドウォーク体験を通して～

目的：視覚を制限することで他者とのコミュニケーションや信頼関係の構築、感覚の変化を学ぶこと
さらに、体験を数量化するために質問紙を用いること、その統計的な処理について学ぶこと

表1. 2022年度スケジュール

日付	時間	実施内容	場所	教員
10/12	5・6限	研究概要説明、仮説を立てる、質問紙作成	成女	成女
11/16	10:20～	ブラインドウォーク体験、質問紙回答	跡見	松崎
	5・6限	質問紙集計	成女	成女
12/7	9:45～	結果の分析	成女	松崎
	5・6限	分析の続き、プレゼン資料作成	成女	成女
1/14	1・2・3限	プレゼン資料作成・発表練習	成女	成女
2/4	1・2・3限	ゼミ内プレゼン	成女	成女
2/15	5・6限	発表練習・スライド修正	成女	成女
2/23		パフォーマンスフェスティバル	成女	成女

3. 2024年度

人文ゼミ 高1自主ゼミ 参加者 高1 4名 研究対象者 12名

テーマ：心身の健康を高める工夫をみつけよう

目的：心身の健康を高める工夫をひとつ選び、実験計画（実験群と対照群を設定して、心理的尺度を用いて心理的な状態を測定し、統計的に比較する方法を学ぶ。今回は「目を温める」ことを用いた。

表2. 2024年度スケジュール

月日	時間	実施内容	場所	教員
11/9	13:20~15:10	オリエンテーション 参考資料提示 全16回の課題提示	遠隔	松寄
10/23	13:20~15:10	指標について調べる 介入について調べる	成女	成女
11/3	-	ミニ研究発表	成女	成女
11/16	12:30~14:30	指標と介入を選ぶ	跡見	松寄
11/27	13:20~15:10	実験計画をたてる⇒「冬休みの宿題」として介入課題を試みる	遠隔	松寄
12/18	9:45~12:35	問題 目的 方法 までの文章化	成女	成女
1/11	12:30~14:30	「冬休みの宿題」を集める データ入力	跡見	松寄
1/29	13:20~15:10	統計処理 グラフ・表作成 報告書・パフポ 作成準備	遠隔	松寄
2/8	10:45~11:35	発表練習	成女	松寄
2/22		パフォーマンスフェスティバル	成女	成女

4. 2025年度

個人研究ゼミ 高2 1名、高3 1名（本年度は校舎改築のため1年生が在籍していないので、2年生、3年生 個別対応となった）主に電子メール、遠隔会議システムZOOMを用いてコミュニケーションをとった。

表3. 2025年度スケジュール

月日	3年生Aさん	2年生Bさん：
テーマ	どうすれば地雷メイクの好感度を上げられるか	文字の色によって記憶力に差は出るのか
7/27	分析についてのコメント	分析についてのコメント
7/29	分析についての追加のコメント	分析についての追加コメント
9/9	アンケート結果についての報告・質問	アンケート結果についての報告・質問
9/13	データファイル確認	データファイル確認

月日	3年生Aさん	2年生Bさん：
9/16	データファイル再度確認	データファイル再確認
9/18		アンケートの内容について報告・質問
9/21	アンケート結果に質問	実験用のプリントについて コメント
9/24	追加のアンケートについて 連絡	アンケート修正について報告
9/28		アンケート再度の修正について報告
10/1	追加のアンケートについて確認	追加の修正について確認
11/3	文化祭での中間プレゼンテーション	文化祭での中間プレゼンテーション

5. ふりかえり

高校生の探求学習に参加する貴重な機会を得た。自身の興味・関心にそったテーマについて、生徒自身が探求の愉しみを感じながら作業をすすめる姿に触れることができた。2020年に始まった新しい学習指導要領のもとで、高等学校では2022年度入学生から本格的に「主体的・対話的で深い学び」を身に付けてきた生徒が大学入学し、さらなる学びを深められるように、大学における学修・研究環境もしっかり整備する必要があることを感じた。

参考文献

- ・ 政府広報オンライン 2020年度、こどもの学びが進化します！新しい学習指導要領、スタート！
<https://www.gov-online.go.jp/article/201903/entry-8992.html#firstSection/> (2026年1月4日閲覧)
- ・ 成女高等学校ホームページ 成女の学び
<https://www.seijo-gk.ac.jp/education/> (2026年1月4日閲覧)

インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 —障害児と健常児が一緒に遊べる空間を目指して—

赤松瑞枝

1. はじめに

本学と2017年に相互協力に関する包括協定を結んだ埼玉県三郷市に2023年3月、県内初のインクルーシブ公園「なかよし ひろば」⁽¹⁾(以降、「ひろば」と記述)が開園した。筆者及びゼミ生も共同研究者として携わった⁽²⁾。そして整備コンセプトである「障がいの有無に関わらず、全ての子どもたちが分け隔てなく、共に遊べる」の実現に向けて、2023年度、2024年度と交流イベントを実施した⁽³⁾。今年度は、開園から一定期間が経過した現段階において、「ひろば」がどの程度認知され、どのように利用されているのかを把握することを目的として、アンケート調査を実施した。本稿では、その調査結果の概要を報告するとともに、分析を踏まえて学生が検討・提案した内容について報告する。

2. 調査概要

本調査は、三郷市内の保育園・幼稚園・認定こども園等に勤務する職員を対象として実施した。日常的に子どもや保護者と接する立場から、「ひろば」に関する認知状況や利用実態、課題意識を把握することを目的としたものである。調査項目は赤松ゼミ2年生2名が作成し、三郷市の協力を得て埼玉県電子申請・届出サービスを活用したオンライン上のアンケートとした。調査時期は令和7年8月、回答数は199件である。

3. 調査結果の概要

調査結果から、以下の点が明らかになった。

第一に、「ひろば」の認知状況については、「存在及び場所を認知している」と回答した者は半数程度にとどまり、約4割が「存在自体を知らない」と回答していた。このことから、公園の整備自体は完了しているものの、その情報が十分に市内へ浸透していない現状がうかがえる。

第二に、認知経路としては、市や施設のホームページ、人づて、公園前の看板など、限られた接点に依存しており、SNSを通じた情報取得は限定的であった。また、現行の広報活動について「十分である」と評価した回答は少なく、情報発信の工夫が求められていることが示唆された。

第三に、認知しているにもかかわらず「一度も利用したことがない」と回答した者が一定数存在し、認知と利用の間に乖離があることが確認された。その背景として、立地の分かりにくさや、季節による利用のしにくさなどが自由記述から読み取れた。

4. 学生による課題整理と提案

調査結果を踏まえ、学生たちは課題整理と意見交換を行い、「認知度向上」と「来園のきっかけづくり」が重要であるとの結論に至った。そのうえで、実現可能性や継続性を重視し、以下の2点を提案としてまとめた。

(1) 季節ごとの小規模イベントの実施

イベントは、公園を「知る」「訪れる」きっかけとして有効であることが調査結果からも示されている。学生からは、毎月定期的に季節を感じさせるイベントを、短時間で実施可能な小規模にて行うことで、初めての来園に対する心理的ハードルを下げるができるのではないかと、という提案がなされた。

昨年度実施した交流イベントの経験を踏まえ、過度に大規模な企画ではなく、スタンプラリー等の簡易な内容とすることで、運営側の負担を抑えつつ、継続的な実施が可能になると考えられる。

(2) SNSを活用した広報の強化

認知経路の偏りを改善するため、学生からはSNS（すでに活用されている公式LINE）を活用した情報発信の強化が提案された。特に、遊具の特徴や利用の様子、季節ごとの公園の雰囲気を写真と簡潔な文章で発信することで、利用イメージが具体化し、来園につながりやすくなると考えられる。学生は、投稿内容や表現についても検討を行い、利用者が安心して来園できるよう配慮した情報提供の重要性を指摘した。

5. おわりに

本年度のゼミ活動では、イベントの実施にとどまらず、アンケート調査を通じて「ひろば」の現状を客観的に把握し、課題を整理することができた。学生にとっては、調査設計から分析、提案に至る一連の過程を経験する機会となり、地域課題をデータに基づいて考える実践的な学びにつながったといえる。

今後も、三郷市との連携のもと、「ひろば」が地域に根付き、より多くの子どもと保護者に利用される場となるよう、大学として可能な形で協力を継続していきたい。

謝辞

アカデミックインターンシップにて学生をご指導くださいました三郷市役所みどり公園課のみなさま、アンケート調査にご協力くださった市民のみなさまに、深謝申し上げます。

補注

- (1) 障害の有無に関わらず、あらゆる子どもが家族や友達などと安全に、安心して遊ぶことができるよう設計、整備された公園。
- (2) 詳細は地域交流センター年次報告書「ゆかり」4号にて報告した。
- (3) 詳細は地域交流センター年次報告書「ゆかり」5号及び6号にて報告した。

引用文献

- ・赤松瑞枝「インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究－アカデミックインターンシップにおける課題解決型学習を通して－」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』跡見学園女子大学地域交流センター、p.80-p.81、2023年3月
- ・赤松瑞枝「インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 ー障害児と健常児の交流イベント実施報告ー」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書5』跡見学園女子大学地域交流センター、p.56-p.58、2024年3月
- ・赤松瑞枝「インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 ー障害児と健常児が一緒に遊べる空間を目指してー」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書6』跡見学園女子大学地域交流センター、p.32-p.35、2025年3月

防災フェスタブース出展による研究成果報告 ーフェーズフリーの定義理解と実践を促す試みー

赤松瑞枝

1. はじめに

本ゼミでは、地域と連携した実践的な学びの一環として、例年、防災をテーマとした啓発活動に取り組んでいる（文献1～文献4参照）。今年度も昨年度に引き続き、防災フェスタに参加し、研究成果をブース展示という形で発信した。

近年、「フェーズフリー」という言葉の認知度は徐々に高まりつつある一方で、その意味が十分に理解されないまま用いられるケースも増えていることが、フェーズフリー協会からの指摘として共有された。そこで本年度は、フェーズフリーを「防災を特別なものとせず日常生活に取り込む考え方」「日常の快適さが非常時の自分たちを助ける」という本来の定義に立ち返って、分かりやすく伝えることを活動の主目的とした。あわせて、来場者が「知る」だけでなく、「自分でも実践できそうだ」と感じられるような体験型の展示を行うことを目標とした。

2. 活動内容と成果

2-1. 出展内容の検討

事前準備として、学生はフェーズフリーの定義、背景、具体例、誤用の傾向などについて文献調査と事例収集を行い、理解を深めた。フェーズフリー協会代表理事佐藤唯行氏のご協力をいただき、勉強会も実施した。その中で、「フェーズフリーは商品紹介に偏って理解されがちだが、本来は暮らし全体の考え方であることを伝える必要がある」という問題意識が共有された。

そこで本年度は、フェーズフリーの考え方が反映された「住まい」に着目し、視覚的・直感的に理解

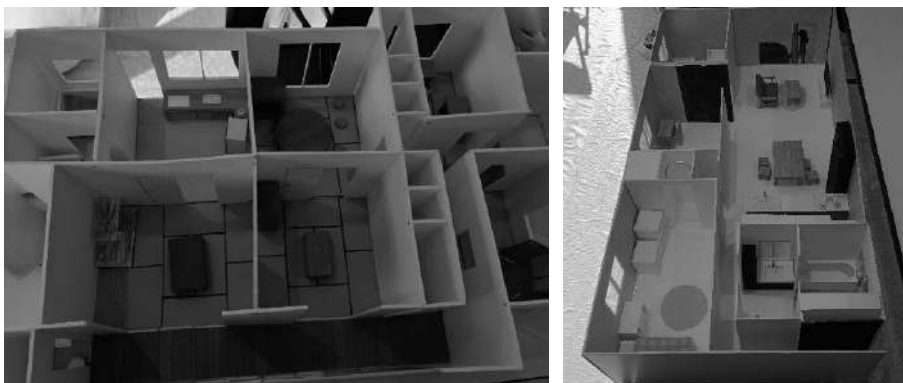


図1. 作成した模型
左：サザエさんの家 右：マンション

できる展示として、住宅模型を制作することにした。模型は、①平屋住宅、②マンションの二種類とし、それぞれに日常時にも非常時にも役立つ工夫（フェーズフリーの要素）を盛り込んだ。

特に平屋住宅については、多くの来場者にとって親しみやすい題材として、「サザエさん」に登場する家を再現した模型を制作した。来場者にはフェーズフリーの定義を説明した上で、「この家の中に隠れているフェーズフリーの工夫はどこか」をクイズ形式で考えてもらい、学生との対話を通して理解を深めてもらう構成とした。体験後には感想用紙への記入を依頼し、提出者にはお菓子を配布することで、参加への動機づけを行った。

2-2. 当日の様子

防災フェスタは2025年12月5日の10:00から14:00に文京区教育の森公園及びスポーツセンターにて開催された。ブース設営場所や周辺環境は、昨年同様であった。当日は多くの来場者がブースを訪れ、子どもから大人まで幅広い年代の参加が見られた。住宅模型は視覚的なインパクトが大きく、足を止めて興味を示す来場者が多かった。

学生は来場者一人ひとりに対し、フェーズフリーの定義を丁寧に説明しながら、クイズ形式で模型の工夫を探してもらった。その過程で、「これは普段から使っている」「特別な防災対策だと思っていなかった」といった反応が多く聞かれ、日常と防災のつながりに気づききっかけとなっていた。

感想用紙の集計結果からも、「フェーズフリーという言葉は初めて知ったが分かりやすかった」「自分の家でもできそうだった」「防災を意識しすぎなくてもよいと分かり、気が楽になった」といった肯定的な意見が多数確認された。また、平屋模型（サザエさんの家）とマンション模型のいずれに対しても、具体例があることで理解しやすいという評価が得られ、展示手法としての有効性が示された。



図2. 出展ブースでの様子

2-3. 事後の振り返り

翌週のゼミにて、活動を振り返る機会を設けた。当日の様子を振り返るとともに、回収した感想用紙の集計結果を共有し、活動の成果と課題について検討した。学生からは、「フェーズフリーの定義を説明する中で、自分自身も理解が深まった」「来場者との対話を通して、専門用語を使わずに伝える難し

さと大切さを実感した」といった意見が多く挙げられた。

集計結果からは、フェーズフリーという言葉を「知らなかった」「聞いたことはあるが内容は分からなかった」とする回答が一定数見られた一方で、体験後の感想には「防災を特別なものと考えなくてよいと分かった」「日常生活を少し工夫するだけで防災につながる事が理解できた」といった記述が多く確認された。このことから、住宅模型を用い、具体例を示しながら定義を説明するという展示方法が、フェーズフリーの正しい理解を促す上で有効であったと考えられる。

また、平屋模型(サザエさんの家)とマンション模型の両方を展示した点については、「平屋は分かりやすく楽しい」「マンションは自分の住まいを想像しやすい」といった異なる評価が見られ、住まいの形態に応じたフェーズフリーの考え方を伝えることの重要性が示唆された。学生からも、「来場者の生活環境に近い例を提示することで、より自分事として捉えてもらえる」との気づきが共有された。

一方で、説明に時間を要するため混雑時には十分な対応ができなかった点や、感想用紙の回収数が来場者数に比して限られていた点など、運営面での課題も明らかになった。今後は、説明内容の整理や導線の工夫、アンケート方法の改善などを通じて、より多くの来場者に学びの機会を提供できるように検討していきたい。

3. おわりに

本年度の防災フェスタでは、フェーズフリー協会からの要請を受け、定義の正確な理解と普及を強く意識した活動を展開した。住宅模型という身近な題材を用い、クイズ形式で来場者参加型の展示としたことで、フェーズフリーを「知識」ではなく「暮らしの中の考え方」として伝えることができたと言える。

本活動は、地域住民への啓発にとどまらず、学生自身が社会的課題を自分事として捉え、分かりやすく伝える力を養う機会ともなった。感想用紙の結果からも、来場者がフェーズフリーを身近なものとして理解し、今後の実践に前向きな意識を持ったことがうかがえた。

今後も、地域との連携を通じて、日常と防災をつなぐ視点を大切にしながら、実践的で意義ある学びを継続していきたい。

引用文献

- 1 赤松瑞枝「コロナ禍における地域活動—防災フェスタ中止に伴う啓発パンフレット作成を通して—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書3』跡見学園女子大学地域交流センター、p.29-p.30、2022
- 2 赤松瑞枝「防災フェスタにおける研究報告—3年ぶりの対面形式参加から得たもの—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』跡見学園女子大学地域交流センター、p.43-p.45、2023
- 3 赤松瑞枝「防災フェスタにおける研究報告—ブース出展による効果的な啓発活動を目指して—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書5』跡見学園女子大学地域交流センター、p.59-p.61、2024
- 4 赤松瑞枝「防災フェスタにおける研究報告—継続研究ならではの困難を越えて—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書6』跡見学園女子大学地域交流センター、p.36-p.38、2025

食品専門スーパーマーケットとの産学連携による商品開発プロジェクト (第3弾)

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは、消費者の食育を目的に2020年度から株式会社エムアイフーズスタイルが展開する食品専門スーパーマーケットのクイーンズ伊勢丹で「お客さまの未来の健康を支える」ことを目的にさまざまな食育活動を行ってきた。2023年度からは、産学連携プロジェクトとして商品開発も手掛けるようになった。一昨年の第1弾では、日々の食事にプラス1品取り入れていただくことで、手軽にバランスの取れた食事が組み立てられる“+1 (プラスワン) サイドディッシュ”をコンセプトにお惣菜3種を販売した。昨年の第2弾では、イタリアの旅気分を気軽に味わいながら、現代の日本人に不足しがちな栄養素が摂取できる、1枚に2種類の異なるピザを組み合わせせたハーフ&ハーフの冷凍ピザを販売した。

今年度、第3弾となる商品としてさまざまな料理に応用可能なレトルトソースを開発したので、商品構想から販売時のプロモーションまでを本稿で振り返る。

2. 商品開発

(1) 現場調査から導いた商品コンセプト

学生たちは商品開発にあたり、クイーンズ伊勢丹の特色やお客様のニーズを詳しく知るために、笹塚店、小石川店、新小岩店、石神井公園店の4店舗で現場調査を行い、お客様にアンケート調査並びにヒアリングを実施した。その結果から、クイーンズ伊勢丹のお客様は野菜・魚・肉コーナーに頻繁に立ち寄り、日常的に料理をする人が多く、使う食材にもこだわっていることが分かった。また、昨年のプロモーション活動や店舗調査のアンケートから得た「買った食材が使いきれない」「量や味が決まっています選びにくい」といった声から、①市販品は味や種類、量が限られていて、選択の自由が少ない、②子育てや仕事が忙しいときには料理をする時間が取れず、食事の準備や食材の管理が負担になっているという2つの課題を見出した。

そのため、今年度は「食事で満足感を得たいお客様に、その時々状況に合わせてお客様が自身の手で今のぴったりに変化させることができる商品」をコンセプトに商品開発を行うことになった。

(2) 企画立案と商品化

コンセプトに沿う商品として、ベースとなる一つの料理から、アレンジを加えることで様々な料理に変化できるレトルトのソースを選択した。お客様自身に、野菜や調味料を加えて、自由にアレンジしてもらうことを目的としている商品のため、学生は商品と同時にアレンジメニューも提案するべく準備を進めた。

7月30日(水)には連携企業である(株)エムアイフーズスタイル本社にて社長をはじめ役員、担当



図1. 社長や役員に対する商品提案

図2. 学生考案のレトルトソース

部門長に対し提案を行い、商品化の承認を得た(図1)。

その後、工場とのやり取りを重ねたが、学生の考える商品に使用する食材や味の実現が困難であったことから、現在、プライベートブランドで販売中のレトルト商品をベースに、コンセプトを叶えるレトルトソースを作成するよう方向性を修正した。最終的に「ひき肉とたっぷりビーンズのトマトソース」と「帆立ときのこの豆乳クリームソース」の2種類に絞り、シリーズ名として“アレンジプラス ON/温”を冠した(図2)。

3. 販売促進のためのプロモーションと販売実績

学生は商品の開発だけでなく、お客さまの関心を引きつけ、購入を促進するためのマーケティング活動も行った。本プロジェクトのコンセプトを伝える販促パネルや商品パッケージを考案しただけでなく、販売開始後の週末2日間はクイーンズ伊勢丹5店舗(笹塚店、小石川店、新小岩店、石神井公園店、白金高輪店)の店頭で、直接お客様に自分たちが開発した商品の紹介を行った(図3)。

2020年1月14日(水)の商品発売後、初週5日間で158袋を売り上げ、クイーンズ伊勢丹の売れ筋

パスタソースの販売数を上回る結果となった。今回開発したアレンジ可能なソースはトマト味とクリーム味の2パックセットで、販売価格は通常商品の2倍であることを考慮すると、学生の店頭プロモーションが販売実績に貢献したと言えるであろう。



図3. 店舗プロモーション

4. おわりに

(株) エムアイフーズスタイルとの産学連携プロジェクト共同開発商品として、今年度はレトルトソース2種類を上市した。

学生たちは、このプロジェクト活動を通して商品コンセプトを形にして販売するまでの困難な道のりを経験した。新商品が既存ブランドの価値観やイメージと合っているか、既存商品の製造技術やノウハウを新商品に応用できるかなど、学生目線では気づかない開発のポイントを企業の担当者から学ぶことができた。

今回の活動を通して、憧れだけで食品の開発やマーケティングの仕事は務まらないことを痛感した一方、この仕事ならではの達成感ややりがいを知り得た。「お客様に健康な食生活を意識してもらえる機会を創出する」という意識を常に持ちながら活動するのは学生にとって難しいことではあるが、都度現場に立ち返り、本プロジェクトのミッションを思い起こすことで、目的を意識した行動をとることができた。

本プロジェクトは主に4年生が1年間を通して携わっているが、社会人になった際には、この活動をおして得た経験やスキルを活かして活躍してくれることを望む。

食育出張授業「バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」 2025年度活動報告

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは、2022度から生活習慣病予防を目的とする特定非営利活動法人 日本成人病予防協会と協働し、低学年の小学生を対象とする食育活動に取り組んでいる。同協会では2010年度より「バナナうんちで元気な子～生活リズムを整えよう～」というテーマで、文部科学省、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会、公益社団法人日本PTA全国協議会後援のもと、全国の小学校で低学年の児童を対象に食育出張授業を行っている。この協会の活動のひとつである生活習慣病予防に貢献する次世代の講師を育成するための「大学生講師の育成プロジェクト」にゼミとして参加し、今年で4年目となる。今年度は3年生9名が食育講師として都内複数の小学校で食育活動を行ったのでその成果を報告する。

2. 大学生食育講師の認定

食育講師になるためには、「健康管理検定2級（後援：文部科学省）」を受検し、合格する必要がある。3年生は春学期が始まるとすぐに日本成人病予防協会からテキストを受け取り、4月中旬に協会講師による合格対策講座を受け、受験勉強に励んだ。6月12日の検定試験で9名全員が2級に合格し、食育講師になるための第一関門を通過した。その後、実技講習を受講し、夏休み期間中も実技試験の練習に励んだ結果、9月12日に実施された協会審査員を前にした実技試験に全員が合格した（図1）。これにより9名は日本成人病予防協会の大学生食育講師として小学校での出張授業を行うことができることになった。



図1. 健康管理能力検定2級合格証書とそれを手にした学生たち

3. 東京都内9校の小学校で食育授業を実施

9名のゼミ生は3名1グループとなり、日本成人病予防協会から提供された台本や資材をベースとした45分間の食育授業を都内各地の小学校で行った。対象は小学校1～3年生で、今年度は10月～1月に小学校9校、のべ754名(昨年度641名)の児童に健康的な排便習慣を身につけるための実践的な授業を提供した(図2)。

今年度は学校公開日に出張授業をご依頼いただく小学校も複数あり、3チームすべての学生が小学生のみならず、同席する保護者の前で授業を実施するという経験を得た。

〈2025年度 出張授業実施小学校〉

2025年10月4日(土)	中央区立月島第三小学校	1年生112名
2025年10月8日(水)	葛飾区立東四つ木小学校	1年生45名
2025年10月16日(木)	足立区立弘道第一小学校	2年生59名
2025年10月17日(金)	品川区立鈴ヶ森小学校	1-2年生200名 ※学校公開
2025年10月17日(金)	大田区立入新井第四小学校	1年生54名
2025年10月17日(金)	新宿区立天神小学校	1年生27名
2025年12月5日(金)	新宿区立戸塚第一小学校	3年生76名 ※学校公開
2026年1月17日(土)	葛飾区立道上小学校	1年生112名
2026年1月24日(土)	文京区立大塚小学校	3年生69名 ※学校公開



図2. 小学校での食育授業の様子

4. おわりに

今年度は昨年度よりも講師となるゼミ生数が少ない中、のべ754名の小学生(昨年度の1.2倍)に対し食育授業を実施し、小学校の栄養教育に貢献することができた。

3つのグループはそれぞれ3回授業を実施した。そのうち1回は学校公開日と重なっていたため、授業後は教員や児童だけでなく、保護者からも授業内容を褒めていただけたことが長期間にわたる練習

のモチベーションにつながった。

学生はTeamsのチャンネル上に録画した授業動画をアップロードするだけでなく、作成したファイルに授業終了後の振り返りから得られた反省点や改善点を入力し、他のグループの授業に活かすよう心掛けた。個人だけでなく、チームとしてもPDCAサイクルを回すことを意識して活動したことで、回を重ねるごとに臨機応変な対応が身に付き、目の前にいる児童たちの興味を引く工夫を凝らした授業を展開できるようになった。この点は、各小学校の担当教員や同行している成人病予防協会の担当者からも称賛のお声をいただいている。

学生の行った授業が受講した小学生の記憶に残り、未来の健康を支える生活習慣の改善に少しでも役立つことを願っている。

文京ハッピーベジタブルフェスタ 2025の展覧

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは文京区が主催する「ハッピーベジタブルフェスタ」に2013年から出展を続け、今年度で12年目(2020年はコロナ禍により中止)となった。「ハッピーベジタブルフェスタ2025」は9月10日(水)に文京シビックセンター1階展示室1・2で開催され、地域の食育団体や栄養士会、大学有志、食品関連企業など20団体が22のブースで展示を行った。ゼミからは3年生がポスター展示と体験コーナーで出展したので、その成果を報告する。

2. 今年度の出展テーマと内容

今年のイベントテーマは「色とりどりの野菜で心と体をケア」であった。例年通り、3年生は日本人の食生活の問題点について調査研究した上で、老化予防につながるビタミンによる抗酸化作用に着目し、今回の出展テーマとして「若さの鍵はACE(エース)にありー老化の原因は体のサビだったー」を選定した。

ヒトが呼吸を通じて取り込んでいる酸素の一部は、体内で活性酸素に変化する。この活性酸素は過度な運動、偏った食事、ストレス、喫煙などの生活習慣などの影響を受けて過剰に増加すると、細胞を傷つけ、老化を引き起こす。老化の原因のひとつとなる“体内の酸化”を防ぐには、活性酸素を取り除き酸化を抑制する「抗酸化物質」の摂取が推奨される。

学生は、この抗酸化物質のうち野菜から摂取できることのできるビタミンA、ビタミンC、ビタミンEを取り上げ、これらは相乗効果によって抗酸化作用が高まることをポスターで解説した。さらに、この3つのビタミンを摂取できるレシピをまとめ、レシピブックに仕立てた。

会場では、来場した幼児や児童の理解を促進するため、3つのビタミンを多く含む野菜をクレーンで釣り上げるオリジナルのゲームを体験コーナーで紹介した(図1)。



図1. 展示ポスターと体験コーナー

3. 出展の成果

当日、石渡ゼミのブースに立ち寄ってくださった来場者は341名と昨年の約1.8倍に上った。さらに、250部用意したレシピブックは、全て来場者に手渡した。学生によるイベントの振り返りでは良かった点として、「積極的な声掛けで来場者の興味を引くことができた」「お子様だけでなく年配者にも楽しんでいただける体験コーナーのゲーム企画に、小学校の教員をされている来場者から授業の参考にするというお声があった」「レシピブックを手渡す際に時短で手軽に調理できると説明を加えることで、実際に作ってみようというお声をいただけた」等の意見が出た。

次年度に向けては「レシピブックが欲しくてブースに立ち寄った方が多かったため、部数を増やすか、レシピ本のQRコードを作成して、携帯でも見られるようにする」「学生が在籍している学科や学んでいる内容について興味を示される来場者も多いので、自分たちの学んでいることを端的に説明できるようにしておく」等の改善点が挙げられた。



図2. イベント当日の展示室の様子

4. おわりに

3年生にとって、ゼミでのインプットを学外の方に向けアウトプットする初めてのイベントとして、毎年、ハッピーベジタブルフェスタに参加している。前年度に出展した先輩にアドバイスをもらいながら約半年間をこのイベントに費やした。展示ポスターの作成やその内容を実践に移してもらうための様々なツールを考えるだけでなく、4月と8月の出展者会議や文京区保健所担当者とのやり取りなど、学外の方々とのコミュニケーションも初めての経験となる。

ゼミ生にとって、ハッピーベジタブルフェスタは初めての学外イベント参加というだけでなく、老若男女問わず自分達のメッセージをわかりやすく伝えるコミュニケーション力を培う研鑽の場として役立っている。この経験を今後のプロジェクト活動にも活かし、自分たちにもできる社会貢献・地域貢献について考えて欲しい。

塩月ゼミでの袴を用いた横浜市活性化活動 — 「第73回 ザ よこはまパレード(国際仮装行列)」および 「馬車道まつり2025」への参加を通して—

観光コミュニティ学部観光デザイン学科 塩月亮子

1. はじめに — 「横濱はいからシルキレディース」との出会い—

塩月ゼミで2025年5月3日(土)に「ザ よこはまパレード」、同年11月3日(月)に「馬車道まつり」に参加することとなった契機は、2023年10月28日(土)～29日(日)の2日間にわたる第56回紫祭(学園祭)で、塩月ゼミ有志とボランティア(教職員や学生の保護者の方々など)による袴着付け体験の催し「紫祭であなたも「はいからさん」になろう!～袴(はかま)着付け体験～」を実施したことに遡る⁽¹⁾。

2日間で計100名以上が参加した当催しの写真入りの記事が大学HPやSNSなどに掲載されたことで、それらを偶然見てくださった「横濱はいからシルキレディース」⁽²⁾(袴スタイルで横浜の観光文化施設や企業のイベントに参加し、横浜の魅力を発信しているグループ)の方から、自分たちも横浜での催しの際に袴姿で参加しているので、機会があればご一緒しましょうというメールをいただいた。

そこで筆者は翌2024年11月3日(日)に横浜で開催された「馬車道まつり」に出かけて袴着付け体験のブースを訪ね、「横濱はいからシルキレディース」の事務局長・加世田江身子氏と初めて顔を合わせ、袴でのコラボができればという話となった。その結果、2025年に開催された横浜市の祭り2つに塩月ゼミも参加し、横浜市活性化のための活動を行うこととなった。

次に各祭りの概要と参加の様子をみていく。

2. 「ザ よこはまパレード」の概要と参加の様子

横浜市で行われる祭りは現在、年間を通して40種類以上もある⁽³⁾。「横浜開港記念みなと祭 ザ よこはまパレード 国際仮装行列」(本稿では短く「ザ よこはまパレード」と記述する)もそのひとつであり、主催は国際仮装行列実行委員会(横浜商工会議所・神奈川県・横浜市)で、山下公園から横浜赤レンガ倉庫前を通り、伊勢佐木町へと向かう全長約3.5kmを、趣向を凝らしたフロートやマーチングバンド、獅子舞、龍舞などが練り歩く、大規模な祭りである⁽⁴⁾。

塩月ゼミの学生13名(3年生7名、2年生6名)は、2025年5月3日(土)第73回「ザ よこはまパレード」に参加するため、朝7:50に産業貿易センターに「横濱はいからシルキレディース」、フェリス女学院大学のメンバーとともに集合し、8:00には横浜商工会議所8階に移動し各自で袴に着替え、パレード担当者から説明を受けた⁽⁵⁾(写真1)。その後、9:40にパ



写真1. 「ザ よこはまパレード」打ち合わせ
(2025.05.03 齊藤泰生氏撮影)



写真2. 「ザ よこはまパレード」袴姿のゼミ生① (2025.05.03 筆者撮影)



写真3. 「ザ よこはまパレード」袴姿のゼミ生② (2025.05.03 斉藤泰生氏撮影)

レードのスタート場所であるホテルニューグランドに行き、企画会社とも打ち合わせを行った。10：15からは、ホテルニューグランド近くの山下公園横で、県知事や市長、商工会議所会頭などが挨拶するオープニングセレモニーに参加した。

さらに、11：15からセレモニーの行われたスタート地点から塩月ゼミ生を含む袴姿総勢30名が「象の鼻パーク」へ向かい出発し、赤レンガ倉庫で西側に向きを変え、12：00過ぎには馬車道商店街、イセザキ・モールを通り、13：00頃には伊勢佐木町に到着した(写真2・3)。



写真4. 「ザ よこはまパレード」龍踊 (2025.05.03 筆者撮影)

ゼミ生たちは横浜の名所を巡り、横浜ゆかりの企業のフロートや鼓笛隊、龍踊りなどを見ることにより、横浜の歴史文化を基にした観光活用のあり方に直に触れる機会を得た(写真4)。

3. 「馬車道まつり」の概要と参加の様子

「馬車道まつり」は馬車道商店街により、毎年11月3日(祝)の「文化の日」を中心とした10月31日～11月3日の4日間、開催されている。祭りの期間中はイギリス製の馬車や人力車、鹿鳴館時代を思わせる華やかなドレスを纏った女性や袴姿の人々が通りを行き交い、横浜の開港当手を彷彿させる。馬車道マルシェ(ワゴンセール)、コンサート、野外チェス、スタンプラリー、在来馬との触れあいなど様々なイベントも催されている⁽⁶⁾。そのひとつに「横濱はいからシルキレディース」による袴着付け体験の催しがある。

2025年11月3日(月)は祝日とはいえ本学の授業日だったため、月曜の授業の無いゼミ2年生3名が「馬車道まつり」に参加し、袴着付け体験の手伝いや、袴姿で馬車に乗るなどして当時の風景の再現に協力した(写真5・6)。

参加しゼミ生たちは、横浜開港という歴史・文化が観光資源となり、「馬車道まつり」のようなイベントが催されていることを実地で学んだといえる。



写真5. 「馬車道まつり」で馬車に乗るゼミ生

(2025.11.03 横濱はいからシルキレディースのメンバーによる撮影)



写真6. 「馬車道まつり」袴姿のゼミ生

(2025.11.03 横濱はいからシルキレディースのメンバーによる撮影)

4. おわりに 一校友会一紫会より寄贈の袴の活用に向けて一

これまで紹介してきたように、横浜市における2つの祭りに塩月ゼミが参加できたのは、本学OG会である跡見校友会一紫会による「袴」一式30着の寄贈があったからこそである。紫祭(学園祭)で袴の着付け体験を実施したことで、それが学外での祭りの参加に結びつき、凶らずしも横浜市の地域活性化にゼミ生たちが袴姿を通じて貢献できたことは、観光の実践と伝統文化を学ぶという意味からも、大変意義深いことであった。今後も跡見のシンボルとして寄贈された袴を学内外で積極的に活用し、筆者のゼミ生に限らず、多くの学生たちの学びへと繋げていくことが望まれる。

注

- (1) 2024年10月26日(土)～27日(日)に実施された第57回紫祭(学園祭)では、跡見校友会一紫会から寄贈された袴一式を活用し、学園祭実行委員による袴ファッションショーが開催された。
- (2) 横濱はいからシルキレディース事務局によれば、「横濱はいからシルキレディース」は、2017年に国際観光文化都市横浜をベースに日本文化を広く紹介、プロモーションすることを目的に結成された。メンバーは、横浜を愛する大学生や社会人など一般市民が中心である。なかでも平安時代に始まり、明治30年ごろには当時の女学生の制服として愛用され、新しい時代を生きる女性の象徴でもある袴を着用し、これまで横浜が時代の変化や時のうねりに柔軟性をもって積極的に世界の文化を受入れてきたように、未来を見据えながら日本文化と融合させ斬新で画期的なチームとしてプロモーション活動を展開しているとのことである。また、事務局長の加世田氏によれば、当グループはちょうど劇場版「はいからさんが通る 前編～紅緒、花の17歳～」の公開にあわせ、馬車道にある関内ホールで横浜先行試写会のオープニング出演を機に発足し、現在は袴スタイルを制服として横浜の魅力と着物文化の発信のための活動をしているという。
- (3) 地球の歩き方編集室『地球の歩き方 横浜市 2025～2026年版』2004年 pp.16-17参照。
- (4) 主催は国際仮装行列実行委員会(横浜商工会議所・神奈川県・横浜市)。塩月ゼミが参加した第73回「ザ よこはまパレード」には、約38万人の観客が集まった。また、横浜ゆかりの企業である崎陽軒やありあげハーバー、イセザキ・モールなどの商店街、行政(横浜商工会議所・神奈川県・横浜市など)によるフロートが登場し、「キッズパレード」は15団体593名、「スーパーパレード」はフロートの部5団体、徒歩の部43団体2,224名、合計63団体2817名の

参加があった（国際仮装行列実行委員会（横浜商工会議所事業推進部内）News Release参照）。

本パレードの歴史に関しては、横浜市内中心街の接収の大部分が解除され、一日も早く横浜を復興させるため、商業部委員会で横浜に多数の人が集まる行事を計画したらどうかという発案があり、開港記念行事委員会が組織され、在留外国人も参加できる国際仮装行列が最も適当であるとして採択され、昭和28（1953）年6月2日の横浜開港記念日を期して第1回の行列が挙行されたという（ザ よこはまパレード「パレードの歴史」参照）。

- (5) 塩月ゼミ生は当日の説明会だけでなく、その前の2025年4月20日（日）、横浜開港記念会館で「横浜はいからシルキレディース」の方々による袴の着付け練習やパレードの事前打ち合わせにも参加した。
- (6) 「馬車道まつり」は昭和51（1976）年、再開発工事完成を記念し第1回、昭和61（1986）年に第2回が行われ、毎年恒例になり現在に至るとい（爽快乗馬「馬車道まつりの始まりや由来、歴史、起源は？」参照）。祭りの内容に関しては、馬車道商店街オフィシャルサイト「馬車道まつり」参照。

参考文献・サイト

- ・国際仮装行列実行委員会（横浜商工会議所事業推進部内）「第73回 ザ よこはまパレード（国際仮装行列） 横浜市の花「バラ」をテーマに、38万人の観客を魅了～「はまっパレ大賞」が決定！！～」News Release 2025年5月3日 <https://www.yokohama-cci.or.jp/wp-content/uploads/2025/05/20250503kekka.pdf>（アクセス日：2026年1月6日）
- ・ザ よこはまパレード「パレードの歴史 ザ よこはまパレード（国際仮装行列）由来」 <https://www.yokohama-cci.com/about/index.html>（アクセス日：2026年1月6日）
- ・爽快乗馬一人と馬とのコミュニケーションが楽しいスポーツを趣味に―「馬車道まつりの始まりや由来、歴史、起源は？」 <https://www.sokaijoba.com/matsurishinji/9721/>（アクセス日：2026年1月6日）
- ・地球の歩き方編集室『地球の歩き方 横浜市 2025～2026年版』2004年 GAKKEN
- ・馬車道商店街「馬車道まつり」 <https://www.bashamichi.or.jp/event/festival.html>（アクセス日：2026年1月6日）
- ・横浜はいからシルキレディース事務局「横浜はいからシルキレディースとは…」 <https://acogare.jp/>（アクセス日：2026年1月6日）

「トラベルライティングアワード新座賞」における2025年度の活動

観光コミュニティ学部観光デザイン学科 三原昌巳

1. はじめに

新座市産業観光協会では、2018（平成30）年度から地域の魅力再発見や郷土愛を育む取り組みとして、「トラベルライティングアワード新座賞」を実施している。新座市をテーマとした作品を新座市内3大学の学生に執筆してもらい、作品の中から優秀作品10作品を選出し、「新座賞」を授与するものである。新座市内3大学とは、跡見学園女子大学（本学）、十文字学園女子大学、立教大学を指し、いずれも新座市内に大学キャンパスをもつ。

本稿では、「トラベルライティングアワード新座賞」2025年度の活動報告を述べる。

2. トラベルライティングアワード新座賞の概要

トラベルライティングアワード新座賞の作品対象は、新座市域について書かれたトラベルライティング（旅エッセイ）である。文字数1600字程度でワードに執筆し、作品の題材とした場所の写真を1枚添える。写真は複数枚の添付でも構わないが、写真の良し悪しは審査の対象外である。

2024年度の最優秀賞・優秀賞受賞者表彰式は2025年2月に新座市役所で執り行われた。当該年度は、合計372作品の応募の中から14作品が新座賞として選ばれた。式典後には2024年度まで選考委員をご担当された臺純子先生も同席のもと、3大学の担当教員・職員による顔合わせが行われ、次年度に向けた応募の流れや年間計画等を確認した。年間の流れは、春学期中に作品の募集、秋学期に作品の選考、2月に受賞作品の表彰式、である。

各大学において学生運営事務局員2名以上を選出せねばならず、表1のとおり3大学持ち回りで幹事校とチラシ作成校が割り当てられる。本学が担当する2025年度学生運営事務局員の業務は翌年度用のチラシ作成である。本年度は観光デザイン学科2年生の北沢晏結子さんと坂間蓮七さんが学生運営事務局員に立候補した。2名は、5月12日17時から18時に、十文字学園女子大学にて行われた3大学の学生運営事務局員の顔合わせに出席した。さらに、春学期中にWebアプリ「canva」を上手に活用しながら、翌2026年度用のチラシを作成した。1月には選考にも加わった。

表1. 学生運営事務局持ち回りの予定

年度	幹事校	翌年度用のチラシ作成校
2025年度	十文字学園女子大学	跡見学園女子大学
2026年度	立教大学	十文字学園女子大学
2027年度	跡見学園女子大学	立教大学

3. 市内の巡検と作品の執筆

著者は、2025年度、著者自身が担当する2年生必修「基礎ゼミナール（観光）」と1年生必修「プロゼミⅠ」にて作品を募集し、執筆を指導した。

「基礎ゼミナール（観光）」の履修者に対して、授業が開始する前には作品応募の概要を伝えた。「基礎ゼミナール（観光）」では、まず、新座市の観光ボランティアガイドさんと一緒に歩くツアーを実施した。2年生に通学経路外での新座市域を歩いてもらい、新たな視点を設けてもらうことを意図したものである。夏の暑い時期を避けるため、4月26日の土曜午後に実施した。新座駅を出発し、平林寺前交差点までの約3kmを約1時間半程度で歩く「野火止用水コース」を観光ボランティアガイド2名に案内していただいた。当日参加できなかった学生たちが多かったので、後日、著者が授業後に不参加の学生たちを連れて同じコースを案内した。2時間程度の散策を行った。

次に、学生たちに、新座市産業観光協会ウェブサイト⁽¹⁾に掲載されている過去の受賞作品のうち、2024年度の14作品を読んでもらった。書き上げるエッセイのイメージが得られたことで、多くの学生たちの執筆が進んだ。執筆がなかなか進まない学生に対しては、エッセイに添える写真を選ぶところから始めてもらった。スマートフォン内の画像から新座市内の写真を選びながら、何を映した写真なのか、どのような状況で撮影したのか、どんなことを考えていたのか、などを話し合いながら、自分の意見を膨らませていった。作品の下書きは6月24日を締切日とし、当日までに書き終えた作品を授業内で読み合わせをし、さらに推敲をもらい、7月5日に全員が完成版を提出した。エッセイを書き始めてから書き終えるまで3週間程度を要した。

さらに、「プロゼミⅠ」では、グループ発表を取り入れて指導を行った。新座市に関する基礎的な知識を高めるため、グループワークとして数人で、新座市について何かテーマを立てて発表を行った。グループ発表のために新座市の観光情報を集めたり、グループ発表を聞いたりすることで新座市内のさまざまな発見があった。その後、2年生に1年生の「プロゼミⅠ」内で読んでもらう旨の許可を得て2年生の応募作品を読んでもらった。2年生には、匿名を希望した者もあれば、名前を出して構わないという者がいた。1年生たちは2年生の作品やクラス内のお互いの作品を読み合わせしてもらい、各作品に対する感想を1枚ずつ紙に書き、それを交換しあった。

1年生の作品の多くは、入学式直後に感じていた新座キャンパスへ通学することの新鮮さが徐々に失われ日常化されていく過程や、周辺の風景に目を向ける心の余裕が生まれてきた様子を描いていた。入学してまもない1年生にとっては、お互いの作品に目を通しながら、大学生活の数か月を振り返るきっかけとなった。一方で、2年生の作品は、街を案内してもらったことで魅力を感じた場所を表現し、もしくは、新たに新座市の魅力を感じるきっかけになったことを描いていた。また、新座市での日々の出来事を未来に結び付けた作品も多く、1年生と対照的であった。作品応募を通じてではあるが、「基礎ゼミナール（観光）」と「プロゼミⅠ」の学年を超えた横断的な授業となり、教員も学生たちも、学年による作品の違いを感じることができた。

最終的に、「基礎ゼミナール（観光）」の2年生7名、「プロゼミⅠ」の1年生17名の計24名の作品が集まった。履修者全員が作品を執筆したことで、応募総数を増やすことに貢献できた。

4. 受賞作品

2025年度は、応募総数638の作品応募があり、そのなかから新座賞12作品（本学3名、十文字学園女子大学1名、立教大学8名）が選ばれた。さらに、その12作品のなかから最優秀賞1作品（立教大学1名）、優秀賞2作品（立教大学2名）が決定された。

新座賞を受賞した本学の作品は、

櫻庭莉奈さん（観光デザイン学科1年）「新座で感じた自然のぬくもり」

田上由奈さん（観光デザイン学科1年）「ふたたび、ただいま—新座のやさしさに包まれて」

山崎花峯さん（観光デザイン学科1年）「新座の出逢い」

の3作品であった。どの作品からも、新座市の豊かな自然や温かな人々との交流を通じて、日常の些細な幸福感や安らぎが描き出されていた。まさに、新座市の魅力が溢れ出すような作品であった。

本年度の表彰式は、新座市産業観光協会会長、新座市教育委員会教育長、新座市長も出席のもとで2026年2月17日に催行された。

5. おわりに

最後に、課題を2点述べる。1つ目は、本学の作品応募数を増やすことである。本学では、1年生、2年生の前期課程の学生のみとなり、応募できる学年がそもそも少ない。しかし、今年度の1年生への指導をとおして、数か月のキャンパスライフゆえにみずみずしい感性に満ちたエッセイを書けることがわかった。次年度には2年生として再応募のチャンスもあるため、1年生から周知して、応募数を増やしていきたい。

2つ目は、学外活動の時間確保が難しい点である。新座市観光ボランティアガイドさんによるツアーには、学生6名が参加意思を示した。しかし、当日に欠席連絡が相次いで2名のみが参加した。ボランティアガイドさんには、人数分の資料を用意していただいたのに、欠席者の人数が参加者のそれを上回ってしまった。春学期は暑くなる時期を避け4月中には学外活動を実施したいが、履修者全員が参加できる日程は確保しづらい。春学期開始前に日程調整を行うなど、何らかの手立てを講じる必要があると思われた。

来年度も著者がトラベルライティングアワード新座賞の指導を担当する場合には、本学の地域活動の一端に資する教育活動になるよう、いっそう工夫していきたいと考える。

補注

(1) 新座市産業観光協会ウェブサイト <https://www.niiza.net/twa/> (2025年12月31日最終閲覧)。

文京区エリアスタディ（社会調査実習）

観光コミュニティ学部 佐野美智子

1. 「文京区エリアスタディ」について

「文京区エリアスタディ」は、観光コミュニティ学部の社会調査士課程科目「社会調査実習」（3・4年生対象）として開講するクラスのうち、量的調査を中心とする実習クラスの調査テーマである。社会調査実習の授業では、春学期と秋学期を通じて同じ教員が担当するクラスを履修する。一年間かけて調査の企画・設計から、実査、データの集計・分析、成果報告書の作成まで、社会調査の全過程を一通り、体験を通じて学習する。実際の調査経験を通じて社会調査法を理解し、実際に活用するためのスキルを身に付けることを授業の目的としている。

筆者が担当するクラスでは、文京キャンパスがある文京区を調査対象エリアとし、「文京区エリアスタディ」を大テーマに、毎年、さまざまな個別テーマに取り組んでいる。過去取り上げたテーマには以下のようなものがある（『ゆかり』No.6, p.55-56掲載の表に加筆）。

	テーマ	内容
第1回 (2017年度)	なぜカフェ・喫茶店を利用するのか？	カフェ・喫茶店のサードプレイスとしての役割を検証することを目的に、文京区茗荷谷エリアのカフェ・喫茶店の協力を仰ぎ、来店者に対する質問紙調査と店長に対する質問紙調査およびインタビュー調査を実施した。さらに、本学および近隣大学の学生の一部を対象に集合調査を実施した。
第2回 (2018年度)	大塚3丁目地域満足度調査	文京区では1999年以降、人口・世帯数ともに増加が続いていることをうけて、高層マンションが増えて新しく地域に住む人が増加するなか、古くから地域に住む旧住民と新住民の共生が地域社会にどのような変化をもたらしているのかを調査した。調査対象エリアは大通り沿いに高層マンション建設が相次ぐ大塚3丁目に設定した。質問紙調査とインタビュー調査（アンケート回答時にインタビュー協力願いに応じてくれた方々が対象）を実施した。
第3回 (2019年度)	教育の場としての文京区 一小学5・6年生の保護者の教育観一	文京区にはいわゆる「ブランド小学校」が多く、2013年以降に区立小の児童数が大きく増加する一方、区立中学校の生徒数は漸減するという対照的な動きを見せている。中学受験が盛んな様子がうかがえることから、小学5・6年生の保護者の教育観や子どもの将来への期待と教育費や子どもの成績との関連について質問紙調査を実施した。区立小学校の協力を得ることが難しかったため、区内の学習塾や習い事教室、児童が放課後に時間を過ごす場所を運営する団体等に調査協力を依頼し、調査票を配布した。インタビュー調査も実施した。

第4回 (2020年度)	新型コロナ禍と生活の変化	コロナ禍による生活の変化が私たちの生活満足にどのような影響を及ぼしているのか、働き方の変化と子どもの学びの変化、対面から遠隔への対応やその評価について調べるために質問紙調査を実施した。区内でも1世帯当たり人員が多い小日向地域を調査対象とした。インタビュー調査は実施せず。
第5回 (2021年度)	新しい日常(ニューノーマル)	コロナ禍による生活変化について、家計行動や時間の使い方の「ニューノーマル」を調べるとともに、コロナ収束後の生活についての考えを尋ねる質問紙調査を実施した。調査対象エリアは小石川地域とした。
第6回 (2022年度)	住みやすいまちをつくる 一大塚仲町エリア調査一	文京区大塚仲町町会との合同プロジェクト(2年間)の一環として調査を実施した。プロジェクトのテーマは、「地域に暮らす人たちが“住みやすいまちだと実感できる”まちづくり」。質問紙調査は大塚仲町町会地区の住民を対象とした。併せて、町会メンバーへのヒアリング、エリア踏査、地域イベントの参与観察調査、アンケート回答者へのインタビュー調査を実施した。
第7回 (2023年度)	人のつながりをつくる 一大塚仲町エリア調査(続)一	文京区大塚仲町町会との合同プロジェクト2年目に実施した調査では、テーマを「人のつながりをつくる」とした。質問紙調査の対象地域は大塚仲町町会地区に隣接する町会を加え大塚仲町エリア全域とした。また、大塚地区の9町会が氏子となっている神社の創祀400年の例大祭を、〈人のつながりをつくる〉地域イベントの事例として観察調査をおこなった。
第8回 (2024年度)	地域の防災を考える	地域の防災力について、自助力と共助力の双方からアプローチすることを目的に、質問紙調査を実施した。調査対象エリアは小石川4・5丁目とした。駅に近く、大通りに面する地域を中心に高層マンションが多く、単身世帯も多い一方で、戸建てを中心に古くからの近所付き合いが残る地域が混在する。過去の文京区エリアスタディ調査から、単身世帯や高層マンション居住者は、町会加入者が少なく近所付き合いが希薄となる傾向がみられた。多様な住民が暮らす地域を取り上げることで、地域防災の課題を洗い出した。
第9回 (2025年度、 現在進行中)	地域とのつながり・まちの居場所一 小日向1・2丁目調査一	住人にとって地域はどのような存在なのか、地域での暮らし満足感や愛着度は、地域における人的交流や活動参加の経験によってどのような影響を受けるのかを調査した。春学期は、地域に点在する〈まちの居場所〉(誰でもふらっと立ち寄れる地域の身近なつどいの場)を3か所ピックアップして現場に赴き、運営に携わる方々へのヒアリング調査を行った。その結果をふまえ、質問紙調査を実施(調査対象エリアは小日向1・2丁目)し、仮説検証を行った。

2. 調査を通して地域の住民とともに考えることの意義

社会調査実習の授業では、調査に協力してくれた地域の方々に対して調査結果をフィードバックするために、報告書の送付と報告会開催を行っている⁽¹⁾。報告会は、まず学生が調査結果を報告してから、

参加者からの質問や感想をいただくという構成をとっている。報告会終了後には参加された方々が名刺交換するなどの光景が見られ、地域の方々をつなぐ場として機能している様子がかがえる。

また、地域の方々にとって、調査に回答することが、地域について知る／考えるきっかけになるという点については、質問紙調査の自由記述質問への回答や欄外コメントからうかがえる。これまでの調査回でも「改めて考えるきっかけになった」という類の感想は多い。

特定地域での社会調査は、調査をすること自体が地域の住民を巻き込んでテーマについてともに考え、住民同士をつないでいく力を持っていることがわかる。地域の大学が果たす機能としてこれからも大切に考えていきたい。

注

- (1) 第1回と第3回は調査地区を限定しない調査であったため、報告会を実施していない。第4回と第5回はコロナ禍で報告会実施を見送った。調査票の最終頁で、報告書送付と報告会参加の希望を尋ねて、希望者に連絡している。なお、報告書は地域の誰もが閲覧できるように、文京区大塚地域活動センターや文京区社会福祉協議会の地域連携ステーション「フミコム」に配本するとともに、本学HPで報告書完成を告知し、QRコードから報告書pdfにアクセスできるようにしている。

白保地区みんなで助かる津波避難 ～石垣市白保地区地区防災計画～

跡見学園女子大学観光コミュニティ学部まちづくり学科 鍵屋 一

1. 白保地区の津波

1771年4月、八重山諸島を大津波が襲った（明和の大津波）。このとき、石垣島の白保村（現在の石垣市白保地区）では1,574人の住民のうち1,546人が亡くなり、生き残ったのは28人という壊滅的被害を受けた。

現在は、明和大津波時とほぼ同様の約1,500人が住んでいて、住民の津波避難意識は非常に高いといわれている。白保地区の津波被害想定は、第1波到達が最速で8分、最大遡上高が約30mとされる。一方、海岸付近から、安全とされる場所までは徒歩でおおよそ30分、車で約5分かかる。

2. 地区防災計画モデル事業への取り組み

日本時間2024年4月3日8時58分に発生した台湾花蓮県沖の地震により、石垣市には9時1分に津波警報が発令された。このとき、市内では白保地区はじめ多くの地域で車避難により渋滞が発生し、避難に時間がかかった。

この教訓から、石垣市は白保地区をモデル地区として地区防災計画を作成し、他地区にも水平展開したいと考え、内閣府の地区防災計画作成モデル創出事業に応募し、採択された。

津波避難が徒歩では完全に間に合わないことから、車避難を前提に地区防災計画を作成したいとのことであった。地区全体で車による津波避難を取り上げた地区防災計画は初めてではないだろうか。高齢者等の要配慮者がいる場合、または津波避難場所まで遠い場合に、車避難は実際には必ず発生する。それなら、「原則として徒歩避難」のスローガンにこだわらず、車避難により全員が助かる可能性を追求したいものだ。

3. 地区防災計画WSの経過

白保地区では地区防災計画作成のため、2024年度、全体として以下のように3回のワークショップ、1回の避難訓練を実施した。

- ・第1回WS：(2024年11月16日)
津波避難の課題、対策を抽出
- ・2024年12月1日 津波避難訓練
- ・第2回WS：(2024年12月14日) アイデア出し
1) 避難のタイミングと持ち物

2) 車での避難場所・避難ルート

3) 高齢者等の避難支援

・第3回WS (2025年) 2月22日：集合知を形成

4. 第1回ワークショップおよび津波避難訓練

2024年11月16日、白保公民館で第1回ワークショップを行った。筆者らが津波防災の基本的な話をした後、参加者は東日本大震災時の津波避難の経験談を読み、「課題」「対策」「へえー」と感じたことを思いつくままにポストイットに記入した。その後、9班(各班平均4名)に分かれ、ワールドカフェ方式で津波避難の課題、対策などを話し合い、各班が3～5つの対策をまとめた。

第1回ワークショップのポストイット、アイデアを時系列的に課題を分析すると、「個人の防災意識を高める」、「津波避難」、「避難生活に必要なもの」、を導出できた。

5. 津波避難訓練

12月1日、石垣市で総合防災訓練が行われ、白保地区は津波避難訓練を実施した。車両が124台、バイク5台、自転車2台、徒歩67人が訓練に参加した。ほとんどが最速の津波到達時間である8分以内に避難できたというから驚きだ。

アンケートには、「訓練では消防団などが誘導したが本番では誘導者がいなくなる」、「独居老人をどう避難させるか」、「標識があるとわかりやすい」、「車を止めるスペースなどあまり十分でないため、バイクや自転車などでの避難も考えていきたい」「車両で避難する人は徒歩で避難している人を相乗りができるようにした方がいい」など多くの意見が寄せられた。



写真1. 12月1日の津波避難訓練時の車両。相乗り避難を意識している。(石垣市提供)

6. 第2回ワークショップ

2024年、12月12日「津波避難」をテーマとして、6班に分かれてグループワークを実施した。時間内で議論を収束するために、前回のワークショップ、避難訓練アンケートを踏まえて以下の論点を示したうえ、各論点について20分程度グループで議論した。

1) 避難のタイミングと持ち物

・揺れに耐える方法

- ・何分で家を出られるか。
- ・何分で車を出せるか。
- ・持ち物、備蓄は何か。など

2) 車での避難場所・避難ルート

- ・車避難なら場所を決めず、まずは遠くへでよいか。
- ・避難ルートは、一方通行にするか。
- ・事前に、どんな準備が必要か。など

3) 高齢者等の避難支援

- ・自分だけでは逃げられない人を事前にどう把握するか。
- ・誰と一緒に車に乗せるか。(特に日中一人暮らし)
- ・逃げないという人をどうするか。など

7. 第3回ワークショップ

2025年2月22日、集合知形成のワークショップを実施した。集合知は、おおよそ、少数の専門家が考えるより、多様な人々がみんなで考えることが正しいという考え方である。これまでに出てきたアイデアを、班単位で検討し、1位には5点、2位には4点 … 5位には1点と点数をつけて、これを合算した。単に個人が点数付けするだけでなく、話し合いにより合意することが、さらに気づきを深めることを期待している。

最終的には次のような結論が得られた。

揺れがおさまったら即行動 動線 行動 想定しておく 24点 (全体のコンセプト)
--

事前① 全員が避難場所、避難ルートを確認する 21点
事前② 高齢者に玄関に出てもらう、あいのり避難 22点
事前③ 日ごろからのつながりづくり 18点
事前④ 避難用具を玄関先に常備 9点

直後① 家族に声掛け、安全確認 19点
直後② 5分以内に家を出る 10点

集合知以外の良いアイデアとして、「車は道路側に向けて止める」などもあった。この結果を生かして地区防災計画素案作成へ向かうことにしている。引き続き、車による津波避難に取り組んでいきたい。

参考文献

- ・石垣市ホームページ, 2021, 「明和天津波から考えよう」.
<https://www.city.ishigaki.okinawa.jp/soshiki/1/2/6821.html> 2025年1月10日最終閲覧

※本稿は、鍵屋一「白保地区みんなで助かる津波避難～石垣市白保地区地区防災計画～」ガバナンス、2025年3月に加筆、修正したものである。

秋田県男鹿市での「ひなんさんぽ」の実践

跡見学園女子大学観光コミュニティ学部まちづくり学科 鍵屋 一

1. 「ひなんさんぽ」誕生

2021年5月に災害対策基本法が改正され、避難行動要支援者（以下、要支援者）について、個別避難計画の作成が市町村の努力義務とされた。そして、内閣府は2025年度末までに、優先度の高い避難行動要支援者について個別避難計画作成を求めており、全国の自治体を対象に個別避難計画作成モデル事業を行っている。

このモデル事業から生まれ、話題になっているのが「ひなんさんぽ」だ。自治会からすると、防災訓練は避難訓練だけでなく、初期消火、心肺蘇生、応急救護、炊き出しをやり、人集めもしなくてはならないからだ。そこで、高齢者や障がい者の避難だけに焦点を絞って、訓練と言わずに「ひなんさんぽ」にしたらどうだろう、という岡崎市職員のアイデアから生まれた。

2. ひなんさんぽの実践

岡崎市は、まず要支援者の個別避難計画を要支援者本人・家族、福祉関係者、市職員らで作成する。次に、本人の体調、天気予報を考慮して日程調整する。このとき、地域の自治会にも要支援者がひなんさんぽするので、よろしかったら応援に来てください、と声掛けをする。

さんぽ当日は、予想を上回る大勢の地域住民が参加したという。要支援者からは「地域の人とたくさん話せた」「ふだん行けないところもみんなと一緒にだで行けた」という声が上がったという。（図1）地域住民が要支援者と一緒に散歩することで、人々のつながりを作り、災害時も平時も自然に支え合える地域づくりを目指している。



図1

3. 秋田県男鹿市でのひなんさんぽ

秋田県男鹿市は、2015年12月21日に跡見学園女子大学と連携協力協定書を締結している。その縁もあり、筆者は主に防災関係の事業に協力をしてきた。2024年度は内閣府のモデル事業により、2025年度は社会福祉協議会へ委託して「ひなんさんぽ」を実践した。

男鹿市は要支援者にこだわらず、まずは誰でも参加できるひなんさんぽから始めた。（写真1）地域



写真1. 「ひなんさんぽ」で、つながりづくり
男鹿市五里合 20250529



写真2

住民は避難所となる集会所まで散歩してから、津波ハザードマップ、津波の到達時間、避難場所等の話を聞き、津波災害の理解を高めた。その後、参加者が自らの個別避難計画を作成する。(写真2) (図2)

こうすることで、地域住民が津波から自らの命を守れるようにするとともに、要支援者をいかに守るかを考えてもらう。このとき大事なのは何度でもさんぽしたいと思ってもらえるようにお茶と美味しいお菓子を用意することだ。防災訓練と言うと、期限切れ間近の水とアルファ米を参加者に提供するのが定番であるが、それだけではお楽しみが少ない。美味しいお茶菓子が大事で、これでひなんさんぽ参加者同士が時間をかけておしゃべりできる。このような場で人と人がつながり、助かる確率が高まっていく。

私のひなん計画(津波)			
ひなんする人			
ふりがな	おが たろう	生年月日	昭和〇年〇月〇日
氏名	男鹿 太郎	年齢	〇〇歳
住所	比詰字〇〇〇-1	ひとりで玄関まで出られますか？	
電話番号 (自分と家族)	0185-〇〇-〇〇〇〇	1 出られる	
	080-〇〇〇-〇〇〇	2 出られない	
	長男：男鹿 一郎 0185-〇〇-〇〇〇〇 090-〇〇〇-〇〇〇		
ひなんの支援者			
ふりがな	つばき はなこ	できること	
氏名	橋 花子	<input checked="" type="checkbox"/> 避難しているかの確認	
住所	比詰字〇〇〇-2	<input type="checkbox"/> 避難先と一緒に行く	
電話番号	0185-〇〇-〇〇〇〇	<input type="checkbox"/> その他※具体的に書いてください	
ふりがな	あおさぎ すび	できること	
氏名	青佐木 杉	<input type="checkbox"/> 避難しているかの確認	
住所	比詰字〇〇〇-3	<input checked="" type="checkbox"/> 避難先と一緒に行く	
電話番号	0185-〇〇-〇〇〇〇	<input type="checkbox"/> その他※具体的に書いてください	
避難先・避難経路・現地確認日			
避難先	避難経路	現地確認日	
〇〇さんの家	歩いていく	令和 年 月 日	
男 鹿 市			

図2

4. ひなんさんぽの活動概要

これらから、ひなんさんぽは以下の特徴を持つ活動だと思われる。

(1) 避難行動訓練

避難場所への経路を実際に歩くことで、高齢者等が避難時の移動線や安全確保を学ぶ。

(2) 健康維持

散歩は高齢者等の体力向上を図り、避難行動のしやすさにつなげる。

(3) 地域連携

地域住民、行政、企業、福祉団体等が一体となって支援し、地域のつながりづくりを進める。

具体的な活動は、天気の良い状況で、高齢者等が避難場所まで自分のペースで散歩する。コースには休憩地点や安全確認ポイントを設定するとさらに良い。避難場所でお茶を飲みながら個別避難計画

の作成支援をする。個別避難計画だけでなく、お茶会、サロン活動、地域食堂などを実施してつながりづくりを進めるのも良いだろう。

5. 期待される効果

(1) 地域の防災力を強化

自らが住む地域の災害リスクを知り、地域住民全体の防災意識を向上させ、災害時に声を掛け合えるコミュニティの形成を促進する。

(実例) 広島県の調査では、風水害時に避難した理由として「近所の人逃げている」「知りあいから声をかけられた」が多かった。(平成30年7月豪雨 避難実態調査(広島県))

(2) 高齢者等の避難行動力向上

散歩コースに避難場所を組み込むことで、避難経路を事前に把握し、避難行動がしやすくなる。

(実例1) 宮城県七ヶ浜町では東日本大震災前に津波避難訓練に参加した者は参加しない者に比べて大震災当日に1.9倍多く避難し、さらに津波浸水域にいる場合は3.4倍多く逃げている。(中谷直樹「津波避難訓練が避難行動に与える効果」埼玉県立大学地域産学連携センター 2019年度WEB講座)

(実例2) 山形県酒田市では95歳と86歳の夫婦が2022年の津波避難訓練に参加していた。2024年1月1日、能登半島地震の津波警報では実際に避難を完了している。(写真3)



写真3. 95歳の夫と86歳の妻の避難
2022年10月29日酒田市総合防災訓練鍵屋撮影

(3) 健康促進

高齢者等が日常的に散歩を行うことで、健康状態が向上し、フレイル予防につながり、災害時の避難生活の負担が軽減される。

(4) 孤立防止

地域住民やボランティア、行政、企業、福祉団体等との交流をすすめ、高齢者の社会的孤立を防ぐことにつながる。

これまで見てきたように、ひなんさんぽは災害時の避難行動力向上はもちろん、健康促進、社会的孤立の防止、さらにはコミュニティのつながりを高めるという複合的効果が期待できる。今後、「ひなんさんぽ」が全国展開されることを期待している。

※本稿は鍵屋「全国ひなんさんぽの提案」ガバナンス、2025年1月.に加筆修正し、2025年度の男鹿市のひなんさんぽを加えたものである。

令和7年度 盛岡市「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」 実施報告

赤間珠希・辻本弥音・戸ヶ崎愛香・樋口由菜・篠崎健司

1. 事業の概要

(1) これまでの経緯

盛岡市では、令和3年度から文京区内にある大学と連携し、「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」を実施しており、本事業は令和3～5年度の第一期に引き続き、第二期として実施しているものである。

(2) 第二期・今年度のテーマ

第一期では「もりおか短角牛」振興のため、まずは認知向上を目的に、その特徴的な飼育方法を題材とした牧野での見学ツアーをはじめ様々な取組を実施した。そこで第一期事業の課題となったのは、事業後に、これらの取組を継続して行う、農家を中心とした実施グループの創生であった。

日頃から農協等を通じた生産者どうしの交流はあるものの、グループとして連携し活動を行っているグループは、もりおか短角牛についてはまだ未結成であった。こうしたことから、第二期では、もりおか短角牛の特に若手の繁殖農家によるグループづくりを行うこととした。

(3) 活動概要

日頃より交流のある農家メンバーはいるものの、共同して事業等を行ったことはないことから、まずは共同のきっかけとなる取組を行うこととした。ちょうど地域に道の駅が誕生したことから、同施設を活用し、「もりおか短角牛」の普及につながるイベントを実施することを計画し、準備や開催日の共同作業を通じて、グループ化のきっかけとすることを目的に実施することとなった（原稿執筆時は実施前）。

2. 具体的取組

ここでは、今年度の取組のうち、令和8年2月1日に実施予定の「もりおか短角牛おでん」お披露目イベントについて、その内容を取りまとめる。

(1) なぜ「おでん」か

今年度8月に実施した農家ヒアリングにおいて、アイデアとして「おでん」や「ケバブ」があげられたが、以下のような理由から「おでん」を実施することとなった。

1) 時期的な理由

実施時期については、事業の前提で年度内であることと、かつ農作業の比較的余裕のある時期とし

て1月下旬から2月上旬が挙げられ、先述の日程で行われることとなった。厳寒期でもあることから、自然と「おでん」が選択されることとなった。

2) 盛岡にはご当地おでんとされるメニューがないこと

全国にはご当地おでんといわれる、それぞれ特徴的なおでんが存在する。東北にも「青森おでん」「仙台おでん」「秋田おでん」などそれぞれ各県にご当地おでんが存在するが、岩手県にはそうしたメニューがないことがわかった。そこで盛岡の名物になるおでんを創ってはどうかということとなった。

3) 盛岡は牛肉の消費量が少ないこと

盛岡をはじめとする岩手県は、前沢牛やいわて短角牛など多くの肉牛生産を行っているものの、意外と牛肉の消費量は少ない。

総務省の「家計調査」によると都道府県庁所在地および政令指定都市の合計52都市のなかで、盛岡市の牛肉消費量は金額ベースでは最下位の52位、重量ベースでは50位となっている。⁽¹⁾

盛岡市民の日常生活のなかで牛肉を消費する食習慣が低いことはマーケットとしては可能性が低いことに通じるが、やはり牛肉の新たな消費拡大が不可欠である。

4) 「もりおか短角牛おでん」イメージ拡大、ニュースバリューが大きいこと

③と関連して、今、ここで「もりおか短角牛おでん」が創られ、将来的にご当地おでんとして公表されることは、新規性や社会性、意外性や独自性といった視点で高いニュースバリューを持っていると考えられる。

また、おでんについては、西日本を中心に肉を出汁や具材に使ったおでんが多くあるものの、東日本には少ないことから意外性もあるのではないかと判断した。

(2) 活動の内容

1) 実施主体、関係者等のスキーム（枠組み・体制）づくり

まずは主体となる農業者らのグループとして若手農家をターゲットに、本事業の主体者として活動を遂行するメンバーを第一期から関わりのある農業者と検討し、その農業者から声掛けをもらった。

さらに、実際のおでん調理においては、保健所の許可が必要となることから、設備面から食材の衛生管理を確保するため、「もりおか短角牛」の理解のある飲食店オーナーの協力を仰ぐこととした。

本学としては、おでんの出汁や具材のアイディアを出すことと、実際の店舗の装飾、おでんやイベント告知広告・情報発信を担うこととした。

2) おでんの出汁、具材の検討

「もりおか短角牛」にこだわり、出汁も牛骨やスジ、腱などを使ったものとする事とした。こうした部位は、日本短角種など黒毛和種に比べて、比較的価格の安い牛肉では使われないことが多く、その意味でもこれらの有効活用は、「もりおか短角牛」の価値の増大に繋がるものと期待できる。

具材においても、地元産にこだわり、「もりおか短角牛」の角煮をメイン具材とし、雁喰豆（地元特産）などを使った具材を検討した。

3) イベント宣伝・情報発信

本稿作成時には、道の駅もりおか渋民「たみっと」（以下、「たみっと」と表記）等に掲示するイベントポスターを作成した（図1）。

そのほか、盛岡市のホームページのお知らせや「たみっと」ホームページのイベントカレンダー等への情報発信を行うとともに、「もりおか短角牛」認知向上のためのリーフ等をイベント当日の来場者に配布することとした。

4) イベントの実施

本稿作成時はイベント実施前であることから、ここでは計画として主にスケジュールを示す。

◆1月31日まで

- ・(仮)もりおか短角牛おでん研究会の立ち上げ(若手農家を中心に飲食店オーナー、行政、本学で結成)
- ・飲食店関係者については、「たみっと」に出店し短角牛にこだわったメニューを提供している飲食店オーナーと交渉
- ・メニュー開発のため、もりおか短角牛の調達可能性や地元食材の確保の観点からおでんの出汁や具材となる食材と、特に出汁の抽出にこだわった調理方法などを飲食店オーナーを中心に農家グループも交えて検討
- ・イベントで臨時出店を行うことから、保健所との事前相談および出店申請を提出
- ・宣伝告知のため、イベントポスターを作成し、「たみっと」に掲示、また盛岡市や「たみっと」のホームページやSNSに掲示してもらう情報を作成し、掲示を依頼

◆1月31日(土) ※以下、予定

- ・「たみっと」のフューチャーセンターにて、おでん屋台の設営や飾り付けを実施
- ・おでんの下処理、準備調理

◆2月1日(日) 11:00～15:00

- ・もりおか短角牛おでんを調理・提供
- ・各農業者にイベントを通じて、グループ化や共同事業実施についての意向の変化を確認(ヒアリング調査)
- ・試食をしていただいた参加者におでんの評価や今後の方向性についてアンケート調査を実施

3. 今後の取組(次年度に向けて)

今回のもりおか短角牛おでんのお披露目イベントは、「もりおか短角牛」の普及啓発もあったが、当初の目的どおり、「もりおか短角牛」繁殖農家のグループ化のきっかけとなったかどうか最要課題である。本稿執筆時にはまだその結果がわからないものの、研究会やメニュー、イベントの内容を検討するにあたり、将来的に地元若手農家のリーダー候補とされるメンバーと活動をともにする機会を得た。

その農業者の時々の語りから、「これまで生産量が少ないので、他の産地で行っているような活動ができなかったが、他の産地では行っていないような先進的な取組ができそうだ」とか、「これまでこうした活動に参加してくれそうなメンバーを考えたこともなかったが、今回のイベントを前提に考えてみる

と、メンバー候補が意外と存在することに気づいた」などのコメントが得られた。こうした素朴な気づきがグループを誕生させるための十分なきっかけになっているのではないかと評価している。

次年度以降も、もりおか短角牛おでんを盛岡の特産品にすべく、どのような活動が必要なのかを、本事業の最終年度に、農家グループといっしょになって取り組んでいきたいと考えている。

補注

(1) 総務省「品目別都道府県庁所在市および政令指定都市ランキング」令和7年2月16日発表

玉山のいいとこギュギュッと!
もりおか短角牛おでん
～うめえでがんす!～

限定 50食!

おでん

おでん

2026.2.1

11:00-15:00

**道の駅 もりおか港民 たみっと
フューチャーセンター**

※なくなり次第終了

五山の農家が本気で作った
 こだわりのおでん
 できまひた!

"短角牛だし"と
 地元産の具材にこだわった
 盛岡の新感覚資訊おでん
 おあげんせ!

〈具材〉
 ・もりおか短角牛
 ・熊鷹豆巾着...

¥500

文京区学生と創るアグリイノベーション事業
 盛岡市役所 産業振興課 担当: 畜産科係 019-683-3853
 跡見学園女子大学/もりおか短角牛おでん研究会

図1. 「もりおか短角牛おでん」お披露目イベントポスター

2025年度 山形県西村山郡西川町・大井沢との連携事業について

観光コミュニティ学部まちづくり学科教授 土居洋平

1. はじめに

山形県西村山郡西川町大井沢は、朝日連峰の登山口に位置する山間集落である。2015年度に本学と西川町が協定を締結してから、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科（現 まちづくり学科）の土居ゼミナールが継続的に地域活動・調査等で関わってきた。関わりだした当初250人であった人口は、2025年度には約150人となり、現在も人口減少が続いている集落でもある。

すでに、これまでの『ゆかり』各号で報告しているように、土居ゼミナールでは、地域調査はもちろん、イベントの協力、そして地域づくりの検討や提案・実践に継続的に関わってきた。また、農林水産省の農山漁村発イノベーション対策事業補助を受けて設立された株式会社 大井沢I・S・Mと連携して、同社への学生の長期インターンシップ参加、情報発信業務の支援なども行ってきた⁽¹⁾。

2. 2025年度の大井沢での連携事業の実施

2025年度も、農山漁村発イノベーション対策事業補助を受けて行われた事業をはじめ、大井沢にて行われた地域事業にゼミで参加し、山間集落における地域づくりの実践に学生が関わった。

まず、昨年度に株式会社大井沢I・S・Mで長期インターンをした学生が、インターンの成果として自主的に作成した観光パンフレット「愛する大井沢」が現地で高く評価され、3000部印刷され道の駅にしかわ、大井沢温泉湯ったり館等に配架された。また、作成の様子について山形新聞



写真1. 「愛する大井沢」完成記念写真

（志田龍太郎大井沢区長（左）・作者の今井舞さん（右））

より取材を受け、5月7日に3段の記事で掲載された。

また、5月10日（土）に実施された「第5回 ONSENガストロノミー in 山形県西川町 里山の原風景大井沢」に学生8名・教員が運営者として参加した。学生たちは、スタート・ゴールおよび6か所の休憩ポイントに分散して配置され、大井沢住民を中心とした100名以上のボランティアとともにイベントの運営にあたり、運営者同士、そして約180名の参加者との交流を楽しんだ。ボランティアの中には、本学卒業生（コミュニティデザイン学科1期生）も2名参加しており、期せずして、先輩と後輩の交流の機会ともなった。

7月27日（日）には、農山漁村発イノベーション対策事業補助を用いて昨年度よりはじまった「川じゃぼ〜ん」（岩魚の放流・つかみどりのイベント）の運営に、学生3名・教員が参加した。昨年度は直前の豪雨の影響で支流の狭い空間での実施となったのが、今回は天候に恵まれ、寒河江川本流で実施さ

れ、参加者も多いに楽しんでた。学生たちは、運営にあたった大井沢住民との交流をしながら、イベントの運営を楽しみつつ、直会にてイベント企画の経緯などを聞きながら、山間部における地域づくりについての学びを深めた。

また、例年どおり、大井沢湯殿山神社例大祭(9月13日(土)前夜祭・14日(日)本祭)に学生6名と教員で参加した。こちらは、例年どおり、13日(土)早朝の幟立てから神社での神事、

神輿の巡行、夜店の準備や運営等を地域住民とともにいった。また、14日(日)の例大祭本祭にも招かれ、前日の観光誘客イベントと、当日の地元向けの神事との違い等についての学びを深めた。

さらに、ゼミの交流活動ではないが、こうした関係をもとに筆者が実行委員長である日本村落研究学会第73回大会を大井沢で実施することができた。実施にあたっては、大井沢地区住民約50名に懇親会運営や会場清掃・設営等に協力頂くことができたが、これは、長年にわたる学生の地域活動への協力による信頼の蓄積があったからである。毎年の活動に進んで参加した学生と、毎年快く学生の受け入れをして頂いている大井沢の関係者の方々に、改めて感謝の意を表したい。



写真2. ONSENガストロミー参加者

補注

(1) ゆかり1号(貴堂、2020、pp.71-79)、3号(土居、2022、pp.41-43)、4号(土居、2023、pp.91-93)、5号(土居、2024、pp.74-76)、6号(土居、2025、67-68)にて関連の活動を報告している。

引用文献

- ・ 貴堂直、2020、「平成31年度(令和1年度)の地域交流関連活動記録」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 1号』跡見学園女子大学、pp.46-84
- ・ 土居洋平、2022、「コロナ禍での遠隔地との遠隔次行の実施の可能性—西川町お土産開発プロジェクトを事例に—」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 3号』跡見学園女子大学、pp.41-43
- ・ 土居洋平、2023、「大井沢観光マップ作成プロジェクト実施報告」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 4号』跡見学園女子大学、pp.91-93
- ・ 土居洋平、2024、「大井沢地域活性化協議会 活動計画策定事業 協力報告」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 5号』跡見学園女子大学、pp.74-76
- ・ 土居洋平、2025、「2024年度 大井沢地域活性化協議会 農山漁村発イノベーション対策事業への協力について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 6号』pp.67-68

みんなのわこらぼまつり 2025 への協力について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

埼玉県和光市と本学は、2012年11月に相互協力に関する包括協定を締結し、主に国際交流を中心とした連携が行われてきた。その後、和光市のTJUP加入に伴い連携事業が拡大し、和光市で開催されている「みんなのわこらぼまつり」にも2022年度以降、本学教職員・学生が関わるようになっていく（土居、2025、pp.71-72）。本学がTJUPを離脱した今年度も、同イベントに学生・教員が参加した。

2. 「みんなのわこらぼまつり」盛り上げ隊への参加

「みんなのわこらぼまつり」は、例年、和光市市民活動推進課の呼びかけで集まった市民や学生で構成企画運営の支援を行ってきた。昨年度までは、公募で集まった市民・学生は「みんなのわこらぼまつり」企画運営委員会に参加してきたが、今年度より名称が変わり「みんなのわこらぼまつり」盛り上げ隊となり、会場の装飾やスタンプラリーの企画運営、ステージパフォーマンスの企画実施について検討することとなった。

盛り上げ隊には、本学より学生6名と教員が参加した。学生は3名ずつ、ステージチームと会場装飾・みんなのアート・スタンプラリーチームに参加して各々の企画検討を行った。ステージチームでは、イベントの最後にみんなで盛り上がる楽曲を検討し、ジャンボリミッキーを参加者全員で踊るという企画を立案し準備を行った。会場装飾・みんなのアート・スタンプラリーチームでは、参加者でつくるアート作品の内容の検討、スタンプラリーの場所やクイズ内容、装飾についての検討と準備を行った。昨年に引き続き、今年度も24年3月に和光市役所に就職した本学卒業生が担当者として委員会の運営を担ったが、昨年度と異なり今年度は主担当者として説明や調整を担っており、学生には大きな刺激となったようであった。また、昨年度までと同様、TJUP会員校である大東文化大学からも3名の学生が運営に参加した。

わこらぼまつり2025 盛り上げ隊募集

みんなで作ったらきっと楽しい
あなたなら“このまつり”どう盛り上げたい？

みんなのわこらぼまつり2025
令和7年5月31日(土)
和光市役所市民広場・ステージ
募集内容:わこらぼまつりの企画・当日運営

◆会議日程・開催場所

01 メンバー会議 3/1(土) 和光市役所5F AG2会議室 9:30-11:30	02 メンバー会議 3/15(土) 和光市役所5F AG2会議室 9:30-11:30	03 メンバー会議 4/5(土) 和光市役所5F AG2会議室 9:30-11:30	04 メンバー会議 4/19(土) 和光市役所5F AG2会議室 9:30-11:30	05 メンバー会議 5/10(土) 和光市役所5F AG2会議室 9:30-11:30
---	--	---	--	--

《Googleフォーム、メール、または電話にて申し込み》
和光市市民活動推進課 協働推進担当
☎048-424-9120 ✉c0200@city.wako.lg.jp
※住所・氏名・年齢・電話番号・メールアドレスをご提供いただきます。

図1. もりあげ隊募集チラシ

盛り上げ隊の打合せは、2月と3月が月1回、4月からは月2回ペースで開催され、2チームにわかれて交流しながら準備作業を行った。学生たちは、何度も地域住民の方々、他大学の方々と顔を合わせなかで交流を深めていった。

3. 「みんなのわこらぼまつり2025」の実施

2025年5月31日（土）、和光市役所市民広場・サンアゼリア小ホール・展示棟にて、みんなのわこらぼまつり2025が開催された。前日30日（金）は、午前中からステージのリハーサルが行われ、また、会場設営等に学生が参加した。当日は、あいにくの雨のなか9時から準備作業が行われ、10時からイベントがスタートした。



写真1. グランドフィナーレの様子

盛り上げ隊メンバーは、舞台進行の管理や司会、みんなのアート、スタンプラリーの運営、ステージパフォーマンスを行った。雨のために多くの舞台パフォーマンスが中止となるなかで、ステージチームの舞台企画は予定通り行われ、昼前にはフィナーレにむけた参加者向けの踊りの練習も行われた。幸い、フィナーレの時間には雨はやみ、例年より少ないとはいえ家族連れを中心に多くの参加者が部隊前に集い、全員でジャンボリミッキーを踊り盛り上がることできた。

また、今年度も昨年度まで本イベントにボランティアで参加していた学生が和光市役所に就職しており、都市計画課の出展者として参加していた。先の市民活動推進課の卒業生に加え、他課でも活躍する卒業生との交流は、学生にとって大きな刺激となったようである。

なお、昨年と同様、イベント終了後も盛り上げ隊参加者同士の交流は進み、和光市内のその後のイベントに今回の参加学生が関わることもあった。また、こうした交流をもとに、次年度の盛り上げ隊にまた参加したいといった希望もでてきている。定期的に会合がありイベント実施に至るまでに関係性が形成されることで、その後にもつながる関係が築かれやすく、学生にとっても継続的に関わる地域となることで、まちづくりへの理解を深めやすいイベントとなっている。

引用文献

- ・土居洋平、2025、「みんなのわこらぼまつり2024への協力について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 6号』跡見学園女子大学、pp.71-72

第40回文京朝顔・ほおずき市への協力について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

文京朝顔・ほおずき市は、文京区の礫川地区の町会を中心に関係団体が参加して構成された実行委員会が主催する、朝顔とほおずきの展示・販売を軸とした地域イベントである。本学もマネジメント学部のゼミ活動で協力するようになって依頼、形を変えながら10年以上にわたって協力をしてきた。今年度も、地域交流センターが公募で呼びかけた学生、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科土居ゼミナールが協力している。

2. 第40回文京・朝顔ほおずき市への本学の協力

第40回文京朝顔・ほおずき市は、2025年7月19日(土)から20日(日)にかけて、文京区礫川地区の傳通院、源覚寺、善行寺、澤蔵司稻荷、礫川地域活動センター前を会場に実施された。今回は、まちづくり学科土居ゼミナールの学生15名と、地域交流センターの呼びかけに応じたボランティア学生7名が準備段階から参加した。実行委員会には、広報副部長として筆者が長らく筆者が参加してきたが、今年も数名の学生が実行委員会に参加し、パンフレット中の礫川地域の説明部分のデザインや内容の制作を担当した。

また、土居ゼミナールの学生は、春学期のゼミ活動のなかで、朝顔の購入にきた子どもが更に楽しめること、快適にお祭りを過ごせることをテーマに出店内容を検討し、イベント当日は傳通院にてうちの絵付け体験とゼリー入りジュースの販売を行った。うちの絵付け体験の際は、子どもに手ほどきをしながら、親子と交流を図り地域への理解を深めることができた。また、気温33度の炎天下のなかで、ゼリー入りジュースの売れ行きは好調であった。



写真1. うちの絵付け体験の様子

また、地域交流センターの公募で参加した学生たちは、朝顔の販売や傳通院本堂前の記念写真撮影コーナーの運営を担った。記念写真撮影コーナーには、前年度に本学学生がデザインした千姫と閻魔様のイラストを等身大パネルにしたものが設営され、子どもがダンボール製の兜や鎧を着て一緒に写真が撮れるようになっていた。学生たちは、親子連れに声をかけ記念撮影を行い、区民との交流を深めた。また、開会式の受付の手伝いも行い、開会式に参加しながらイベントの由来、地域の歴史についての理解を深めた。

毎年暑さが増す中の真夏のイベントということもあり、実行委員会では、熱中症対策の強化が図られ

た。具体的には、ミストシャワー付きの扇風機の増設し、傳通院の会場テントの上部には日よけの網が設置された。また、礫川地域活動センター前では、消防署による散水イベント等も行われ、暑さを和らげる空間が各所に作り出された。なお、例年増す暑さに対応して、今回から土曜日の終了時間が19時から15時に変更されている。

イベント終了後、学生たちは担当ブースの撤去作業だけではなく、会場全体の撤去作業にも参加した。人手を多く必要とした風鈴の撤去作業等も担い、当日だけの参加学生も実行委員との交流を深めた。イベントから1か月が経過した8月22日には傳通院にて反省会兼交流会が行われた。学生2名も参加し、多くの実行委員から感謝の言葉を受けていた。



写真2. 記念撮影コーナーの様子



写真3. 風鈴撤去作業を行う学生たち

3. まとめ

文京朝顔・ほおずき市は、10年以上にわたって形を変えながら本学が関わってきたイベントである。実行委員会のなかには、本学園が大塚に移転する前に校舎のあった柳町付近の町会も含まれており、積み重なってきた信頼をもとに、学園150周年の関係イベントの周知も、快くお引き受け頂くことができている。

一方で、この間に学内での主要な協力団体は、マネジメント学部ゼミから学内サークル、地域交流センター関連団体や公募、コミュニティデザイン学科ゼミと移り変わってきた。教員の退職や学内団体の盛衰等で、例年、どのような団体で協力を行うかが課題にはなっているが、文京キャンパスからも遠くなく、本学と縁の深い地域の主要な行事であることから、地域交流センターとしては、来年度以降も継続的に当イベントへの協力をしていきたいと考えている。

RUN伴文京区への協力について

観光コミュニティ学部まちづくり学科教授 土居洋平

1. はじめに

RUN伴は、NPO法人フレンドシップクラブのライセンスにより全国で実施されているイベントで、認知症の啓発を通じたダイバーシティ社会の実現を目指したものである。当初は全国を樗でつなぐ形で行われていたのが、近年では自治体等の地域単位で実施されるようになっている。文京区でも、数年前からRUN伴文京区実行委員会が主催する形で行われている。例年、本学からも当日運営ボランティアとして学生が関わってきたが、今年度からは、実行委員会に筆者とゼミ学生数名が参加して、準備段階から関わることとした。今回は、その経緯と実行委員会の様子、当日のイベントへの筆者および学生の関わりについて報告する。

2. RUN伴文京区実行委員会への参加とその活動

RUN伴文京区は数年前から現在のRUN伴文京区実行委員会の主催という形にて行われている。実行委員会の事務局は、文京区本郷の地域の居場所HONGO22515に置かれ、同施設の竹形氏が事務局長を務めている。筆者は、長らく同所にて定期的に会合を重ねてきた文京まちたいわグループに参加しており、RUN伴文京区にも何度か誘われたこともあった。しかし、例年、RUN伴文京区の実施日が本学の推薦入試の日程と重なっていたことや、実行委員会のメンバーの半数ぐらいは文京まちたいわグループと重なっており、そちらで顔を合わせる機会も多かったために参加することでの地域の関係性の広がりなどもあって、学内で当日運営の学生ボランティアを募る程度の協力に留まっていた。しかし、文京まちたいわの定期ミーティングが通年から年一回・2月の文京まちたいわフェスの実施3か月前ぐらいからに変更になったこと、この間に運営ボランティアとして参加した学生から多くの学びがあったことなどを踏まえ、今年度より事前の準備段階から筆者も参加し、ゼミ生にも活動内容を説明し、関心のある場合は参加を促すようになった。

RUN伴文京区の本番は11月中旬であるが、準備の会合は年度の改まる前の2月中旬より始まる。この時期に、次年度のRUN伴の実施に向けた全国団体のオンライン説明会があるため、RUN伴文京区では、HONGO22515に実行委員が参集し、そこからオンライン会議に参加する形をとっている。以降、月2回、第2第4木曜日の夜に定例の準備会合が行われている。

11月中旬のイベントに、2月から月2回の定例ミーティングはイベント準備としてはかなり頻度が高いものではあるが、これには、RUN伴文京区の運営の方針が関わっている。文京まちたいわの事務局でもある竹形氏は、何か目的があって地域イベントの準備で集まる際は、単にイベントの準備そのものを行うというよりも、それを通じて地域の間関係が深めることの方が重要であると考えている。RUN伴文京区も、その方針で、会合では事前に決められた議題に沿って淡々と議論がされていくというよりも、参加者の近況報告に時間が多く割かれ、その後のイベント準備の議論も、事前に決められた課題

に沿って淡々と行われるのではなく、その場で参加者が思いついた事項を中心に展開していくものであった。

こうした方式により、通常のイベントでの関係性に比べるとRUN伴実行委員会では、委員の実行委員会への所属感覚も強い。また、それによって例年様々な新しい試みが行われている。今年度は、神戸市のサービス付き高齢者向け住宅「はっぴーの家ろっけん」（神戸市長田区）を舞台にしたコミュニティムービー「30（さんまる）」（鈴木七冲監督）が、RUN伴と理念が重なる部分があるということで、この上映会をRUN伴文京区実行委員会が実施することが提案されている。この提案は、その後実際に鈴木監督への依頼と交渉、会場の調整等を経て、2025年7月13日に本学プロッサムホールにて実現している。以後も、今年度のコースの検討なども実行委員会でアイデアが提案されながら行われ、今年度ははじめて菊坂跡見塾（旧 伊勢屋質店）が拠点（コース上の休憩ポイント）に設定された。また、筆者の仲介により、文京区と順天堂大学が協働で管理しているウェルネスパーク元町（旧 文京区立元町小学校校舎）が当日の実施本部（スタートとゴール地点）となっている。



写真1. 映画「30（さんまる）」上映会の様子

この上映会をRUN伴文京区実行委員会が実施することが提案されている。この提案は、その後実際に鈴木監督への依頼と交渉、会場の調整等を経て、2025年7月13日に本学プロッサムホールにて実現している。以後も、今年度のコースの検討なども実行委員会でアイデアが提案されながら行われ、今年度ははじめて菊坂跡見塾（旧 伊勢屋質店）が拠点（コース上の休憩ポイント）に設定された。また、筆者の仲介により、文京区と順天堂大学が協働で管理しているウェルネスパーク元町（旧 文京区立元町小学校校舎）が当日の実施本部（スタートとゴール地点）となっている。

3. 2025年度 RUN伴文京区の実施

以上の準備を経て、2025年11月16日にRUN伴文京区が実施された。当日は、本学から筆者及びゼミ学生4名が参加し、東西のコースに分かれての運営の支援にあたった。ランナーや関係者は朝、ウェルネスパーク元町に集合して準備の後に開会式が開催された。開会式には文京区長も参加し、施設の屋外にて全体の記念撮影なども行われた。その後、区長によるスタート号令があり、東と西の二コースにランナーが分かれて出発していった。



写真2. 開会式で挨拶する文京区長

筆者は、東コースの4拠点目までランナーとして認知症の当事者およびほかの伴走ランナーと、各所で交流しながら一緒に走り抜けた。その後は東コースのゴール前の最終拠点となった菊坂跡見塾に移動し、ランナーの受け入れ準備を行った。学生4名のうち1名は西コースの伴走と取材支援を行い完走している。また、もう1名は西コースの拠点の一つであるTUMMYでのランナー受け入れ・おもてなしを行ってから菊坂跡見塾に移動し、こちらでもランナーの受け入れとおもてなしにあたった。残りの2名は、本部業務を支援したのちに菊坂跡見塾に移動し受け入れとおもてなしを行っている。

菊坂跡見塾では、筆者と3名の学生が東コースのランナーを受け入れ、あと水を提供したほか、菊

坂跡見塾の施設紹介を行った。学生3名は、ランナー到着前に筆者から施設についてのレクチャーを受けたうえで、施設の紹介をしている。紹介後は、学生たちはランナーとともにウェルネスパーク元町のゴールを目指し一緒に走っていった。筆者も菊坂跡見塾施設後、ランナーと合流し一緒にゴールまで走った。

東コースは予定より少し早めのゴールとなり、その後、ほぼ予定の時間に西コースのランナーもゴールに到着した。大きなトラブルもなく無事にイベントは終了となった。終了後は、近隣の飲食店にてランナーも招かれ交流・懇親会が開催された。筆者も学生4名も参加し、筆者の乾杯の音頭で会がはじまり、学生も実行委員や参加者との交流を深めた。また、東コースには途中から映画「30(さんまる)」の鈴木監督も参加し交流・懇親会にも参加し交流をさらに深めていた。

なお、実行委員会としての反省会も、11月第四木曜日に開催されている。筆者は別件にて参加できなかったが、ここには学生が参加して、交流をさらに深めている。

4. 実行委員会を通じた交流の展開

RUN伴文京区実行委員会は、そのイベントの運営方針から準備等を通じた関係性の形成・深化が目指されている。今回も、参加した学生はそれぞれで実行委員との交流を深め、一人は自分の関心に沿って地域メディアを担っている実行委員の紹介もあって、文京区の地域メディアに自主的に関わるようになった。もう一人は、もともとTUMMYに関わるなかでRUN伴文京区にも関わるようになっていたが、今回の取り組みを経て、そのつながりをさらに深めていったようである。また、1人は卒業論文の対象としてRUN伴文京区を取り上げ、10か月に渡り継続して実行委員会に参加しながら調査を進めていった。その結果、自分もこのイベント運営のメンバーという意識を強め、実行委員会への居場所感覚を高めていた。

ほかのイベントにも当てはまることではあるが、文京区でのイベント準備の集まりは、区内の様々な地域活動の担い手との繋がる機会となっており、こうした関係をもとに、別の活動へ学生が関わる一つのきっかけともなっている。今後も、学生がまちづくりに関わるきっかけであり、また、まちづくりについて実践的に学ぶ場としてRUN伴文京区にはかかわっていきたいと考えている。

2025年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

2024年度の「文京まちたいわフェス」も、本学文京キャンパス3号館の各教室およびオープンスペースで開催された。すでに本誌で紹介してきた⁽¹⁾ように、「文京まちたいわフェス」は、2021年以降、本学で開催してきた。また、開催にあたっては本学地域交流センターが協力名義を提供している。

今回も、2月実施ということから本誌への報告は次年度の報告書ということで、2024年度中ではあるが、2025年2月に開催された「文京まちたいわフェス2025」について報告する。なお、2026年1月現在、2026年2月15日に「文京まちたいわフェス・2026」が本学で開催されることが予定されていることを付記する。これについては、次号の本誌にて紹介の予定である。

2. 文京まちたいわフェス2025の実施について

文京まちたいわフェス2025は、2025年2月11日(祝)に、例年と同じく、本学文京キャンパス2号館3階のM2301・M2304・M2306及び3階オープンスペースにて開催された。イベントの企画は月1回(毎月11日)の文京まちたいわの定例ミーティングで検討され、実施の運びとなった。今回も、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科(現：まちづくり学科)土居ゼミナールの教員と学生10名が運営に協力している。

また、今回の午前中のトークセッションのテーマが「残したい建物と地域のつながり」ということもあり、跡見「学芸員」in菊坂のメンバー2名も参加し、セッションにて報告をしている。このテーマは区民の注目も高いからか、午前中のトークセッションには100名前後の参加者があった。セッションでは、まず、本郷鳳明館について細見直史氏(株式会社松下産業)、大曾根美代子氏から保存に至る様子や現在の活用状況について報告があった。続いて、菊坂跡見塾(旧 伊勢屋質店)について、跡見取得前の保存



写真1. トークセッションで報告する学生

活動の状況について、多児貞子氏(文京歴史的建物の活用を考える会：通称 たてもの応援団)と大松有紀子氏(文京の文化環境を活かす会)より報告があった。続いて、筆者が本学が取得に至って経緯と現在の大学での施設活用の概況について報告した。その後、跡見「学芸員」in菊坂から、黒木真悠さん、津島誇乃佳さんが菊坂跡見塾を舞台にした学生による調査活動や企画展の実施の様子について報告を行った。最後に、本郷瀬川邸について、瀬川智子氏(元住人)が保存等の状況について報告した。報



写真2. 歌声を披露する本学学生



写真3. 子ども縁日の様子

告後はグループにわかれて歴史的建造物の保存と活用、地域とのつながりについて議論が交わされた。本学参加の学生も各グループに分かれて議論に参加した。

昼食の時間には、例年どおり1分プレゼンとポスターセッションが行われ、区内のまちづくり活動に関わる団体や個人が自分たちの活動について語り、その後、昼食を交えながら参加者との交流が図られた。

午後はオープンスペースにおいて区内で活動するバンド等の演奏が披露された。中には、このイベントがきっかけで本学学生も参加するようになったバンドもあり、家族連れも含めた参加者の前で様々なパフォーマンスが披露された。また、これと並行してM2306では区内のデコパージュアーティストによるハンドクラフトワークショップが行われたほか、M2301にて土居ゼミナールで企画運営を担当した「こども縁日」も実施された。広報期間が例年よりも短かった関係で、昨年よりは来場者は少なかったものの、多くの子供たちで会場は賑わっていた。

例年同様、予約なしの一般参加ができる演奏込みのイベントであったが、近隣からの苦情等トラブルもなく、無事に終えることができた。

補注

(1) 過去に本誌1号(貴堂、2020、p.69)・4号(土居、2023、pp.49-50)・5号(土居、2024、pp.83-85)・6号(土居、2025、pp.83-35)にて「文京まちたいわ」設立の経緯、本学での「文京まちたいわフェス」実施に至る経緯、2022年～2024年度の本学での「文京まちたいわフェス」実施の様子を報告している。

引用文献

- ・ 貴堂直、2020、「平成31年度(令和1年度)の地域交流関連活動記録」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 1号』跡見学園女子大学、pp.46-84
- ・ 土居洋平、2023、「『文京まちたいわ』との協働—『文京まちたいわフェス』の本学での実施」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 4号』跡見学園女子大学、pp.49-50
- ・ 土居洋平、2024、「2023年『文京まちたいわフェス』への協力・本学での実施について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 5号』跡見学園女子大学、pp.83-85
- ・ 土居洋平、2025、「2024年『文京まちたいわフェス』への協力・本学での実施について」跡見学園女子大学地域交流センター『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 ゆかり 6号』跡見学園女子大学、pp.69-70

委員就任をきっかけにした東久留米市との連携の展開について

観光コミュニティ学部まちづくり学科教授 土居洋平

1. はじめに ー連携に至る経緯ー

東久留米市は、新座市の南西部に隣接した人口約11万人の自治体である。市内にはひばりが丘団地の一部や滝山団地等の大規模団地も含まれており、東京郊外都市として市民活動も活発な地域である。その東久留米市において、今年度、市内コミュニティ施設（市民プラザ・地域活動センター）の指定管理者を選定するための選定委員会が設立されることとなった。市役所担当にて近隣大学で学識者委員として協力を依頼できる人材を探していたところ、大学ホームページより筆者のことを知り、依頼されるに至った。また、対象施設が市民活動の拠点となるもので、自分の専門性との兼ね合いで協力できると判断し、学識経験者委員として参加することを受託した。その後、担当部署である生活文化課からの詳細な説明を受けたうえで委員会に参加し、4度の委員会を経て指定管理者の選定を行っている。

また、担当課からの説明の際に、新座キャンパス近隣の自治体ということもあり本学との連携の広がりについても意見交換を行った結果、2回目以降の打合せには、生活文化課以外の本学と連携を希望する部署の担当者も来校し、具体的な連携事項についての相談を受けた。

その結果、子ども家庭センターより、市の子ども・子育て会議市民委員に市内在住の学生の参加が打診された。今年度の筆者の基礎ゼミナールの学生に市内在住者がいたため声をかけたところ関心をもち、学生が応募し委員会に参加している。

さらに、産業政策課からは東久留米市民みんなのまつり（11月15・16日実施）への協力の相談もあった。実施日のうち1日は他イベント（RUN伴文京区）と重なってはいたものの、協力の可能性を検討し、東久留米市民もいる基礎ゼミナールにて協力をする運びとなった。以下、その協力の内容について、以下に具体的に報告する。

2. 東久留米市民みんなのまつりへの協力

「東久留米市民みんなのまつり農業祭・商工祭」は、市役所、青年会議所、商工会、JAが参加している東久留米市市民みんなのまつり連絡協議会を主催者とし、東久留米駅前広場から市役所にかけての大通りにかけて行われるイベントで、2025年度で43回目の実施となるものである。例年11月上中旬に行われており、今回は11月15日（土）・16日（日）の二日間にわたって開催されている。

6月20日（金）に産業振興課の担当者が本学を訪れ、学生のイベントへの協力についての相談があった。具体的には、運営ボランティアの募集への協力と、東久留米駅前広場のメインステージ周辺にて行われる東久留米音頭への誘客方法の検討・実践への協力を依頼されている。

運営ボランティア募集への協力については、地域交流センターを通じて学生に呼びかける形で行い、学生が1名参加に至っている。メインステージへの誘客の検討・実践については、筆者の基礎ゼミナールにて協力することとし、基礎ゼミナール内にて検討・実践に協力することとなった。



写真1. ステージの様子



写真2. 子ども家庭センターブース

誘客の検討・実践の依頼というのは、メインステージで例年行われている東久留米音頭が観客こそ多いものの実際の踊りの輪に入ってくる市民に限られており、この点を具体的にどうするかを一緒に検討したいという依頼であった。この内容は、まちづくり活動の一つととらえ、産業振興課から関連の情報を入手しながら、基礎ゼミナール内にて方法を検討した。その過程で、東久留米音頭は市内の小学校では学ぶ機会もあるということから、小学生を連れた親子連れをどう巻き込むかということに焦点をあてて、小学生が踊りに参加したくなるものを前座として行い、その流れで東久留米音頭に参加してもらおうという提案をするに至った。

そのうえで、9月4日(木)には、東久留米市の担当者が新座キャンパスに来校し、学生の提案を聞きながら具体的な実施方法について意見を交わした。なお、この打合せにはステージ部分を担当している産業振興課とともに、子ども家庭センターの担当者も来校した。子ども家庭センターからは、本学学生が委員に参加していることもあるので、ステージイベントの時間以外の範囲で子ども家庭センターブースの運営への協力の打診があった。せっかくの機会ということで、基礎ゼミにてブース運営にも協力する運びとなった。

さらに10月3日(金)には基礎ゼミ学生を引率して東久留米市役所に行き、市役所にて打合せを行うとともに、現地確認を行った。打合せでは、東久留米音頭の前行う楽曲を「ジャンボリミッキー」と定め、その部分の司会も学生担当し、ステージ上で見本の踊りに筆者、学生と東久留米の民謡サークルのメンバー等で行うこととなった。

その後は、司会進行の詳細や段取りの調整を行い、練習をしたうえで11月15日(土)・16日(日)に臨んだ。学生たちは15・16日の両日に参加し、子ども家庭センターブースの運営支援を行ったほか、15日(土)にはステージイベントの協力を行った。ステージイベントは15日(土)の午後に設定され、学生の司会のもとでジャンボリミッキーを演舞した。開始当初こそ周囲に多くの来客はあるもののステージ付近のところには人がすくなかったが、学生の司会のもとジャンボリミッキーが流れると、子どもたちを中心に多くの家族連れがステージ付近に集合した。また、事前に協力を打診していた市民団体の協力もあり、次第に多くの市民がステージの周りでジャンボリミッキーを踊っていた。ステージ側からは、多くの子どもや家族連れが笑顔で楽しむ様子が確認でき、企画がうまくいったことを実感することができた。その後、東京ブギウギを挟んで東久留米音頭が演舞された。東京ブギウギは、2023年度後期のNHK連続テレビ小説「ブギウギ」で話題になったものでもあり、多くの市民が知っている

ものということで更に集客を目指して演舞されたところだったが、こちらは子どもの反応はいま一つで、この間に若干の子ども連れの家族がステージ周辺から離れてしまったところは悔やまれるところであった。とはいえ、その後の東久留米音頭には一定の参加者が集っており、筆者や学生も参加して楽しく踊り切ることができた。

それ以外の時間は、子どもの権利条約の周知と子供向けのアンケート調査への協力を行った。学生たちは、まつり各所を巡り調査協力への依頼等を行った。この結果は、市民でもある学生が参加している委員会でも報告される予定である。また、市担当者とは次年度以降の連携についても意見交換を行っているところである。

3. まとめ

今回は、市担当者がホームページで筆者のことを知り委員についての打診をしたことをきっかけに連携が展開していったものであった。今回は偶然、東久留米市在住の学生がゼミにいたこともあって連携が展開したが、このような一つのことをきっかけに偶然が重なり連携の広がるというのは、今後もあり得ると考えている。

一つ一つの連携の芽となるきっかけに対して丁寧に向き合い、真摯に対応していくことで信頼を積み重ね、今後も各所で連携の輪を広げる取り組みを実践していきたいと考えている。

第6回「文の京書道展」開催報告

文学部人文学科准教授 香取潤哉

はじめに

2025年4月、跡見学園女子大学文学部人文学科に准教授として着任し、あわせて本学における書道教育および関連行事を担当することとなった。今回で第6回を迎える「文の京書道展」は、前任の横田恭三先生が長年にわたり築き上げてこられた、本学を代表する地域連携型の書道展であり、着任以前からその意義や評価についてはさまざまな場面で耳にしていた。

着任当初は、伝統ある書道展を引き継ぐことへの不安も少なくなかったが、横田先生が丁寧にまとめてくださった過去の開催資料を参照しつつ、地域交流センター職員の方々と繰り返し打ち合わせを重ねる中で、次第に全体像を具体的に思い描けるようになった。とはいえ、企画から運営までを主担当として行うのは初めての経験であり、準備は夏前から段階的に進めることとした。

これまで本展は、文京アカデミア講座の実施時期に合わせ、7月開催を基本としてきたが、筆者の着任直後という事情も踏まえ、今回は開催時期を秋の11月へと変更した。結果として、「芸術の秋」に相応しく落ち着いた雰囲気の中で展示を行うことができ、来場者にも比較的ゆとりをもって作品を鑑賞していただける会期となった。以下では、第6回「文の京書道展」の開催概要と展示の様子について報告する。



図1 本学学生の作品（一部）



図2 文京アカデミア講座受講生の作品



図3 中学・高等学校生徒の招待作品

1. 第6回「文の京書道展」の開催概要

本展は、本学学生の書道作品発表の場であると同時に、文京区を中心とした地域住民に向けて書文化の魅力を発信することを目的として開催した。会場は跡見学園女子大学文京キャンパス2号館1階ホール前とし、2025年11月10日（月）から11月21日（金）までの約2週間にわたり展示を行った。

出品作品は、本学学生（図1）、文京アカデミア講座受講生（図2）、中学・高等学校の招待作品（図3）、本



図4 本学書道科教員の作品



図5 作品の陳列作業を行う様子



図6 本書道展 ポスター・はがき

学書道科教員による作品(図4)など、計47点にのぼり、多様な書表現が一堂に会する展示となった。作品の搬入・陳列および撤去にあたっては、地域交流センター職員の方々をはじめ、多くの関係者の協力を得て、円滑に作業を進めることができた(図5)。

広報については、大学ホームページやSNSでの情報発信に加え、文京区役所、書道用品店、中学・高等学校等へのポスター・はがき配布を行い、地域に開かれた展覧会としての周知に努めた(図6)。

2. 展示会場構成と企画の特色

展示会場では、作品展示に加えて、本展の趣旨を簡潔に伝えるための挨拶文(図7)を掲示した。挨拶文では、「文の京書道展」が、本学学生をはじめ、書道教育に関わる中学・高等学校、文京区アカデミア講座受講生、そして本学書道科教員による作品を一堂に展示する場であることを示し、世代や立場を超えて書を通じた交流が生まれることへの期待を述べた。また、「文の京」という名称に、^{ふみ} ^{みやこ} 学問と文化の薫り高いこの地・文京から、文字文化の魅力と新たな書表現を発信したいという思いが込められていることにも触れている。



図7 本書道展 挨拶文



図8 会場の一角に設けた「書道体験コーナー」



図9 10メートルの巻子に好きな文字や言葉を書く参観者



図10 「書道体験コーナー」に集う本学学生



図11 家族連れで賑わう「書道体験コーナー」



図12 会場で放映した「跡見学園女子大学の書道」の一部

こうした趣旨を踏まえ、会場構成においては、学生作品から教員作品までを一体的に配置し、学びの積み重ねや書に向き合う姿勢が自然に伝わるよう工夫した。出品者それぞれの「今」が反映された作品が並ぶことで、鑑賞者が書の多様性や奥行きを感じ取れる展示空間となった。

さらに今回は、書道の楽しさや面白さをより身近に感じていただくことを目的に、会場の一角に「書道体験コーナー（図8）」を新たに設けた。筆者がこれまで収集してきた筆・墨・硯・紙といった文房四宝を自由に手に取り体験する機会を提供したほか、全長約10メートルの巻子を用意し、来場者が自分の好きな文字や言葉を書き加えていける参加型企画も実施した（図9）。

会期中は、本学学生だけでなく、近隣の住民や家族連れの来場者が多く、体験コーナーには連日多くの人が集まり、会場は終始にぎわいを見せていた（図10, 11）。楽しそうに文房四宝に触れる来場者の姿からは、書が世代や経験を越えて人と人をつなぐ力を持つことがうかがえた。

あわせて、地域交流センター職員の協力により制作した「跡見学園女子大学の書道」を紹介する映像も会場内で上映した（図12）。本学における書道教育の特徴や成果を伝える内容で、多くの来場者が足

を止め、熱心に視聴する様子が見られた。この映像展示は、作品鑑賞を補完する役割を果たすとともに、本学の教育活動を地域に開かれた形で発信する試みとして、意義ある取り組みとなった。

3. 出品者および作品について

本展には、跡見学園女子大学の書道実習受講者および有志学生、文京アカデミア講座受講生、中学・高等学校の招待出品者、本学書道科教員が参加した。本学学生の作品は、臨書を中心に、古典に真摯に向き合う姿勢がうかがえるものが多く、学年ごとの修練の積み重ねや成長の様子を読み取ることができた。

文京アカデミア講座受講生の作品は、楷書をテーマに制作したもので、全員が同一の古典に取り組みながらも、それぞれの個性が反映された力作が並んだ。また、合作作品の展示は、鑑賞者にとっても印象深いものとなり、講座の学びの成果を視覚的に伝える役割を果たしていた(図13)。

中学・高等学校からの招待作品は、いずれも完成度が高く、若い世代の書に対する真摯な姿勢と表現力の豊かさが際立っていた。本学教員による賛助出品は、学生や一般来場者にとって、書の多様な表現の在り方を示す一つの指針となったと考えている。

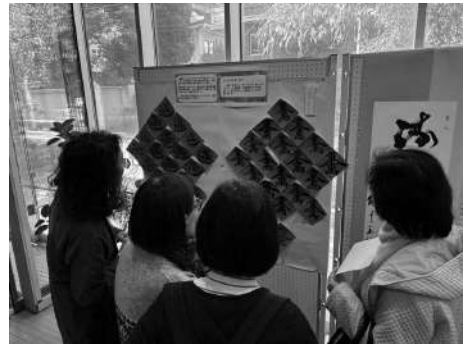


図13 合作作品を鑑賞する文京アカデミア講座受講生

4. 展示を終えて

今回初めて「文の京書道展」の企画・運営を主担当として行い、準備や調整に苦労する場面も少なくなかったが、それ以上に多くの学びと手応えを得る機会となった。作品展示に加え、「書道体験コーナー」や映像展示といった試みを取り入れたことで、来場者が作品を「鑑賞する」だけでなく、「関わり、参加する」場をつくることができた点は、本展の大きな成果であったと考えている。

会場にはQRコードによるアンケートも設置し、幅広い世代の来場者から多くの感想が寄せられた。作品一つひとつに熱心に向き合う姿が多く見られ、寄せられた言葉からは、書が世代や立場を越えて人の心に届く表現であることを改めて実感した。これらの感想は、可能な限り出品者本人にも共有し、今後の制作や学びへの励みとして活用してもらった。

今回の経験を通じて強く感じたのは、本学が地域との交流の拠点として果たしうる可能性の大きさである。書道展という枠組みを通して、学生、地域住民、学校関係者が自然に集い、同じ空間と時間を共有する姿は、大学が地域に開かれた文化的な場として機能していることを示すものであった。

今後は、書道にとどまらず、さまざまな分野が参画し、それぞれの専門性や関心を持ち寄ることで、学校と地域がともに学び、育ち合う場として、こうした取り組みがさらに発展していくことを期待して

いる。「文の京書道展」もまた、特定の分野に閉じた催しではなく、多くの人に関わり合い、共につくり上げていく文化的なプラットフォームとして成長していきたいと考えている。次年度に向けては、今回得られた成果と課題を踏まえつつ、より多様な視点と協働を取り込みながら、地域に根差した魅力ある企画を継続していきたい。

最後に、本展の開催にあたり多大なご支援を賜った関係機関の皆様、心より御礼申し上げる。とりわけ、継続的にご支援くださっている文京区役所、作品をご出品いただいた中学・高等学校の関係者の皆様、広報活動にご協力くださったキョー和新宿本店、光雲堂、ひまわり画材の皆様、そして準備・運営を支えてくださった地域交流センター職員の皆様に、改めて深く感謝申し上げたい。

資料 出品者および作品一覧(敬称略)

※本展に出品された出品者・作品の一覧を、以下に資料として掲載する。

〈跡見学園女子大学有志の作品〉

- | | | |
|--------------|--------|--------------------|
| ①文学部 四年 | 新井 すぐり | 【臨書】虞世南 孔子廟堂碑 |
| ②マネジメント学部 四年 | 小國 美奈希 | 【臨書】嵯峨天皇 光定戒牒 |
| ③文学部 四年 | 工藤 亜弥 | 【臨書】曹全碑 |
| ④文学部 四年 | 斉藤 舞 | 【臨書】曹全碑 |
| ⑤文学部 四年 | 前田 友紀恵 | 【臨書】馬圈湾出土木牘 |
| ⑥文学部 四年 | 村元 未来 | 【創作】故郷 |
| ⑦文学部 三年 | 小笠原 桜 | 【臨書】曹全碑 |
| ⑧文学部 三年 | 関口 莉乃 | 【臨書】米芾 苕溪詩卷 |
| ⑨文学部 三年 | 蒔田 理陽 | 【臨書】曹全碑 |
| ⑩マネジメント学部 三年 | 中島 小百合 | 【臨書】呉讓之 篆書崔子玉座右銘四屏 |
| ⑪文学部 二年 | 土田 芽依 | 【双鉤填墨】王羲之 妹至帖・行穰帖 |
| ⑫文学部 二年 | 森崎 歩実 | 【双鉤填墨】王羲之 行穰帖 |
| ⑬文学部 一年 | 関 唯香 | 【臨書】孫過庭 書譜 |
| ⑭文学部 一年 | 田中 美優 | 【臨書】甲骨文 |
| ⑮文学部 一年 | 新妻 彩音 | 【臨書】甲骨文 |
| ⑯文学部 一年 | 吉野 美初 | 【臨書】孫過庭 書譜 |

〈アカデミア講座生作品〉

秋山 尋美、安間 一雄、生田 教夫、沖田 章喜、小塩 美智、織田 昌子、絹笠 敬子、桑原 一瑛、小松 いづみ、境野 美恵子、渋谷 千恵、住野 智恵子、中澤 藤江、中島 美恵子、夏目 温子、堀 弘子、森野 京子、山崎 幸枝、吉田 光子 (19名)

今年度のアカデミア講座は、2025年10月3日から11月14日まで全7回(毎週金曜13:30~15:30)の日程で「筆墨の余韻 一古典に学ぶ楷書の美一」と題して実施した。

講座では、唐代・欧陽詢「九成宮醴泉銘」および北魏「牛欄造像記」を教材として取り上げ、古典の臨書学習とそれを踏まえた作品制作を行った。

また、関連する実践として、「春聯(中華圏旧正月飾り)」および「春・夏・秋・冬」を題材とした合作作品の制作にも取り組み、完成作品は出品・展示を行った。

〈中学・高等学校の招待作品〉

- | | | |
|------------------|-------|----------------------|
| ①跡見学園中学校 三年 | 鈴木 悠文 | 【臨書】王羲之 喪乱帖 |
| ②跡見学園高等学校 三年 | 清水 美輝 | 【創作】跡見流 |
| ③埼玉県立川越南高等学校 三年 | 島本 心寧 | 【創作】ジョルジュ・クレマンソーのことば |
| ④星野高等学校 三年 | 瀬田 綾乃 | 【臨書】王羲之 孝女曹娥碑 |
| ⑤埼玉県立松山女子高等学校 三年 | 西村 若菜 | 【臨書】王羲之 集王聖教序 |
| ⑥千葉県立柏の葉高等学校 三年 | 池端 希依 | 【臨書】魏靈蔵造像記 |

〈本学書道科教員賛助出品〉

- | | | |
|---------|------------|----------------------|
| ①本学兼任講師 | 斎藤 まゆみ(紫香) | 【創作】良寛の歌 |
| ② 同 | 津田 好一(貞巖) | 【創作】素風 |
| ③ 同 | 伊藤 亜美(亜穹) | 【創作】劉嗣綰 雑詩其一 |
| ④本学准教授 | 香取 潤哉(玉龍) | 【創作】『従容録』流れに随って妙を得たり |

銭湯からつなげる地域の輪

石田結菜

1. はじめに

「行こうよ!文京浴場♾ ~学生プロジェクト~」は2022年8月1日から始まった。このプロジェクトは、「レトロの良さを現代に活かす」をテーマに掲げ、跡見学園女子大学と拓殖大学の学生が共同で文京浴場組合を盛り上げる目的で活動している。主な活動内容は、「SNSでの発信」と「イベントによる地域交流」の2つである。SNSについてはXとInstagramを活用し、イベント告知や活動参加報告などを投稿している。また、イベントではプロジェクト主体で企画したものや地域のイベントに参加するなど、幅広い取り組みを展開している。

本稿では、今年度の活動について報告し、次年度の活動について検討する。

2. 今年度の活動

「SNSの発信」について、イベントの案内や活動レポート、銭湯の営業・定休日の広報を行っている。主に今年度のInstagram運用において、他大学の学生団体との繋がり作りになったりイベント参加の勧誘をいただいたりと、広報にとどまらず活動拡大の一端も担った。

「イベントによる地域交流」では、前年度より開催・参加していたイベントの継続に加え新企画「番台体験」を行った。

2025年3月には営業開始前の銭湯・大黒湯をお借りし、第3回目となる「縁日」を開催した(写真1)。銭湯にイベント開催時だけでなく入浴目的でも来場していただくきっかけを作りたいという思いから、イベントで塗り絵を配布し後日完成品を大黒湯に持っていくことで特典と引き換える仕組みとした。来場者の方からは、「大黒湯の近くに住んでいたが実際に足を運んだのは初めて」「男湯と女湯両方の暖簾をくぐる体験が新鮮だった」など好意的な感想をいただいた。開店前の銭湯という貴重な場を活かし、銭湯の空間そのものを楽しんでいただくことができた。

8月には大黒湯にてプロジェクトメンバーが日替わりで番台に立ち、掃除のお手伝いなどを行う「番台体験」を行った。これまでの企画は小学生以下の子供向けのイベントが多かったことから、番台体験では大人の方とも交流を図ることを目的とした。お客様のお話を伺う中で、銭湯が単なる入浴の場にとどまらず、地域のつながりを育む大切な場所であることを改めて実感した。

10月には拓殖大学で行われた「オレンジフェスタ」に参加した。床に置いた桶にボールを投げ込みビ



写真1

ンゴを狙うゲーム「桶入れビンゴ」や射的といった体を動かすブースと、バスボール作りを行うブースに分かれて運営を行った。前年度にバスボール作りが混雑した反省を踏まえ、今回は申し込み制としたことで混乱なく行うことができた(写真2)。また大学の教室を使用するにあたり銭湯らしさをどのように表現するかが課題となったが、桶を使用するゲームの企画や装飾のために銭湯の備品をお借りするなど工夫を凝らした。学生の発想力と関係者の協力により、銭湯らしさのある空間を作ることができた。



写真2

2025年11月には、第4回目の「縁日」を開催した。開催回数が増えてきたことから、定番となった「銭湯おみくじ」のリニューアルや新ゲームの「フィッシング」(写真3)の導入など以前来場していただいた方にも楽しんでいただけるように工夫を凝らした。来場者数は300名へと第3回開催時より増加したが、ゲームの待機列が長時間発生しスムーズなご案内ができなかったことが反省点として残った。



写真3

上記のイベント開催のほか、2025年5月に神田祭で行われた「銭湯山車」の巡行にメンバー2名と拓殖大学OB1名が参加させていただいた。(写真4) 昨年度、本プロジェクトメンバーが参加させていただいた、「銭湯山車巡行」銭湯山車は、文京建築会ユースが文京区内で廃業してしまった銭湯の物品・資材を再利用して制作したもので、文京の歴史文化や銭湯の魅力が詰まった山車で神田祭参加2回目という貴重な時に参加させていただいた。祭りの1つである付け(つけ)祭りに参加し、相馬野馬追や東京藝術大学も参加する中、最後尾を練り歩かせていただき、銭湯の魅力を多くの観客に伝えられたと感じた。



写真4

3. 来年度にむけて

縁日やオレンジフェスタなどの恒例となりつつあるイベントを行い続けてきたが、昨年やり残してしまった、銭湯ジャズバーや文京浴場組合に所属している4か所の銭湯と組合に所属していない、きみの湯に訪問インタビューを実施し、昨年度まで行ってきたことを継続しつつ、新しいイベントの企画にチャレンジしてみたいと考えている。

跡見「学芸員」in菊坂 活動報告

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(6)

栗生はるか・新井美鈴・池亀柚衣・今井舞・大迫陽毬・黒木真悠・佐藤葵・鈴木未來・鈴木みづき・杉山恭子・玉野空・土田芽依・豊永陽彩・内藤日香理

1. はじめに

2020年11月より継続している菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)の所蔵資料調査は、今年度で6年目を迎えた。本活動は、歴史的建造物である旧伊勢屋質店に遺された膨大な民具や文書類を、学内の有志学生と教員で構成する跡見「学芸員」in菊坂として活動するメンバーによって整理・記録し、地域の歴史的資源としての価値を明確にすることを目的としている。

2. 調査の概要

今年度の調査は、跡見「学芸員」in菊坂として活動するメンバーのうち14名(教員1名、院生1名、4年生1名、3年生4名、2年生4名、1年生3名)で菊坂跡見塾所蔵資料調査を実施した。所属大学や学部学科、学年については表1の通りである。

今回報告するのは、2025年4月1日から2025年12月31日の期間に実施した調査の成果である。

これまで、旧伊勢屋質店の「座敷」(2020年度・2021年度・2022年度実施、『ゆかり』2・3・4号に掲載)、「茶の間」(2021年度・2022年度実施、『ゆかり』3・4号に掲載)、「台所」(2022年度・2023年度・2024年度実施、『ゆかり』4・5・6号に掲載)における所蔵資料の調査を行ってきた(図1)。今年度は、調査が完了していない「台所」と「土蔵」に保管されていた生活用品や質屋に関わる道具の調査を行った。

調査時は、調査対象とする生活用具の資料に番号を付したタグを取り付け、それぞれの資料について「菊坂跡見塾資料調査情報カード」を記入(図2)、資料をデジタルカメラで撮影し、EXCELにてデータ入力を行った。

表1 調査に参加したメンバー

栗生はるか(跡見学園女子大学観光コミュニティ学部 観光デザイン学科助教/地域交流センター助教)	大迫陽毬(同 2年)
黒木真悠(同 大学院1年)	佐藤葵(同 2年)
内藤日香理(同 4年)	鈴木未來(同 2年)
新井美鈴(同 3年)	土田芽依(同 2年)
今井舞(同 3年)	池亀柚衣(同 1年)
鈴木みづき(同 3年)	杉山恭子(同 1年)
玉野空(神奈川大学3年)	豊永陽彩(同 1年)



写真1 調査の様子



写真2 調査の様子

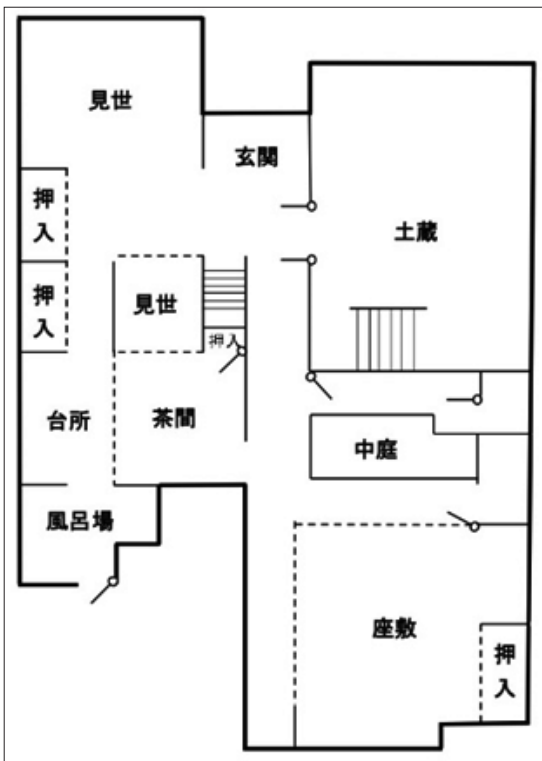


図1 菊坂跡見塾1階の見取り図

菊坂跡見塾資料調査情報カード 記入日：2020年 月 日

資料番号			
よりがな			点数
名称			
法量	縦	横	高 径(φ) cm
材質	植物	紙 木 () 竹 他 ()	
	土石	土 () 石 () セメント ガラス 陶磁 磁器	
	金属	鉄 銅 鋳 錫 青銅 真鍮 アルミニウム ジュラルミン	
		ステンレス 鋼合金 他 ()	
	合成樹脂	プラスチック セルロイド ゴム ビニール ナイロン 他 ()	
その他			
時代	作成・使用	年代	
項目分類	形態分類		
取蔵場所			
作者			
備考			
記入担当			

写真撮影 カード確認 データ入力 再調査(要・不)

図2 菊坂跡見塾資料調査情報カード

3. 調査結果

2025年度の調査では、17点の資料を調査することができた。詳細は表2に記載した通りである。今回は、台所と土蔵を調査したため、塵取りや急須(南部鉄器)生活用具、風呂敷といった質屋ならではの用具を確認することができた(※当初報告予定であった一部の資料については、所在確認の結果、今回の報告対象からは除外している)。

表2 2025年度に作成した調査資料目録

資料番号	名称	ふりがな	点数	法量	材質	備考	写真
201	衝立	ついたて	1	縦91.3× 横135× 高91.3cm	木、 竹、 鉄		
202	両脚膳	りょうあし ぜん	1	縦47.4× 横47.6× 高20.9cm	木		
203	箱炭斗	はこすみと り	1	縦15.9× 横15.9× 高26.1cm	木、 金属		
204	塵取り	ちりとり	1	縦42.8× 横28.4× 高42.8cm	鉄	「共柄チリトリ」との記載あり	
205	火消壺	ひけしつぼ	1	高17× 径21cm	青銅	蓋の柄 火消宝 打ち出の小槌	
206	角火鉢	かくひばち	1	縦28.5× 横28.5× 高23.8cm	木、 鉄、 灰	中に灰が入っている。上段、五徳が 中にある。	
207	角火鉢	かくひばち	1	縦27.5× 横27.5× 高18.5cm	木		
208	角火鉢	かくひばち	1	縦28.5× 横29× 高19cm	木、 灰		
209	塵取り	ちりとり	1	縦47.3× 横28.4× 高3.3cm	ステンレス		
210	塵取り	ちりとり	1	縦28.1× 横27.5× 高8cm	ステンレス		
212	火消壺	ひけしつぼ	1	横26× 高20× 径26cm	石	中に灰あり。中に不明物(かけら?) あり	
213	急須 (南部鉄器)	きゅうす (なんぶ てつき)	1	横20× 高20.5cm	鉄	中身なし	

214	やかん	やかん	1	横23× 高26.5cm	ステンレス	持ち手の部分に「改良」「登録商標？ 大政」の文字あり。 中身なし	
215	急須	きゅうす	1	高26.5× 径12cm	鉄		
216	灰吹き	はいふき	1	縦10.3× 高21× 径10.5cm	銅		
217-1	風呂敷	ふるしき	5	縦81.5× 横82cm	紙	古い質札と台帳で再利用した風呂敷 「三浦」「伊勢屋」と記載あり	
217-2	風呂敷	ふるしき	5	縦85× 横84cm	紙	佐乃や質店の表記有	

4. 今後の活動に向けて

以上、今年度を実施した菊坂跡見塾所蔵資料調査について報告した。今年度は、昨年度に比べて本調査を多く実施することができた。菊坂跡見塾に残る資料の実態を明らかにすることは、博物館としての菊坂跡見塾の充実化のためにも、地域の歴史発掘のためにも、重要な活動である。今後も調査を継続し、確認された資料の適切な保存、そして資料の分析やその成果発表、一般公開など多角的に跡見「学芸員」in 菊坂の活動を継続していきたい。

参考文献

- ・新垣夢乃・大櫛優理・菊地春姫・末吉はづき・服部胡桃・松尾映里奈・松延咲季・森本千桜・渡邊菜月、2021、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」『ゆかり』2、P.59-70.
- ・磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優理・菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・服部胡桃・松延咲季・黛沙也加・水村美穂・森本千桜・山岡沙織・若曾根南美・渡辺恵未・渡邊菜月、2022、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(2)」『ゆかり』3、P.74-83.
- ・秋谷香菜子・新垣夢乃・井田百香・磯田みずき・鬼塚未奈・黒木真悠・小嶋美優・小山凧咲・中井結子・黛沙也加・水村美穂・山岡沙織・山上真由子・渡辺恵未・渡邊菜月、2023、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(3)」『ゆかり』4、P.119-126.
- ・川副早央里・山上真由子・新垣夢乃・磯田みずき・大屋恵実子・黒木真悠・小玉采奈・鈴木みづき・関鈴菜・中川大資・長根旭美・弘真生・渡邊菜月、2024、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(4)」『ゆかり』5、P.103-108.
- ・川副早央里・新井美鈴・大迫陽毬・黒木真悠・小玉采奈・小山凧咲・佐藤葵・鈴木未来・鈴木みづき・津島誇乃佳・土田芽依・弘真生・増田えみり・松井優花、2025、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(5)」『ゆかり』6、P.93-96

旧伊勢屋質店地域交流イベント 「一葉忌に合わせた旧伊勢屋質店ガイド」

栗生はるか・新井美鈴・池亀柚衣・今井舞・大迫陽毬・佐藤葵・鈴木未来・
鈴木みづき・杉山恭子・土田芽依・豊永陽彩・内藤日香理

1. はじめに

2025年11月23日、樋口一葉の命日（一葉忌）に合わせ、旧伊勢屋質店の公開と学生ガイドによるイベントを実施した。当日は地域住民や一葉ファンのみならず、文京区との協定締結10周年を記念して来訪された山梨県甲州市のツアー団体約50名を含む、多くの来場者を迎えた。

ガイドでは、一葉の『蓬生日記』に記された伊勢屋との関わりや、土蔵の構造、見世の仕組みについて学生が解説を行った。また、奥座敷では「質屋ごっこ体験」を実施し、歴史的建造物を身近に感じてもらう工夫を凝らした。



イベント概要

タイトル：「一葉忌に合わせた旧伊勢屋質店ガイド」

開催日：2025年11月23日

会場：旧伊勢屋質店（文京区本郷5-9-4）

企画：跡見「学芸員」in 菊坂

主催：跡見学園女子大学地域交流センター

来館者数：

メンバー一覧：

栗生はるか（観光コミュニティ学部観光デザイン学科助教／跡見学園女子大学地域交流センター助教）

内藤日香理（跡見学園女子大学文学部人文学科4年）

今井舞（跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科3年）

新井美鈴（同文学部人文学科3年）

鈴木みづき（同文学部人文学科3年）

大迫陽毬（同文学部人文学科2年）

佐藤葵（同文学部人文学科2年）

鈴木未来（同文学部人文学科2年）

土田芽依（同文学部人文学科2年）

池亀柚衣（同文学部人文学科1年）

杉山恭子（同文学部人文学科1年）

豊永陽彩（同文学部人文学科1年）

2. ガイド運営の体制

跡見「学芸員」in菊坂のメンバーが主体となり、以下の役割分担で運営を行った。

解説担当：以下の各スポットにガイドを配置し、来館者のペースに合わせた解説を提供した。

見世	質店の接客・営業の場としての機能を説明
茶の間	家族の多目的な生活空間であることを解説
廊下(目塗土)	床下に収納されている「目塗土」を取り上げ、火災時の具体的な防護手法を説明
奥座敷	増築の歴史や接客用としての役割を解説
二階 (階段・女中部屋・和室)	女中部屋の質素な造りや、和室の出窓のデザイン、さらには押し入れの襖裏に「質札」が再利用されている実態など、質店ならではの工夫を説明
土蔵	足立区からの大規模な移築工事の歴史、三重の扉や土壁による防火・防犯機能の解説
樋口一葉伊勢屋の関係	日記に記された「伊せ屋がもとははしる」という記述を引用し、一葉にとって伊勢屋がいかに生活の拠点であったかを解説。度重なる移住の背景や、父の死後に家主として家族を支えた一葉の苦境を年譜や日記パネルを用いて説明。

3. 質屋ごっこ体験

「質屋」という商売の仕組みを通して、「お金のやりとり」「ものの価値」を学び、旧伊勢屋質店という歴史的建造物の機能に親しみを持ってもらうことを目的として実施した。

3-1. 体験の流れ

①あいさつ・説明

- ・参加者に店主役であることを伝える
- ・質屋の仕組みを簡単に説明：ものを預けてお金を借りる／お金を返せばものが戻る／返せなければものは質屋のものになる

②お客が来る

- ・学生スタッフがお客役で品物を預ける
- ・参加者は品物を観察し、料金目安表を見て貸す金額を決める

③査定・記録

1. 決めた金額をおもちゃのお金で渡す
2. 台帳に記録
3. スタンプやシールで記録完了

④返済・受戻／流質

- ・お客が返済に来る場合：お金を受け取り、品物を返す
- ・返済できない場合：「流質」と伝え、品物は質屋のものになる
- ・事前準備：店主はお客が返済できるようおもちゃのお金を用意



写真1 当日の様子



写真2 当日の様子

4. おわりに

当日は多くの来館者を迎え、旧伊勢屋質店という歴史的建造物そのものへの関心だけでなく、樋口一葉がいかにか多くの人々に親しまれているかを再確認する機会となった。一葉の日記に記されたエピソードに熱心に耳を傾ける来館者の姿からは、文化財が「過去の遺物」ではなく、一葉を感じさせる「生きた拠点」として捉えられていることが伺えた。

このような地域交流活動は、地域の歴史的価値を次世代へ継承していくための重要な足掛かりとなる。今回の経験を糧に、今後は旧伊勢屋質店をより分かりやすく公開する手法を検討し、博物館としての菊坂跡見塾のさらなる充実を目指していきたい。

【学生の感想】

- ・たくさんの人に来て頂いて、樋口一葉がとても愛されていることが理解できました。
- ・今回のガイドツアーを通して、旧伊勢屋質店について調べていく中で改めて学ぶことが多かったです。当日は、多くの人にご来場いただき旧伊勢屋質店の関心の高さを肌で感じました。また、旧伊勢屋質店や菊坂を古くから知っている人から当時のお話を伺うこともでき、大変貴重な機会となりました。
- ・樋口一葉ゆかりの地として、当日は通常より多くの方にご来場いただけた。伊勢屋ツアーでは我々菊坂跡見塾メンバーが伊勢屋について紹介を行ったが、来場者と話す中で一葉や伊勢屋に関する新たな発見も多くあった。一日のみの開催だったが我々にとっても良い経験になったと感じる。

旧伊勢屋質店特別企画展 「調べ、扱い、遺す 一現代の私たちと旧伊勢屋質店—」 開催の記録

土居洋平・長谷川裕子・鈴木みづき・新井美鈴・大迫陽毬・佐藤葵・鈴木未来・
土田芽依・池亀袖衣・杉山恭子・豊永陽彩・小玉采奈・津島誇乃佳・黒木真悠

1. はじめに

本大学が所有する旧伊勢屋質店は、1860(万延元年)年に創業し、1982(昭和57)年まで約120年にわたり文京区本郷菊坂で営業していた質屋である。この建物は、2015(平成27)年に本学所有になってから「菊坂跡見塾」と名を変え、学生有志団体の跡見「学芸員」in 菊坂が活動拠点とし、さまざまな活動を行っている。

今年度、跡見「学芸員」in 菊坂では、2026年2月21日から26日にかけて、「調べ、扱い、遺す一現代の私たちと旧伊勢屋質店—」を開催した。本展は、私たちが日頃取り組んでいる「菊坂跡見塾所蔵資料調査」の成果を広く公開し、文化財の「保存」と「活用」の在り方を来場者と共に考える試みである。

展示では、伊勢屋質店が歩んだ約120年の歴史を軸に、収蔵品の展示や学生による調査の様子を紹介するものであり、これに加えて来場者が実際に資料の計測などを体験できる「民具調査体験」ワークショップを開催した。

今年度の参加メンバーは13名であり、企画、展示パネルの作成、ワークショップの準備、広報、会場設営、企画展開催中の運営や解説を行った。本稿では、この企画展の準備から開催に至るまでの経緯と開催時の様子について報告する。

企画展概要

タイトル：「調べ、扱い、遺す一現代の私たちと旧伊勢屋質店—」

会 期：2025年2月21日～2月26日

会 場：旧伊勢屋質店(文京区本郷5-9-4)

企 画：跡見「学芸員」in 菊坂

主 催：跡見学園女子大学地域交流センター

協 力：淑徳大学

来館者数：

メンバー一覧：

土居洋平	(跡見学園女子大学観光コミュニティ学部教授/地域交流センター長)		
長谷川裕子	(跡見学園女子大学文学部人文学科教授)		
黒木真悠	(同大学院人文科学研究科日本文化専攻1年)		
小玉采奈	(同文学部人文学科4年)	津島誇乃佳	(同文学部人文学科4年)
新井美鈴	(同文学部人文学科3年)	鈴木みづき	(同文学部人文学科3年)
大迫陽毬	(同文学部人文学科2年)	佐藤 葵	(同文学部人文学科2年)
鈴木未来	(同文学部人文学科2年)	土田芽依	(同文学部人文学科2年)
池亀袖衣	(同文学部人文学科1年)	杉山恭子	(同文学部人文学科1年)
豊永陽彩	(同文学部人文学科1年)		

2. 企画展の開催に至るまで

跡見「学芸員」in菊坂では、2020年11月より旧伊勢屋質店に遺された資料を整理する「民具調査」を継続してきた。これまでの調査で、質屋の営業実態だけでなく、当時の人々の暮らしを物語る多様な生活用品の存在が明らかになった。これらの成果を単なる記録に留めず、地域資源として公開・活用することで、歴史的建造物への理解を深めていただくことを目指し、本企画展を開催した。

また、開催にあたっては、淑徳大学地域創生学部地域創生学科の内山大介先生より民具の適切な取り扱い方法について直接ご指導いただく機会を得た。専門的な知見に基づくアドバイスは、資料の保護と展示の両立を考える上で大きな示唆を与え、学生が自信を持って資料を扱う際の一助となった。

2-1. 広報活動

より多くの方に活動を知ってもらうため、広報活動にも力を入れた。学生が作成したチラシを近隣施設や大学内に掲示したほか、跡見「学芸員」in菊坂の公式SNS（Instagram、X）を活用し、準備の裏側や展示の見どころを定期的に発信した。デジタルとアナログ両面での広報を通じて、地域住民の方々や文化財に関心を持つ層への効果的なアプローチを試みた。



チラシ表面



チラシ裏面

3. 展示構成と展示物

本展では「パネル展示」と、実際に調査・整理を行った「民具」を組み合わせて展示を構成した。

パネル展示: 伊勢屋質店の概要や展示物の紹介とともに、学生がどのような工程で民具調査(計測、写真撮影、情報カード作成等)を行っているかを解説パネルにて詳しく紹介した。

ごあいさつ

この度は、企画展「調べ、扱い、遺す 一現代の私たちと旧伊勢屋質店」展にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本展示では、旧伊勢屋質店をどのように理解し、どのように残していくとしているのかが、そうした問いに向き合うための、現代の私たちの方法と姿勢をお伝えします。

文京区本郷南坂に現存する旧伊勢屋質店は、平成 27(2015)年に学校法人跡見学園が取得し、保存する建物です。平成 28(2016)年 3 月 1 日には、文京区指定有形文化財に指定されました。伊勢屋質店は、万延元(1860)年に創設し、昭和 57(1982)年に廃業した質屋です。南坂に暮らしていた作家、横口一葉が関わっていたことでも知られています。

旧伊勢屋質店は、建物や道具、そして使われてきた帳簿など、さまざまな「過去」が折り重なるように残されています。

一方、現在の旧伊勢屋質店には、米屋の異なる多くの文書や道具類が、十分な調査や記録が行われなまま所蔵されているという実態があります。

南坂前見物は資料を展示し、一般に公開する建物です。その役割を果たすためには所蔵する資料について基礎的な情報を把握し、整理・調査を行うことが不可欠だと考えました。私たちはその第一として、収蔵品を整理する前に資料を撮影し、実際に手に取りながら向き合う作業を遂げました。

旧伊勢屋質店と向き合う一つのあり方として、ご覧いただければ幸いです。

最後になりましたが、企画展の開催にあたり、多大なご協力を頂きました関係者の皆様から感謝申し上げます。

2026 年 2 月 21 日
 跡見「学芸員」in 現展
 執行役員 人の橋 昌典氏 藤本 真由美氏 佐藤 真由美氏
 形山 幸子 藤本 真由美 神木 美穂 上田 真由美 色川 真由美

協力(敬称略)
 跡見学園女子大学地域交流センター

①「ごあいさつ」パネル

伊勢屋質店について

伊勢屋について

旧伊勢屋質店とは、永徳により江戸時代の1806年(7萬元年)に創業し、1927年(昭和2年)に増資するまで約120年間営業していました。

1927年(昭和2年)には権利に増資が協議しましたが、増資中に金銭検査を拒絶するために建物と権利を「建物譲渡」の影響で譲渡し、今は権利のこの譲渡のみ残されています。

明治時代の面影を色濃く留める建物として、2016年に東京都の有形文化財に指定されました。当時、高橋の人々には4世にわたって伊勢屋質店を継承していました。

この伊勢屋には家業の他に、雇用人である御宿、世守(→世が読み読みで書いていました)。

建物の特徴

土蔵は1807年(明治30)美濃屋三郎蔵元より移築、原規模は1874(明治7)年(明治40)に上棟しています。この建物は何度も修繕を繰り返しながら今は四世(高橋信玄)二階(土蔵)、三階(多層)が残されています。

一階公開されていない2階には3つの部屋があり、2部屋は座敷(和室)として、小さな部屋は女中部屋として使用されていました。3世にはその奥にある生活空間が見えないう、外から見えにくい感じの扉が設置されています。

2階には床下から畳を穿ち、火の通気には土間が設置されています。

また、窓に格子が設置されていたり、扉の構造は3重になっており、鉄の扉の内側には窓枠が設置されています。

階下階が動く場所には付いているところも見どころの一つです。

一階的な家業とは違い家業であるため、建物は多用途の使い方を促される存在となっています。



※資料写真
 文京区教育委員会「旧伊勢屋質店 調査報告書」2017年発行

②「伊勢屋質店について」パネル


揚り札と台帳

「揚り札」とは各物に貼られている質屋「お客を替り代わりにお客の預けたもの」を扱わないように質屋に付けた「札」のようなものです。原札を付けておくことで「お客様が替り代わりのお客を返済し、こちらがお客が替り代わりの質物と返却する」という状況で、両りのような質物が戻りあっても札と台帳を見ることでお客様が質物を戻したことがわかります。


下の二つの写真は実際の揚り札と台帳です。

左の揚り札には上から「昭和42年10月1日 五千円 1249 ノボラ」と記載されています。右側の台帳も赤線の各から「1249 〆 (昭和42年 旧月5日 自物) ノボラ (金額) 3100 (円)」と記載されています。この揚り札と台帳の記載事項が一致していることからこの二つは併せて使用していたことがわかります。また、このような揚り札他にも多く残っています。そのなかには、今回の展示で取り上げている「はたき」などの不潔となった揚り札を再利用した事例も発見されました。はたきの文字はほとんど消えていて読取不能ですが、このように「平常な紙を留められて作られたもの」を別の形で残して使うことから物を知ることや考えが深まったことがわかります。

揚り札



台帳




※資料写真
 文京区教育委員会「旧伊勢屋質店 調査報告書」2017年発行

③「揚り札と台帳」パネル

風呂敷


こちらは、土蔵一階に収納されている風呂敷です。折り目や変色や汚れなどによって用途が異なる場合があります。



捨た大田に作るという考えから、使用済みの「質物台帳」を折り目一枚一枚折し、綴り合わせ、質物台帳を紙で包み込んでおく数枚を作りました。

古いものは傷が残り、墨で文字が書かれたものが多く、汚れも残っています。

中井川跡見伊勢屋と伊勢屋(佐竹)の両方が使われており、関係性は明らかになっていません。



※資料写真
 文京区教育委員会「旧伊勢屋質店 調査報告書」2017年発行

④「風呂敷」パネル

展示物：調査対象となった資料の中から、質屋営業の実態を伝える貴重な「質物台帳」などの資料に加え、当時の人々の暮らしを彩った、昭和の娯楽を感じさせる実物資料を展示した。各展示物には学生が作成したキャプションを添え、資料が持つ背景や当時の生活風景を来場者にわかりやすく伝えた。(表3)

表3 展示物一覧

風呂敷	質物台帳	揚り札	質屋看板	はたき	竹尺	福牛	櫃
絹秤	ガラス	こけし	長唄本	歌舞伎の雑誌	釜	指物	櫃の蓋



写真1 当日の様子



写真2 当日の様子

4. ワークショップ「民具調査体験」

ワークショップ「民具調査体験」は2月21日・22日の11時から12時の1時間で実施した。ワークショップの準備も、企画展メンバーが担当した。

旧伊勢屋質店に遺された「民具」を教材とし、一般参加者が実際の調査手法を体験することで、地域の歴史や文化財保存への理解を深めることを目的として実施された。我々跡見「学芸員」in 菊坂が日々行っている「民具調査」のプロセスを公開・共有する試みでもあった。

表4 民具調査体験で使用した民具

羽子板	灰皿	手桶	手桶
洗濯板	竹刀	木刀	盥

4-1. 民具調査体験の概要

参加者は学生のサポートのもと、資料の計測（縦・横・高さ）や材質の確認、状態の記録といった「情報カード」の作成工程を体験した。

4-2. 民具調査体験の流れ

実際の調査手順に基づき、実施した。

- ①**番号付与**：資料一点ごとに番号を記した札を取り付ける。
- ②**資料の選定と観察**：資料の形状や質感を直接手に取って確認する。
- ③**計測と記録**：メジャー等を用いて資料の寸法を測り、材質や特徴、記された文字情報を調査カードに記入する。
- ④**写真撮影**：記録保存のため、資料の全体像や特徴的な部分の撮影を行う。
スケッチ：資料の形状や質感を観察しながら、スケッチする。



写真3 当日の様子



写真4 当日の様子

5. おわりに

本企画展は、数年間にわたり取り組んできた民具調査の成果を、初めて学外へ発信する機会となった。開催にあたり、淑徳大学の先生から直接指導された民具の扱い方や、SNS等を通じた広報活動、そして来場者とのワークショップでの交流は、学芸員課程を学ぶ貴重な経験であった。特に、かつての質屋営業を伝える資料や、昭和の娯楽を象徴する品々を前に、来場者と共に当時の暮らしに思いを馳せた時間は、文化財を「遺す」ことの社会的意義を再確認させてくれた。調査から展示に至るまで、至らぬ点多々あったが、本展が旧伊勢屋質店という歴史的建造物の価値を再発見してもらおう一助となれば幸いだ。開催にあたり多大なる協力を賜った関係各位、そして来場した皆様に、心より感謝したい。本展での経験を糧に、今後も菊坂跡見塾に残る資料に焦点を当て、次世代へと繋ぐ活動を継続していく。

【学生の感想】

- ・今回の企画展は、前回のツアーがメインだった構成から打って変わって、パネルと展示している民具をお客さんが見るというスタイルでした。自分たちで準備したパネルやキャプションをお客さんが真剣に読んでくれて、私たちに質問をしてくださったり褒めていただいたりすると頑張ってたよかったです。また、お客さんの中には私たちよりも旧伊勢屋をよく知っている方々が沢山いて、私たちもお客さんの話を聞いてとても勉強になりました。

- ・今回の企画展は「民具」に注目し、伊勢屋当初にあったものやその後の暮らしに使われていたものなど入り交じっていたがそれら全て旧伊勢屋質店が存在していた証だと考えているので今回皆様に実物を見ていただいて、旧伊勢屋質店をもっと身近に感じてもらえたら嬉しいです。また、今回企画展に参加した我々学生もこれを機に現代から未来へ繋ぐため活動の幅を広げたいと思いました。
- ・企画展の準備を通して、民具の扱い方や、保存するだけでなく活用していくことの重要性を展示で表現する難しさを感じました。民具は一つ一つ用途が異なるため、何をどのように見せれば伝えたい内容が伝わるのかを考える必要があります、展示方法の検討に苦労しましたが、来場者の方々が私たちと違う視点で疑問を持って質問してくださる場面が多々あり、より私たちも民具に対する理解を深めることができました。
私たちの活動を通して皆様に旧伊勢屋質店をより身近に感じて頂ければ幸いです。
- ・展示のテーマがなかなか決まらず、準備期間も短い中での企画となりましたが、多くの方のご協力のおかげで無事に完成させることができました。一概に民具といっても保存や展示方法にさまざまな工夫があることを知り、実際に話を伺えたことは大きな学びでした。また、パネルやキャプション作成を通して菊坂のこれまでの活動の歩みを知る貴重な機会となりました。来年につながる案も生まれ、今後さらに多くの方に活動を届けられればと思います。
- ・今年度はシンポジウムや一葉忌があったことで、企画展の準備は前年度よりもかなり短期間で行われました。民具の選定やパネル作成も企画展直前となり多くのメンバーが不安を抱えながら準備を行っていましたが、協力しながらこれまでとは一味違う展示をすることが出来ました。当日は聞かれたことに対し解説を行っていましたが、来場者は地域の方、建物や歴史に詳しい方が多かったため、お話をする中で私たちも伊勢屋や民具について色々学び理解を深めることができました。
- ・今回の企画展は準備期間が短く不安な気持ちを抱えていましたが、仲間と役割分担を徹底し、企画展前日まで展示構成や解説パネルの制作に打ち込みました。建物の独特な空気感を活かしつつ、民具の魅力を引き出す空間作りは想像以上に困難でしたが、粘り強く取り組んだ結果、来場者の方々から温かい声をいただくことができました。逆境の中でも一つの企画展を作り上げた経験は、大きな自信となりました。
- ・企画展の準備を通じて、現在は使われることが少ない民具の扱い方を展示で表現する難しさを感じました。民具は一つ一つ使い方が異なるため、どのように展示すれば使い方が来場者に伝わりやすいのかを考えることに苦労しました。実際に使っていたという方がこれはこう使っていたとか、こんな使い方をしていたと実体験を話してくださることが多く、こういった活動をしていなければおそらくなかなか聞く機会がなかった話だと思うのでとても貴重な体験だと感じました。民具の用途や建物自体の話など新たに知ったことがたくさんあるのでそういったことをまた次の機会に活かしていきたいと思います。

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉

〈新聞・雑誌等〉

- (1) 「まっぴる超詳細！東京さんぽ地図」
発行：昭文社
- (2) 「Well Life 10月号」
発行：ティートゥリースタジオ
- (3) 「文京区観光ガイドブック」2026年度版
発行：一般社団法人文京区観光協会
- (4) 「まち歩き地図東京さんぽ」2027 ー改訂版ー
発行：朝日新聞出版
- (5) 「歩く地図 東京散歩2027」
発行：成美堂出版
- (6) 読売新聞オンライン「猫学（ニャンコロジー）」街歩き記事「ネコ路地さんぽ」
発行：読売新聞オンライン
- (7) 「ユーキャンのおうち時間シリーズ なぞりがき もっと！日本の名作」
発行：ユーキャン学び出版

2025年度の地域交流関連活動記録

地域交流センター

跡見学園女子大学における「地域交流事業」の運営体制

1. 跡見学園女子大学地域交流センターについて

跡見学園女子大学地域交流センターは、本学に所属する教員や学生が地域交流活動を組織的・積極的に進めるように地域交流活動の支援を行い、そのために必要な環境整備を行うことを目的に、附属教育研究組織として平成31年度より設立されました。（「地域交流センター規程」）

具体的な活動は、下記の通りです。

- ①地域交流活動の企画立案・実施
- ②本学の地域交流活動についての情報収集及び成果の公表
- ③本学の地域交流活動に対する人的支援・財政的補助

（本学の「正課」「正課以外」、本学教員の地域における調査・研究、本学人材の地域への提供等）

- ④地域交流活動への本学施設の開放
- ⑤自治体との包括連携協定の推進と協定締結自治体との連携事業の実施・支援

2. 地域交流センター運営委員会について

地域交流センター運営委員会は、地域交流センターの上記の具体的活動に関する事項を審議することを目的に、委員長たるセンター長と各学部より選出された委員および、若干名の専門委員により組織されています。（「地域交流センター運営委員会規程」）

3. 地域交流センター運営委員会開催一覧

令和7年度運営委員会

- 第1回（令和7年 4月23日〈水〉）15時10分～16時50分〈新座キャンパス 1号館 1130会議室〉
- 第2回（令和7年 5月28日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第3回（令和7年 6月25日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第4回（令和7年 7月23日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第5回（令和7年 9月24日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第6回（令和7年10月22日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第7回（令和7年11月19日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第8回（令和8年 1月21日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉
- 第9回（令和8年 2月25日〈水〉）15時10分～16時50分〈Teams使用〉

令和7年度 連携地域・企業（提携日順）

跡見学園女子大学 自治体等 協定締結先一覧（令和8年1月現在）

※締結順

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
埼玉県新座市	新座市と跡見学園女子大学との連携協力に関する包括協定	H20(2008) 4.10	H22(2010) 4.10	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉の充実に関する事項 ・教育・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全・回復・創出に関する事項 ・防災に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
東京都文京区	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と文京区との相互協力に関する包括協定	H23(2011) 5.17	H26(2014) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
埼玉県新座市・埼玉県新座警察署	新座市における女子学生安全対策協定	H23(2011) 7.29	H25(2013) 7.28	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・女子学生に対する防犯指導 ・安全情報の提供及び情報交換 ・学生防犯リーダーによる啓発活動への支援
福島県会津若松市	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と会津若松市とのパートナーシップ協定	H24(2012) 7.25	H27(2015) 7.24	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果、地域施策の充実及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
東京都文京区	災害時における母子救護所の提供に関する協定	H24(2012) 9.7			<ul style="list-style-type: none"> ・災害時における母子救護所の提供に関する協定
埼玉県和光市	和光市と学校法人跡見学園跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H24(2012) 11.22	H27(2015) 11.21	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉の充実に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全、創造に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
埼玉県新座市	災害時における施設の使用に関する覚書	H25(2013) 1.10締結 H26(2014) 2.13改訂			<ul style="list-style-type: none"> ・災害時におけるグラウンド及び体育館での避難所の開設 ・新座市役所と本学のホットラインの設置 ・物品資材の配置
全国「道の駅」連絡会	「道の駅」就労体験型実習の実施に関する基本協定	H27(2015) 3.10			<ul style="list-style-type: none"> ・「道の駅」就労体験型実習の実施

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
長野県	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と 長野県との相互協力 に関する協定	H27(2015) 6.22	H29(2017) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果及び人材の提供 ・学生の就職支援 ・インターンシップの実施
警視庁大塚警察署	災害及び防犯ボラン ティア等に関する協定	H27(2015) 9.1	H28(2016) 8.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・防災及び防犯等各種広報活動 に対する共同活動 ・発災時に文京区が設置する避 難所等における災害警備活動
秋田県男鹿市	秋田県男鹿市と学校 法人跡見学園 跡見 学園女子大学との連 携協力協定	H27(2015) 12.21	H30(2018) 12.20	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・人材育成に関する事項
山形県西川町	山形県西川町と学校 法人跡見学園 跡見 学園女子大学との連 携協力協定	H27(2015) 12.22	H30(2018) 12.21	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項
群馬県長野原町	学校法人跡見学園女 子大学と長野原町と の相互協力に関する 包括協定	H28(2016) 4.19	H31(2019) 4.18	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・その他前条の目的を達成するた めに甲及び乙が必要であると認 めたこと
埼玉県三郷市	三郷市と学校法人跡 見学園女子大学との 相互協力に関する包 括協定	H29(2017) 3.6	H30(2018) 3.5	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・ス ポーツに関する事項 ・地域環境に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他前条の目的を達成するた めに甲及び乙が必要であると認 める事項
富山県立山町	富山県立山町と学校 法人跡見学園 跡見 学園女子大学との連 携協力協定	H29(2017) 5.22	R2(2020) 5.21	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両 者が協議して必要と認められる 事項
和光市文化振興 公社	公益財団法人和光市 文化振興公社と跡見 学園女子大学との相 互協力協定書	H29(2017) 6.23	R2(2020) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・文化更新に関する事業 ・地域コミュニティの発展に関す る事項 ・地域文化資源に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他、甲と乙が相互に必要と 認める事項

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
静岡県東伊豆町	静岡県東伊豆町と跡見学園女子大学との包括連携協力協定書	R1(2019) 11.19	R4(2022) 11.18	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・研究教育に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両者が協議して必要と認められる事項
株式会社ジャルパック	跡見学園女子大学と株式会社ジャルパックとの連携に関する協定書	R2(2020) 2.4	R3(2021) 2.3	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・教育、研究、文化の発展・向上にかかわる相互支援に関すること ・学生及び教職員と社員の相互交流に関すること ・本学の人材育成・キャリア形成に資する支援に関すること ・学生及び教職員の研究成果・活動をこの業務に活かすこと ・地域社会の発展・活性化に関すること ・その他、相互に連携・協力が必要と認められる事項
公益財団法人角川文化振興財団	跡見学園女子大学と公益財団法人角川文化振興財団との連携に関する協定書	R2(2020) 8.1	R3(2021) 7.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・教育、研究、文化の発展・向上にかかわる相互支援に関すること ・学生及び教職員と社員の相互交流に関すること ・本学の人材育成・キャリア形成に資する支援に関すること ・学生及び教職員の研究成果・活動と角川文化振興財団の文化活動の成果を互いに活かすこと ・地域社会の発展・活性化に関すること ・その他、相互に連携・協力が必要と認められる事項
エーザイ株式会社	コミュニティスペース運営協力に関する協定書	R2(2020) 9.24	R3(2021) 9.23	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・千石3丁目居場所作りプロジェクト実行委員会の準備・運営するコミュニティスペース（所在：文京区千石三丁目三番七号）への協力（知的資源の提供・人材の派遣等） ・前項のコミュニティスペースと類似の目的で準備・運営されるコミュニティスペースへの協力（知的資源の提供・人材の派遣等） ・前1項及び2項の目的達成のための相互交流、研究成果・知識の交換 ・その他地域社会の発展・活性化に関する取組み

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
岩手県盛岡市	盛岡市と跡見学園女子大学との連携・協力に関する包括協定	R2(2020) 3.24	R7(2025) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・産業及び文化の振興に関すること ・交流人口の拡大に関すること ・人材育成及び学術振興に関すること ・地域課題の解決に関すること
埼玉県富士見市	富士見市と跡見学園女子大学との包括連携に関する協定	R5(2023) 4.6	R8(2026) 4.5		<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育、生涯学習、文化・スポーツに関する事項 ・社会福祉に関する事項 ・商業及び観光の振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・国際交流に関する事項 ・地域の環境に関する事項 ・学術研究及び人材育成の振興に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両者が協議して必要と認められる事項

令和7年度 文京区受託事業

事業名	令和7年度 文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』
主催	文京区 主管・運営：跡見学園女子大学
日時	令和7(2025)年11月2日(日) 本選13時～16時
場所	跡見学園女子大学 ブロッサムホール(文京区大塚)

文京区ふみ みやこの文の京ゆかりの文化人顕彰事業のひとつで、今年度で14回目となるコンテストである。文京区と連携をして朗読者に発表の場を提供するとともに、区民の文化活動の一層の促進、特に青少年部門においては朗読への関心を醸成することを目的としている。文京区が主催し、本学が主管して平成24年度から開催されているものである。

課題作家と作品

熊本県・熊本市・新宿区にゆかりのある作家の6作品
(「文化と歴史を縁(えにし)とする包括連携」締結5周年)
小泉八雲「むじな」「雪おんな」
徳富蘆花「不如帰」
夏目漱石「夢十夜」「ころも」「坊っちゃん」

1. 事前録音審査応募総数

298名(一般165名、青少年133名)
※事前録音審査 298名(一般165名、青少年133名)
※審査対象外 0名
※本選出場者数 青少年の部 7名 ※内1名は体調不良により欠席
一般の部 8名

2. 録音審査応募期間

8月19日(火)から8月22日(金)

3. 録音審査

9月3日(水)～5日(金)
NHK財団ことばコミュニケーションセンター

4. 本選観覧者

応募数(含：当日申込)：121名
来場者数：84名

5. 審査結果

賞	青少年の部入賞者一覧		一般の部入賞者一覧	
	氏名	朗読作品	氏名	朗読作品
最優秀賞	柳田恵璃果	夢十夜	佐々木照代	夢十夜
優秀賞	宗像七海	むじな	村上征夫	夢十夜
優秀賞	水澤美咲	雪おんな	柳原和美	こころ

※青少年の部は23歳以下の方

6. 審査員

氏名	肩書
高橋 淳之 氏	NHK財団ことばコミュニケーションセンター専門委員
吉田 太一 氏	文京区教育委員会教育推進部教育指導課 指導主事
渡部 英美 氏	跡見学園女子大学教授、元NHKアナウンサー



本選出場者（青少年の部）



本選出場者（一般の部）

事業名 旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)一般公開事業

主催 文京区

受託 跡見学園女子大学

令和7年4月から令和8年3月まで、旧伊勢屋質店一般公開を行った。

令和7年度一般公開日

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

月合計5日

				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

月合計7日

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

月合計6日

		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

月合計4日

					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

月合計3日

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

月合計5日

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

月合計6日

						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

月合計6日

	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

月合計4日

				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

月合計3日

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28

月合計9日

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

月合計1日

 開館日

年合計59日

●令和7年度 旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)一般公開について

年間来館者数 1356人(令和8年3月9日現在)

令和7年度 文京アカデミー受託事業

事業名	文京アカデミア講座
主催	公益財団法人文京アカデミー
受託	跡見学園女子大学

文京区内在住・在勤・在学者（15歳以上、中学生除く）を対象として、本学の教員が講座講師を務めた。

1. 文京アカデミア講座前期

- (1) 講師：文学部 アダム・クリストファー准教授
- (2) タイトル：海外旅行で使える英語
- (3) 日程：全8回（5月9日（金）～7月11日（金）10：30～12：00）
- (4) 受講者：20名
- (5) 会場：本学文京キャンパス

2. 文京アカデミア講座後期

- (1) 講師：文学部 香取潤哉准教授
- (2) タイトル：筆墨の余韻 ―古典に学ぶ楷書の美―
- (3) 日程：全7回（10月3日（金）～11月14日（金）10：30～12：00）
- (4) 受講者：20名
- (5) 会場：本学文京キャンパス
- (6) その他：第6回 文の京書道展ふみみやこに受講生の書作品を展示、講師による講評を行った。
（主催：跡見学園女子大学）
会場：跡見学園女子大学文京キャンパス2号館1階ホール前
日程：11月10日（月）13：00開場～11月21日（金）12：00終了

以上

令和7年度 地域交流・企業連携活動（地域・実施日順）

文京区等

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
区内大学学生支援担当者会議	地域交流センター	①② 2か月に1回 ／通年 ③ 2026 (R8) 3.10 (火)	①② 各大学、フミコム ③拓殖大学	①地域連携ステーションフミコムの呼びかけにより区内大学の地域関係の担当者有志が定例会合を実施・関係性を構築。 ②銭湯振興プロジェクトを共同で実施した。 ③会議参加大学の学生を集めた活動報告・交流会を拓殖大学で開催した。
小日向台町小学校ボランティア	ポータル公募学生	2025 (R7) 4.21 (月) } 2026 (R8) 3.31 (火)	文京区立小日向台町小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・小日向台小学校の放課後学習教室およびこどもひろばの有償ボランティア活動である。 ・放課後学習支援では、小学校低学年を対象として宿題やドリルを使った学習支援を行った。 ・こどもひろばでは、小学校全学年および未就学児を対象に、校庭を開放し、遊具の出し入れや子どもたちと遊びながら見守りを行った。
文京区での銭湯活性化に関する地域活動	ポータル公募学生	2025 (R7) 4.24 (木) } 2026 (R8) 3.31 (火)	大黒湯、ふくの湯、豊川浴泉、白山浴場	<ul style="list-style-type: none"> ・文京浴場組合からの依頼を受け、大学生の力によって「浴場を地域の居場所にする」「浴場を若い世代にも知ってもらう」ことを目標に立ち上げたプロジェクトである。 ・具体的な活動として、銭湯で行われるイベント内容の案内、営業情報をSNSで発信、定例会の開催等を行った。
大塚小学校放課後学習会ボランティア	ゼミ学生 (石渡ゼミ)	2025 (R7) 5.12 (月)～ 2026 (R8) 3.30 (月)	文京区立大塚小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・大塚小学校から、ゼミの学生に放課後学習会ボランティアの依頼があった。 ・期間中は学生が学習会のボランティアに参加した。
企業地域連携推進ネットワーク会議	地域交流センター	2025 (R7) 7.14 (月)	文化シャッター株式会社	<ul style="list-style-type: none"> ・区内企業と地域活動団体の連携事例紹介 ・意見交換 ・区内企業が本業を生かして地域団体とどう連携しているかについて事例紹介を通じて知り、今後の取り組みのヒントが得られるような機会が提供された。
第40回文京朝顔・ほおずき市運営への協力・出展	ゼミ学生 (土居ゼミ) + ポータル公募学生	2025 (R7) 7.19 (土)～ 7.20 (日)	傳通院	<ul style="list-style-type: none"> ・40回目を迎える「文京朝顔・ほおずき市」。例年行われている文京区の祭りである本イベントについて、学生が運営協力・出展を行った。 ・土居ゼミで子供向けのうちわへのお絵かきコーナーおよび飲料の販売を行い、センター公募の学生および地域交流課職員で、開会式の運営および朝顔の販売支援、フォトスポットの運営を行った。地域の方々と共に活動することで地域活性の支援と協調性の力を養うことができた。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
株式会社エムアイフードスタイル「クイーンズ伊勢丹」との産学連携による商品開発【第3弾】	ゼミ学生 (石渡ゼミ)	2025 (R7) 7.23 (水) 2026 (R8) 2.28 (土)	文京キャンパス内・ (株)エムアイフードスタイル本社、 クイーンズ伊勢丹 各店舗	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に続き、高品位スーパー「クイーンズ伊勢丹」を中心にフードビジネスを展開する(株)エムアイフードスタイル(三越伊勢丹グループ)と協働し、産学連携プロジェクトを実施した。 ・学生は、クイーンズ伊勢丹のプライベート商品となる新たな食品の開発と販売促進活動を行った。
文京区クールアースフェア	ゼミ学生 (安藤ゼミ)	2025 (R7) 8.2 (土)	文京シビックセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・文京区資源環境部主催で開催されている、環境系啓発イベント「クールアースフェア」にゼミとして出展した。
妊産婦・乳児救護所備品確認訓練	地域交流課 ほか	2026 (R8) 2.27 (金)	文京キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、備品確認訓練として、備蓄品・開設時の流れの確認を行った。
文京ハッピーベジタブルフェスタ2025	ゼミ学生 (石渡ゼミ)	2025 (R7) 9.10 (水)	文京シビックセンター1階展示室	<ul style="list-style-type: none"> ・文京保健所健康推進課主催の「文京ハッピーベジタブルフェスタ2025」にゼミとして出展した(13年目)。 ・開催日:9月10日(水) 開催内容:野菜の食育に関するパネル展示、体験コーナー、食育講座等 サブテーマ:「いろいろ野菜で心と体を健康に」
NPO法人日本成人病予防協会主催の食育講師育成事業による小学校への食育出張事業	ゼミ学生 (石渡ゼミ)	2025 (R7) 9.16 (火) 2026 (R8) 3.31 (火)	東京都内の小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人日本成人病予防協会が次世代へと健康の大切さを伝えていく若い世代の指導者を育成するプログラムを実施。 ・昨年度に引き続き、石渡ゼミの学生(健康管理能力検定2級の取得と日本成人病予防協会講師による実施試験に合格した者)が食育講師として、9月中旬以降、認定食育講師として都内の小学校で授業を行った。
東京流通センター内レストラン「TRCクラブアーコレード」【運営:テアールシーサービス(株)】のメニュー開発	ゼミ学生 (石渡ゼミ)	2025 (R7) 11.5 (水) 2026 (R8) 3.31 (火)	文京キャンパス内・ 東京流通センター内レストラン 「TRCクラブアーコレード」	<ul style="list-style-type: none"> ・本学学食の運営会社テアールシーサービス(株)から、東京流通センター内レストランの「社員の健康管理メニュー」開発を依頼された。 11/5に3年生9名が現地視察を行い、2月の提供開始に向け、今後も調査を重ねて利用者ニーズに合ったメニューを考案した。
①第6回『文の京書道展』の開催 ②『文の京書道特別展』の開催	文学部 香取潤哉 准教授	①② 2025 (R7) 11.10(月)~ 11.21(金)	①② 文京キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> ①本学の書道を愛好する学生の育成と発表機会の提供を目的として開催した。 ・本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・本学書道実習受講者および本学書道愛好者で出品を希望する者の書作品の展示 ②本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供を目的として開催した。 ・関東を中心とする主な高等学校に対する本学教職課程(書道)の認知 ・文京区との連携による生涯教育推進及び社会貢献

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京博覧会	地域交流センター	2025 (R7) 11.14(金)～ 11.15(土)	文京区役所	<ul style="list-style-type: none"> ・文京シビックセンター地下2階を会場に、区内の企業が出展・物販などを行うとともに区内の大学が出展しているイベント。 ・地域交流センターとしてポスター展示を行った。
「いきいきシニアの集い」への書道作品出展	跡見学園女子大学書道部	2025 (R7) 11.28(金)～ 11.29(土)	文京シビックセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・文京区高齢福祉課主催の「いきいきシニアの集い」へ学生の書道作品を出展した。 ・多世代交流の機会となった。
礫川マラソン	地域交流センター	2025 (R7) 11.30 (日)	文京区内走路	<ul style="list-style-type: none"> ・主催：礫川青少年健全育成会の地域のマラソンイベント。 ・宣伝水「あと水」の提供を行った。
未来の健康を作る食育プロジェクト2025	ゼミ学生(石渡ゼミ)	2025年 秋学期 複数回	都内の小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・石渡ゼミでは、一般社団法人成人病予防協会の大学生食育講師として「バナナうんちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」というテーマの食育出張授業を都内小学校で行っている。このプロジェクトは今年度で4年目を迎えた。 ・ゼミ3年生は春学期中に「健康管理能力検定2級(後援：文部科学省)」を取得し、実技試験にもパスして“食育講師”の認定を受けた。秋学期には小学校で食育授業を実施し、多くの児童に、健康的な排便習慣を身につけるためのコツを伝えた。
文化財防災イベント	跡見「学芸員」in 菊坂	2026 (R8) 3.28 (土)	菊坂跡見塾(旧伊勢屋質店)	<ul style="list-style-type: none"> ・文化庁と消防庁が定める文化財防火デーに合わせて、学生たちが文化財の防災について学んできた内容の実践訓練を行った。 ・消防署による消火器訓練。 ・参加者：本郷消防署、菊坂町会会員とその子供ほか
文京まちたいわフェス2026	土居センター長地域交流センター	2026 (R8) 2.15 (日)	文京キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> ・文京まちたいわフェス実行委員会/文京区まちづくり関係者有志が集う、区内地域活動等の発表イベント。本学まちづくり学科の学生も運営に協力した。 ・文京区まちづくり関係団体によるポスター展示や、交流イベント(基調講演および交流ワークショップ、音楽パフォーマンス、巨大アート作成等)が行われ約200名の参加があった。

新座市等

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
みんなのわこらぼまつり2025	ゼミ学生 (土居ゼミ)	2025 (R7) 5.31 (土)	和光市役所市民広場	<ul style="list-style-type: none"> 和光市市民活動推進課主催の「みんなのわこらぼまつり2025」に、本学学生が企画運営を担う「盛り上げ隊」として参加した。 学生たちは企画の検討および準備において、市民とともに複数回の打ち合わせを行い、当日も案内誘導やステージパフォーマンス等を行った。
和光市家庭教育支援事業「紙のリサイクル体験～オリジナルうちわを作ってみよう～」	ゼミ学生 (安藤ゼミ)	2025 (R7) 8.5 (火)	和光市南公民館	<ul style="list-style-type: none"> 本学と和光市の包括協定に基づき、家庭教育支援事業の一環として講座を開催した。 講師は、マネジメント学部安藤生大教授およびゼミ学生が担当し、小学生を対象に紙ごみ分別支援AIエコポンを用いたリサイクルや環境教育に関する授業と、再生紙でのうちわ作りを実施した。
にいざプラスカレッジ	渡邊大輔 准教授	2025 (R7) 9.6(土)、 9.27(土)、 10.11(土)、 10.18(土)、 11.1(土)、 11.8(土)、 11.29(土)	本学新座キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> 新座市生涯学習スポーツ課が主催する市民向け公開講座として実施した。 新座市内3大学(跡見、十文字、立教)が1コースずつ実施し、本学は「教養コース」を担当した。 文学部 渡邊大輔 准教授がコースコーディネーターを務め「映画批評入門講座～映画の魅力を味わい、文章で表現する～」という内容で実施した。
市内3大学学生と市長との懇談会	大学院生 (臨床心理学専攻)	2025 (R7) 11.14 (金)	十文字学園女子大学 図書館	<ul style="list-style-type: none"> 新座市では市民から市政に対する意見・提言を集める広聴制度を設けている。 この制度の更なる拡充を目的として、市内3大学に在学する学生が、市政に関する意見、提言等をする「市内3大学学生と市長との懇談会」が開催され、本学の学生も発表を行った。
和光市家庭教育支援事業「"表現力"に磨きかけるステップアップ朗読講座」	渡部英美教授	2026 (R8) 2.5 (木) および 3.5 (木)	和光市南公民館	<ul style="list-style-type: none"> 本学と和光市の包括協定に基づき、家庭教育支援事業の一環として講座を開催した。 講師は、文学部 渡部英美教授が務め、朗読初級～中級者を対象として全2回構成で行った。

その他の地域

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
横浜開港記念みなと祭「第73回 ザ よこはまパレード」国際仮装行列	ゼミ学生 (塩月ゼミ)	2025 (R7) 5.3 (土)	神奈川県横浜市	<ul style="list-style-type: none"> 横浜開港記念みなと祭「第73回 ザ よこはまパレード」国際仮装行列に、跡見学園女子大学塩月ゼミ有志/横浜はいからシルキレディース/フェリス学院大学のスペシャルコラボレーションチームとして、袴を着て参加した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
銭湯山車巡行 神田祭 2025	行こうよ! 文京 浴場♨ ～学生プロ ジェクト～	2025 (R7) 5.10 (土)	水天宮～お茶の水	<ul style="list-style-type: none"> 文京建築会コースにより文京区界隈の廃業した銭湯の部材を使ってつくり上げられた「銭湯山車」。前回に続き「神田祭」の附祭りに公式参加し、様々な出し物と共に、巡行を行った。ルート是水天宮から日本橋三越前、秋葉原を通り、神田明神へと宮入りをする。60名を超える銭湯を応援する参加者とともに、プロのチンドン屋の生演奏が付き、賑やかに、銭湯文化のPRをしながら練り歩いた。
農林水産省 農林 漁業発イノベーション 推進事業《地域活 性化型》補助事業 山形県西村山郡西川 町大井沢 地域づく り活動計画策定・実 証事業への協力	ゼミ学生 (土居ゼミ)	2025 (R7) 5.1 (木) } 2026 (R8) 3.31 (火)	山形県西川町大井沢	<ul style="list-style-type: none"> 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科(現:まちづくり学科)土居ゼミナールでは、設立当初から山形県西川町大井沢との協働事業に取り組んでおり、日常的な連携に加え、移住促進ガイドブックの制作(2017年度)、新規お土産品の制作(2021年度)、観光マップ制作(2022年度)を行ってきた。また、2023年度に大井沢では住民組織が中心となり、農水省の農山漁村発イノベーション推進事業《地域活性化型》に採択され、以後3年間をかけて地域づくり計画の策定と、実証事業を行っている。今年度は、地域づくりの実証事業の運営協力、情報発信方法の提案や実践を行った。
静岡県東伊豆町の産 官学地域活性化事業	ゼミ学生 (塩月ゼミ)	2025 (R7) 7.1 (火) } 2026 (R8) 3.31 (火)	静岡県東伊豆町	<ul style="list-style-type: none"> 観光デザイン学科塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と跡見学園女子大学が令和元(2019)年11月19日に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生の有志により地域活性化事業に携わっている。 7月 今年度事業に関するオンライン打ち合わせ 8月～9月 東伊豆町現地調査(1泊2日) 10月 現地調査のまとめ 11月 サッポロビール株式会社、株式会社ポーラとの打ち合わせ 12月～1月 東伊豆町現地調査(1泊2日) 2月 現地調査のまとめ・百貨店での雛のつりし飾り実演とカーネーション配布 3月 女性人材交流会での成果発表 現地調査では、東伊豆町の観光資源を視察した。また、今年度は引き続き、「雛のつりし飾り」の発信と継承、および特産品を用いた「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町」による商品開発事業を実施した。 株式会社ポーラとの連携も、新たに実施した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
NPO法人日本成人病予防協会主催の食育講師育成事業による都内小学校への食育出前授業	ゼミ学生 (石渡ゼミ)	2025 (R7) 9.16 (火) } 2026 (R8) 3.31 (火)	東京都内の小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・食や健康に関するセミナー・勉強会の企画運営や健康に関する知識を持った人材育成を行っているNPO法人日本成人病予防協会は、次の世代へと健康の大切さを伝えていく若い世代の指導者を育成するプログラムを実施している。 ・石渡ゼミ3年生は2022年から本プログラムの大学生食育講師として都内の小学校で授業を継続しており、今年も3年生が参加した。食育講師となるために必要な健康管理能力検定2級（一般財団法人全国健康管理能力検定協会主催）の試験には、すでに9名全員が合格している。実地試験に合格した学生が9月中旬以降、認定食育講師として都内の小学校で授業を行った。
北海道上富良野町と連携した地域活動	ゼミ学生 (篠崎ゼミ)	2025 (R7) 9.9 (火) } 2025 (R7) 9.10 (水)	北海道上富良野町	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道上富良野町は、美瑛町と富良野市という北海道を代表する観光地に挟まれた好立地であるにもかかわらず、目立つ観光資源が乏しいことから、観光客を増やすことができない点が課題となっている。そこで、まちづくりの視点から、まち歩きをしてもらいながら地域の魅力を知ってもらうイベントを学生中心に企画した。イベントは9月1日～15日の期間に継続して実施し、9～10日は実際に学生が現地に赴き、イベントの実際を見学し、地域に与える効果について実習を行った。
岩手県盛岡市と文京区学生と創るアグリノベーション事業	ゼミ学生 (篠崎ゼミ)	2025 (R7) 9.9 (火) } 2025 (R7) 9.10 (水)	岩手県盛岡市	<ul style="list-style-type: none"> ・本学と岩手県盛岡市の地域連携協定に基づき、「文京区学生と創るアグリノベーション事業」の一環として、今年度より新たなテーマである「若手畜産農家のグループ化に関する調査研究」を実施している。 ・調査研究活動の一環として、盛岡市内で新たなグループ化を目指している女性農業者と、今後グループ化が期待される農業者らにヒアリング活動等を行い、グループ形成を促進することを目的としている。 また、市担当職員らと今後の打合せを実施した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
東京国際映画祭インターンシップ参加	ゼミ学生 (松浦ゼミ)	2025 (R7) 10.27 (月) ┆ 2025 (R7) 11.5 (水)	日比谷・丸の内・銀座・有楽町の映画館及び、事務局内	<ul style="list-style-type: none"> この映画祭は、今年で38回目を迎えるアジアを代表する映画祭典として、欧米からアジアまで世界で知られている。 本年度初めて、この映画祭に、松浦ゼミの学生が参加し、西武文理大学の学生と一緒にチームを組み、連携することを目的に、全期間を通し執行運営部に所属し、ボランティア活動及びインターンシップを行った。活動内容は、執行運営部での映画界のプロの方々の様々なサポートや手伝い、監督や俳優の方々のサポート等、多岐に渡る中、社会での活動を体験しつつ多様な経験をした。
浦和美園まつり&花火大会スタッフ	ゼミ学生 (篠崎ゼミ)	2025 (R7) 10.19 (日)	埼玉県さいたま市浦和美園	<ul style="list-style-type: none"> 埼玉高速鉄道浦和美園駅周辺で行われる浦和美園まつり&花火大会については、今年11年目の開催となるが、コミュニティデザイン学科では第2回の開催より企画内容等への助言や実際にイベントへの参加を行い、地域活動を続けている。 今回は、イベントのうちワークショップ会場にて、跡見ブースを企画し、来場者との交流を図る企画を実施した。また、実行委員会企画であるスタンプラリー（来場者アンケートを兼ねている）の運営について、参加者の誘導や、盛り上げを学生スタッフとして実施した。

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 『ゆかり』に関する規程

第一条 この規程は、跡見学園女子大学学則第一条の二第3項に基づき、地域交流センター年次報告書『ゆかり』（以下『ゆかり』という。）の発行と編集に関する必要な事項を定める。

第二条 『ゆかり』は、原則として毎年一回発行する。ただし、必要な場合には、臨時号や合併号を発行することができる。

第三条 『ゆかり』に成果を発表することができるのは、原則として跡見学園女子大学（以下「本学」という。）の専任教員とする。ただし、以下の者は、地域交流センター長（以下「センター長」という。）が認める場合には、成果を発表することができる。

- 一 本学兼任講師
- 二 本学事務職員（学芸員・司書等）
- 三 本学に在籍する学生
- 四 本学の地域交流活動に関与する者
- 五 地域交流センター運営委員会（以下「センター運営委員会」という。）の議を経て、センター長が許可する者

第四条 『ゆかり』の編集及び発行については、地域交流センター（以下センターという。）がこれを行う。

第五条 投稿を希望する者は、センターが指定する期日までに「投稿申込書」に必要な事項を記入の上、届け出るものとする。また、原稿は、センターの指定した期日までに提出することとする。

第六条 原稿を依頼する者に対し、センターは「原稿依頼」を送付する。

第七条 投稿原稿は、センター運営委員会において審査を行い、採否を決定する。ただし、必要に応じて、投稿原稿の内容に関わる専門家に意見を徴することがある。

第八条 採用原稿が多数にのぼり、全編の掲載が困難な場合には、センター運営委員会が協議し対処する。

第九条 掲載原稿の著作権は執筆者に属し、センターは編集著作権を持つものとする。掲載原稿の複製権及び公衆送信権を含む著作権は、大学が参加するインターネット上の論文公開システムの中で無償公開されることを前提としたうえで、原則として執筆者に帰属する。それぞれの執筆者が学術的寄与のために複製または転用等を行う場合は、これを妨げないものとし、また、センターに許諾を求めることを要しないものとする。ただし、転用等を行う場合は、その内容が『ゆかり』に掲載済である旨を明記しなければならない。

第十条 この規程を実施するに当たり、必要な細則を定めることができる。

第十一条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附 則 本規程は、令和3年4月1日より施行する。

ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書7

発行日：2026年3月31日

発行者：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-8687 東京都文京区大塚1丁目5-2

電話：03-3941-7420

印刷：セントラル印刷(株)

ISSN：2435-516X

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書7

ゆかり

「ゆかり」巻頭言	小仲信孝
2025年度 跡見学園女子大学の地域交流活動の概況	土居洋平
跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について —2025年度の活動状況と課題の分析—	土居洋平
特集 2025年度地域交流活動	跡見学園女子大学地域交流センター
第6回「 ^{ふみ} ^{みやこ} 文の京書道展」開催報告	香取潤哉
銭湯からつなげる地域の輪	石田結菜
跡見「学芸員」in 菊坂 活動報告 菊坂跡見塾所蔵資料調査報告 (6).....	栗生はるか・新井美鈴・池亀柚衣・ 今井舞・大迫陽毬・黒木真悠・佐藤葵・ 鈴木未来・鈴木みづき・杉山恭子・ 玉野空・土田芽依・豊永陽彩・内藤日香理
旧伊勢屋質店地域交流イベント 「一葉忌に合わせた旧伊勢屋質店ガイド」.....	栗生はるか・新井美鈴・池亀柚衣・ 今井舞・大迫陽毬・佐藤葵・ 鈴木未来・鈴木みづき・杉山恭子・ 土田芽依・豊永陽彩・内藤日香理
旧伊勢屋質店特別企画展 「調べ、扱い、遺す —現代の私たちと旧伊勢屋質店—」開催の記録.....	土居洋平・長谷川裕子・鈴木みづき・ 新井美鈴・大迫陽毬・佐藤葵・ 鈴木未来・土田芽依・池亀柚衣・ 杉山恭子・豊永陽彩・小玉采奈・ 津島誇乃佳・黒木真悠
メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉.....	地域交流センター
2025年度の地域交流関連活動記録	地域交流センター
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程	